

香川県埋蔵文化財センター年報

平成26年度

2016. 1

香川県埋蔵文化財センター

はじめに

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設置されました。

平成26年度は国道11号大内白鳥バイパス建設、国道438号道路改築、県道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び過年度発掘の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管・整理、普及啓発事業、讃岐国府跡探索事業などを実施し、これらの調査によって得られた多くの成果等をもとに、展示や、広報誌の刊行、学校での出前授業や考古学体験講座を行い、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

本書は、これらの平成26年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化への理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年1月

香川県埋蔵文化財センター

所長 真鍋昌宏

目 次

はじめに

I 組織・施設・決算	1
1. 香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2. 施設の概要	3
3. 決算の状況	3
II 事業概要	4
1. 埋蔵文化財調査事業	4
西村遺跡	6
内間遺跡	10
太田原高州遺跡	15
旧練兵場遺跡	17
岸の上遺跡	19
2. 普及・啓発事業	24
(1) 展示	24
(2) 現地説明会・地元説明会	25
(3) 講師の派遣	25
(4) 小学校との連携授業	26
(5) 夏休み子どもミュージアム	27
(6) 考古学講座	27
(7) 文化ボランティア活動	28
(8) 四国新聞への連載	28
(9) 資料の貸出・利用	28
(10) 職場体験学習・インターンシップ	28
(11) 刊行物	28
(12) ホームページ	28
3. 讃岐国府跡探索事業	29
III 讃岐国府跡第32次調査成果の概要	31
IV 調査研究	41
讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(1)	
9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種	41
研究ノート 高松城はいつ造られたか	93

挿 図 目 次

第1図 発掘調査遺跡位置図	5	讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告	
西村遺跡		第16図 讃岐国府周辺の歴史的環境	33
第2図 遺跡位置図(1/25,000)	6	第17図 讃岐国府跡における	
第3図 遺構平面図		既往の調査区と地形	34
第1面、第2面(S = 1/400)	9	第18図 区画想定範囲と	
内間遺跡		大型建物の出土地点	35
第4図 遺跡位置図(1/25,000)	10	第19図 讃岐国府跡32次	
第5図 遺構平面図 第1面	13	調査遺構配置図	36
第6図 遺構平面図 第2面	14	第20図 32-1区 大型建物1	
田原高洲遺跡		平・断面平面	37
第7図 遺跡位置図(1/25,000)	15	讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎	
第8図 遺構配置図	16	作業(I)	
旧練兵場遺跡		第21図 遺跡位置図	45
第9図 遺構配置図(1/160)	17	第22図 IV期変遷図(暫定版)	74
第10図 遺構平面図	18	第23図 V期変遷図(暫定版)	75
岸の上遺跡		研究ノート	
第11図 遺跡位置図(1/25,000)	19	高松城はいつ造られたか	
第12図 基本層序	19	第24図 天守台下層遺構	95
第13図 第1面 遺構平面図	22	第25図 天正～文禄期と推測される	
第14図 第2面 遺構平面図	23	軒平瓦	96
第15図 第3面 遺構平面図	23	第26図 初期高松城・城下と総構	100

* 遺跡位置図は国土地理院地形図(1/25,000)を使用しました。

写 真 目 次

西村遺跡		写真8 据立柱建物柱穴	
写真1 中世遺構群 (溝状遺構より右側)	6	半截状況(南から)	10
写真2 対象地中央部全景	7	写真9 流路1完掘状況(北東から)	11
写真3 対象地東半部全景	7	写真10 流路1 茶臼出土状況(東から)	11
写真4 鋳冶炉・溶解炉	7	写真11 古代大溝(東から)	11
写真5 溝状遺構遺物出土状況	7	写真12 大溝	
写真6 壇穴住居跡	8	上層遺物出土状況(東から)	12
写真7 壇穴住居跡主柱穴内柱材	8	写真13 流路2 流路底 木枠付土坑	12
内間遺跡		写真14 SH02主柱穴内	

土器出土状況(南から)	18	讃岐国府跡第32次調査成果の概要	
写真15 調査区 完掘状況(東から)	18	写真25 32-1 区 全景 北から	38
写真16 SH02土器出土状況(東から)	18	写真26 32-1 区 大型建物 1(平安時代) 全景 東から	38
岸の上遺跡			
写真17 調査区全景 南から	19	写真27 32-1 区 建物 2(平安時代)、 柱穴列 1・2(平安時代) 全景	
写真18 2区 西壁断面	20	東から	39
写真19 4区 北壁断面	20	写真28 32-2 区 建物 3(飛鳥時代末~奈良 時代初)、柱穴列 4(平安時代)	
写真20 2区3区 2面 道遺構 東から	20	全景 南西から	40
写真21 2区 2面 垂直写真	21	写真29 32-3 区 柱穴列 5(平安時代)	
写真22 2区 柱穴列 南から	21	全景 北から	40
写真23 2区 2面掘立柱建物 北から	21		
写真24 4区 3面 総柱建物 北から	22		

表 目 次

I 組織・施設・決算		第14表 学校への講師派遣一覧	25
1. 香川県埋蔵文化財センターの組織		第15表 講演等への 講師派遣一覧	26
第1表 職員一覧	2	(4) 小学校との連携授業	
3. 決算の状況		第16表 坂出市立金山小学校との 連携事業一覧	27
第2表 発掘調査決算	3	第17表 坂出市立府中小学校との 連携事業一覧	27
第3表 整理・報告決算	3	(5) 夏休み子どもミュージアム	
第4表 管理運営費等決算	3	第18表 夏休み子どもミュージアム 実施事業一覧	27
II 事業概要		(6) 考古学講座	
1. 埋蔵文化財調査事業		第19表 考古学講座一覧	27
第5表 発掘調査遺跡一覧表	4	(9) 資料の貸出・利用	
第6表 遺跡の概要一覧表	4	第20表 資料貸出・利用一覧	28
第7表 整理・報告遺跡一覧	5	(10) 職場体験学習・インターンシップ	
第8表 刊行報告書一覧表	5	第21表 職場体験学習一覧	28
2. 普及・啓発事業		IV 調査研究	
(1) 展示		讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基 礎作業(I)	
第9表 展示一覧	24	第22表 I～X III期の抽出資料	48
第10表 入館者数一覧	24	研究ノート 高松城はいつ造られたか	
第11表 センター外展示一覧	25	第23表 柴城期高松城における 瓦の変遷	97
(2) 現地説明会・地元説明会			
第12表 現地説明会・ 地元説明会一覧	25		
(3) 講師の派遣			
第13表 体験講座への 講師派遣一覧	25		

第24表	高松築城の履歴と 生駒氏の動向	102
第25表	桜馬場・西ノ丸 南端の変遷	104

第26表	初期高松城絵図 系統推定図	107
------	------------------	-----

図 版 目 次

IV調査研究

1. 讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(1)	
図版1 多肥北原西遺跡 S D0501	76
図版2 郡家一里屋遺跡 S D12(1)	77
図版3 郡家一里屋遺跡 S D12(2)	78
図版4 郡家一里屋遺跡 S D13(1)	79
図版5 郡家一里屋遺跡 S D13(2)	80
図版6 川津東山田遺跡 I 区 S D3109	81
図版7 下川津遺跡 第2低地帯 流路2	82
図版8 下川津遺跡 SEⅢ04(1)	83

図版9 下川津遺跡 SEⅢ04(2)	84
図版10 深池窯跡 灰原	85
図版11 讃岐国分寺跡 S K25,26	86
図版12 前田東・中村遺跡 E区 S D19(1)	87
図版13 前田東・中村遺跡 E区 S D19(2)	88
図版14 前田東・中村遺跡 E区 S D19(3)	89
図版15 前田東・中村遺跡 E区 S D19(4)	90
図版16 前田東・中村遺跡 E区 S K04	91
図版17 讃岐国府跡32次 1トレンチSK1003	92

I 組織・施設

1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

(1) 組織



(2) 職員

所 属	職 名	氏 名
所 長		真鍋 昌宏
次 長		前田 和也
総務課	課長(兼務)	前田 和也
	主任	慎野 英二
	主任	寺岡 仁美
	主任	高木 秀哉
	主任	中川 美江
	主任	岩崎 昌平
	課長	森 格也
調査課	主任文化財専門員	西村 尋文
	主任文化財専門員	佐藤 竜馬
	文化財専門員	信里 芳紀
	文化財専門員	小野 秀幸
	技師	真鍋 貴匡
	主任	西谷 敬司
	嘱託	藤井 葉穂子
	嘱託	今井 由佳
	嘱託	井上 加奈子
	嘱託	名倉 美保
資料普及課	嘱託	森 后代
	嘱託	脇 恵
	課長(兼務)	森 格也
	主任文化財専門員	森下 英治
	主任文化財専門員	藏本 晋司

資料普及課	文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	山元 素子
	文化財専門員	乗松 真也
	嘱託	岡崎 江伊子
	嘱託	中野 優美
	嘱託	佐々木 博子
	嘱託	加藤 恵子
	嘱託	香西 栄理
	嘱託	西山 佳代子
	嘱託	市川 孝子
	嘱託	山地 滉理子
	嘱託	猪木原 美恵子
	嘱託	葛西 萬
	嘱託	高橋 千恵
	嘱託	甲斐 美智子
	嘱託	牧野 香織
	嘱託	土居 乃里子
	嘱託	大林 真沙代
	嘱託	原 節子
	嘱託	合田 和子
	嘱託	西本 智子
	嘱託	竹村 恵子
	嘱託	田中 沙千子
	嘱託	川井 佐織
	嘱託	森國 愛子
	嘱託	正本 由希子
	嘱託	岡本 光代
	嘱託	青屋 真理
	嘱託	伊藤 真紀
宮城県派遣	主任文化財専門員	木下 晴一

第1表 職員一覧

2. 施設の概要

(1) 所在地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積 11,049.23m²

(3) 建物構造・延床面積

①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23m ²
②分館	鉄骨造・2階建	337.35m ²
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32m ²

④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33m ²
⑤車 車	鉄骨造・平屋建	29.97m ²
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00m ²

3. 決算の状況

(単位:千円)					
原因者	遺跡名	決算	原因者	遺跡名	決算
国土交通省	西村遺跡	23,996	国土交通省	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	11,805
	内間遺跡	18,172	善通寺病院	旧練兵場遺跡	28,754
道路課	太田原高州遺跡	16,810	道路課	十川東・平田遺跡	7,299
	岸の上遺跡	37,837		本村中遺跡	1,194
	旧練兵場遺跡	3,104		川北遺跡	3,795
				多肥北原西遺跡・ 太田原高州遺跡	12,782
				東坂元北岡遺跡	5,039
				飯山北土居遺跡	1,489
				住屋遺跡	9,586
				兀塚遺跡	1,217
			農業経営課	西末則遺跡	6,157

*職員人件費は除く。

第2表 発掘調査決算

(単位:千円)		
事業名	決算	
管理運営費等	管理運営費	
	職員給与費	
	讃岐国府跡探索事業	
	センター改修事業	
合計	168,096	

第4表 管理運営費等決算

第3表 整理・報告決算

*職員人件費は除く。

II 事業概要

1. 埋蔵文化財調査事業

事業概要

調査課は、2班体制で国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備に伴う5遺跡の発掘調査を行うとともに、讃岐国府跡探索事業に係る発掘調査を1班が担当した。資料普及課は、4班体制で国道バイパス建設、善通寺病院統合、県所管国道整備、県道整備、県農業試験場移転事業に伴う12遺跡の整理及び報告書の作成を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間
国土交通省 バイパス建設	国道11号大内白鳥	西 村 遺 跡	東かがわ市西村	1,577	6月～11月
	内 間	内 間 遺 跡	東かがわ市町田	1,704	6月～9月
道路課 善通寺詫問線	太田上町志度線	太田原高州遺跡	高松市太田上町	1,413	4月～5月
	旧練兵場遺跡	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	112	9月
	国道438号	岸の上遺跡	丸亀市飯山町	2,104	11月～3月
合 計				6,910	

第5表 発掘調査遺跡一覧表

遺 跡 名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
西 村 遺 跡	弥生時代の集落跡 古代の集落跡と生産遺構。	弥生時代の竪穴建物跡。 弥生時代の流路跡。 古代の掘立柱建物跡。 古代の鍛冶炉と溶解炉。 弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、硯、帶金具、鐵滓、銅滴。
内 間 遺 跡	弥生時代～中世の集落跡、河川跡。	弥生時代の溝。 中世の掘立柱建物跡、井堰。 弥生土器、土師器、須恵器、木製品。
太田原高州遺跡	弥生時代～古代の集落跡。	弥生時代の貯蔵穴。 古墳時代の竪穴建物跡。 古代の掘立柱建物跡。 弥生土器、土師器、須恵器、トンボ玉、鉄器、スラグ、炭化米。
旧練兵場遺跡	弥生時代～古代の集落跡	古墳時代の竪穴建物跡。 古代の溝状遺構。 弥生土器、土師器、須恵器。
岸の上遺跡	古墳時代～中世の集落跡。 古代の道路遺構	古墳時代の竪穴建物跡、 古代の掘立柱建物跡、櫛列。 古代の道路遺構。 中世の井戸跡。 土師器、須恵器、斎串。

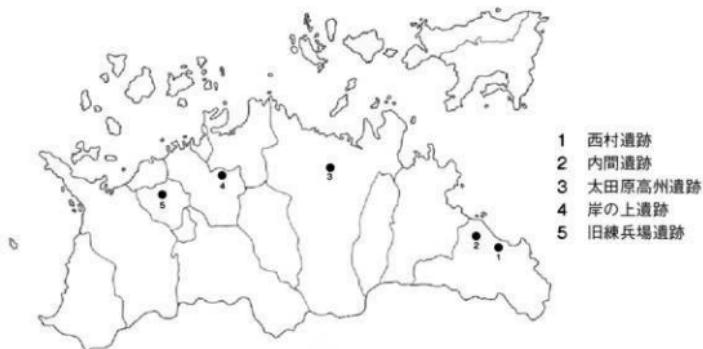
第6表 遺跡の概要一覧表

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
国 土 交 通 省	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	東かがわ市川東	6月～11月
四 国 お と な と こ ど も の 医 療 セ ン タ ー	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	4月～3月
道 路 課	十川東・平田遺跡	高松市十川東町	12月～3月
	本村中遺跡	三豊市詫間町	3月
	住屋遺跡	東かがわ市川東	10月～2月
	川北遺跡	東かがわ市小海	10月～11月
	多肥北原西遺跡	高松市多肥上町	8月～9月
	太田原高州遺跡	高松市太田上町	4月～7月
	東坂元北岡遺跡	丸亀市飯山町	1月～3月
	飯山北土居遺跡	丸亀市飯山町	12月
	兀塚遺跡	高松市檀紙町	平成24・25年度
農 業 経 営 課	西末則遺跡	綾歌郡綾川町	4月～6月

第7表 整理・報告遺跡一覧

書名
独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 旧練兵場遺跡V
県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 太田原高州遺跡1
県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡
県道三木国分寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 兀塚遺跡
香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 西末則遺跡V
讃岐国府跡発掘調査概報 平成25年度香川県内遺跡発掘調査
高松市茶臼山古墳

第8表 刊行報告書一覧表



第1図 発掘調査遺跡位置図

にしむらいせき 西村遺跡

西村遺跡は東かがわ市西村に所在する遺跡であり、楠谷川を挟んで東西に広がる。今年度は楠谷川の西側部分を調査し、弥生時代前期末～中期初頭の集落跡と河川、古代の集落跡を検出した。今年度対象地の立地を俯瞰すると、南北方向に延びる丘陵の東斜面部に所在する。この東側に先述の楠谷川が北流しており、対象地東半はこの氾濫原上に立地する。一方、西半は丘陵上に相当するが、後世の土取によって丘陵が大きく削平され平坦化している。そのため、遺構はほぼ皆無である。残存する遺構面は大きく2面に分かれ、第1面は中世～古代、第2面は弥生時代中期初頭に位置づけられる。

古代から中世（第1面）

中世の遺構は対象地の北東隅に集中し、溝・柱穴・井戸を確認した。溝は大小2条が東西方向に掘削される。主軸方位はE11°Nを測り、概ね周辺の地割に近似する。検出部中央付近では溝幅が広がり、溝底部も深く掘り下げられており、水を滞留させる機能を持たせていた可能性がある。東端は調査区東端付近で浅く消滅する。本来一定の幅・深さで掘削されたものが、後世に削平された結果と考えられる。柱穴群の検出状況からみて、対象地の北側に当該期の遺構が広がる可能性が指摘できるが、大溝の残存状況からみると、東へ広がる部分に関しては後世の削平により遺構の残存状況は芳しくないと考えられる。出土遺物が少量で詳細な時期は不明であるが、概ね14世紀代のものであると考えられる。

古代の遺構は、東半は全てにおいて確認できた。対象地南辺・東辺においてやや密度が低くなっている、対象地の中心付近が遺構の集中する部分であると考えられる。検出した遺構は柱穴、溝状遺構を中心である。柱穴は長軸が約1m近い椭円形あるいは不整形な形状を呈するものが多い。大半の柱穴が柱材を抜き取られ、その際の抜き取り痕が埋没した形状を反映している。柱痕を留めるものがあり、概ね0.2mの太さの柱材が用いられたものが多く認められた。比較的残存状況の良好なものが多く、深さが0.5m以上残存するものが多く認められた。これらの柱穴群は規則的に配置されており、大型の建物を構成すると考えられる。調査時には5棟の大規模建物を含む10数棟の建物を復元していたが、現在柱穴の組み合わせを再検討している。溝状



図2 図 遺跡位置図 (1 / 25,000)



写真1 中世遺構群(溝状遺構より右側)

遺構については幅広で浅いものがほとんどで、上層は後世の削平の影響を受けていると考えられる。いずれの溝状遺構も直線的に掘削され、部分的に直角に屈曲することから、区画施設として掘削された可能性が高いが、建物を区画するのか空間を区画するのか、今後の検討課題として留意すべき点である。これらの遺構はいずれも概ね10世紀代を中心とした遺物が埋土中に含まれ、当該期のものであると考えられる。なお、これらの遺構は小片化した土器を多数含む最低2層に分層可能な包含層を切り込んでおり、建物を建てる前に整地を行った可能性が想定できる。

遺物については土師器・須恵器・黒色土器の供膳具を主体とし、若干の煮沸具を伴う。これらとともに、灰釉陶器椀・壺、綠釉陶器椀といった搬入土器や円面硯・風字硯・転用硯が小片で出土している。また、漁網用土錘が約100点と目立って出土している。なお、特筆すべきものとして鍛冶炉・溶解炉の存在があげられる。鍛冶炉は8基確認でき、うち1基からは椀形滓が原位置を保って出土した。これ以外の残存状況は不良である。炉壁などの構造は削平により残存しないものの、周辺の包含層から焼けた面を持つ土壁片が出土しており、これらが炉壁であった可能性が考えられる。また、整地層からは鉄滓・銅滓の他、小型の鉄製品・銅製品が出土している。製品類に関しては素材として搬入されたものである可能性が考えられる。



写真2 対象地中央部全景



写真3 対象地東半部全景

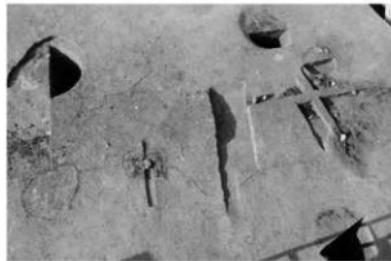


写真4 鍛冶炉・溶解炉



写真5 満状遺構遺物出土状況

弥生時代中期（第2面）

第2面は、少なくとも弥生時代前期末までに埋没した河道の上面に形成される。竪穴住居跡1棟の他に土坑7基・柱穴5基を確認した。竪穴住居跡は直径7.5mの円形を呈し、深さは約0.3m程度残存している。断絶があるものの概ね全周に壁溝が巡っていたと考えられる。ベッド状遺構は確認できなかった。床面上で10基の柱穴と1基の中央土坑が確認でき、柱穴のうち3基からは柱材が確認できた。また、床面上で小型鉢などの土器類やサスカイト製石器類が少量出土した。他に、北側において大型の落ち込みを、南側においては土坑群を確認しており、他の住居跡であった可能性が想定できる。昨年度調査した楠谷川東側でも当該期の溝状遺構が確認できている。概ね弥生時代中期初頭のものと考えられる。なお、竪穴住居埋没後は再度旧河道による埋積があり、ある程度平坦化した後に第1面が形成されたと考えられる。埋積の時期は竪穴住居跡の時期と大きく差はないと考えられる。

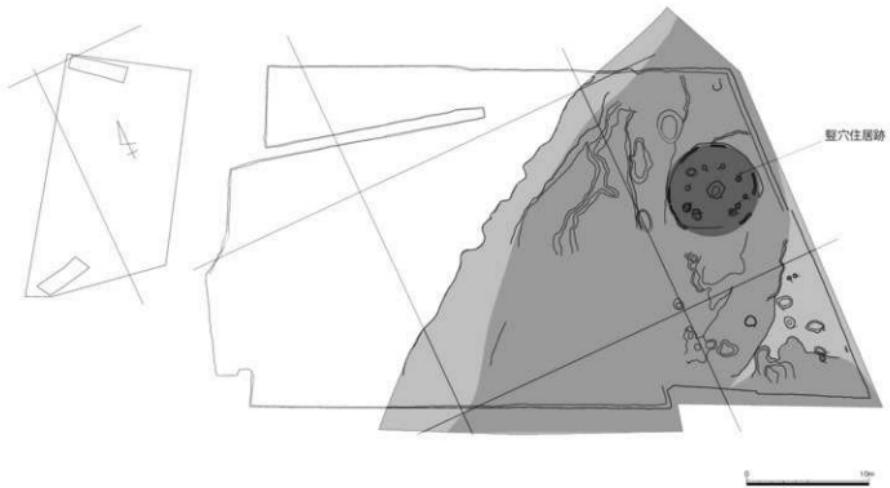
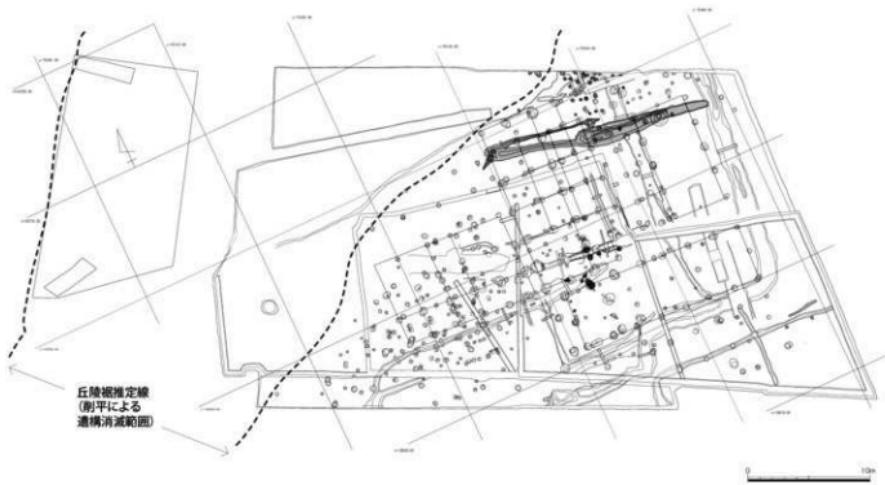
最後に各遺構面について簡単にまとめておく。第1面では大型建物と区画溝を伴う比較的整然とした柱穴群が確認できており、概ね10世紀代のものであると考えられる。これらは各柱穴の規模が大型であること、建物を建てる際に整地を行うことなどから一般集落とは異なる性格をもつものと考えられる。また、鍛冶炉・溶解炉の存在から金属器生産に関わりがあり、遠隔地産の陶器や硯の存在から有力な識字層に関わる存在をうかがうことができる。また、遺跡北方約300mを推定南海道が通ることから、西村遺跡はこれに近接した物資の流通や生産に関与する地域の有力者の拠点としての性格を考えておきたい。第2面については同時期の周知の埋蔵文化財包蔵地「落合遺跡」に近接しており、弥生時代中期初頭における当該期の集落を考えるうえで重要な成果となる。



写真6 竪穴住居跡



写真7 竪穴住居跡主柱穴内柱材



第3図 遺構平面図 上段：第1面、下段：第2面（S = 1/400）

うちまいせき 内間遺跡

本遺跡は東かがわ市町田に所在する弥生時代終末期から中世にかけての遺跡である。大内平野南東にある那智山（標高271m）より北に派生した丘陵裾と、北は北流する番屋川に挟まれ、南北が狭く東西に広い斜面地に位置する。

遺跡が位置する周辺は、南に14世紀に増沢僧正によって勧請され山岳信仰の対象となった山々や、東には推定南街道のルートの一つとされる田面峠、北には番屋川と北川に運ばれた土砂で形成された自然堤防を利用した長尾街道が近世に整備されるなど、様々な歴史が積み重なる地域である。

遺構埋土及び遺構面は、花崗岩の風化土が基本となり、成因は那智山をはじめとする花崗岩で構成された周囲の山々である。基本層序は花崗岩の風化面が1区南側に局所的に存在するものの、下位に粘質土からシルト、上位に花崗岩に由来する粗砂が基本的な基盤層である。遺構面は上位の基盤層に成立しており、2面の遺構面を確認した。

また調査地は1区南壁に露出した花崗岩と上位の堆積層との境界からの湧水や、中世の遺構に木製品が良好に残存するなど、湿潤な土地であったことがわかる。

第1面 中世（13世紀から15世紀）

遺構の重複関係から大別2時期あり、自然流路1は中世の全期間存在したと考えられる。

中世前半（13世紀）は掘立柱建物2棟・柱穴列・鶴溝及び灌漑水路がある。復元できた掘立柱建物は2棟あるが柱材が残存する柱穴も数基残されており、さらに建物を復元できる可能性がある。1区中央で検出した掘立柱建物1（SB001）は2間×3間の南北棟で、桁行に庇が付属する。また、北の桁行1間（約2.1m）は他の桁行1間（約1m）よりも半分程度と狭い。建物の北と東に柱穴列があり、建物の北側と柱穴列の距離が30cmしか離れていないことも建物北側の1間が狭い原因と考えられるが、現段階では建物と柱穴列が同時併存していたかは不明である。掘立柱建物1の柱穴抜き取りから和泉型瓦器碗・中国産青磁が出土している。

鶴溝は浅いU字状を呈し、周囲の傾斜に合わせて南北方向に掘削されている。1区の北から南



第4図 遺跡位置図 (1 / 25,000)

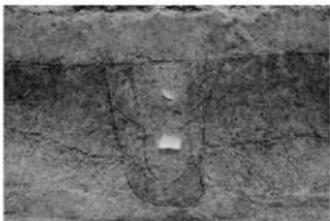


写真8 掘立柱建物柱穴
半裁状況（南から）

東にかけて検出した。灌漑水路（SD085等）は1区及び2区では南側の丘陵裾に沿って、弧状に掘削されており、埋没と開削が繰り返されている。

中世後半（14世紀から15世紀）には大型土坑2基がある。これらの遺構は基盤層下位のシルト層まで達しており、遺構中位の壁面には還元された部分が確認できることから一定期間滞水環境にあったと考えられる。大型土坑1（SX005）は長さ3.2m×幅2.3mの南北に長い長方形、大型土坑2（SX004）は、直径1m深さ60cmの寸胴形を呈し、どちらも下位は自然堆積、上位は埋め土を確認している。

中世の全期間にわたる自然流路1（SR001）は、蛇行を繰り返していたようで1区北西隅で部分的に検出したのみである。流路幅は推定幅約6mから7mと考えられ、北肩は調査区外へと延びる。流路南肩の一部には横木と縱杭の二本組とその間に花崗岩の塊石を置いた護岸を検出した。流路の堆積は大別3層ある。下層は黒褐色を呈する粘質土を主体とし、下層堆積後に護岸が設置される。中層は植物遺体が厚く堆積し、調査地内の全面にわたり堆積層の広がりを確認している。上層は砂質で埋没していた。中層の植物遺体には菱などの水流が活発でない場所に生育する植物が多く含まれており、中層の段階で水流が著しく低下したと考えられる。出土遺物は土師質壺、中国産白磁・青磁、和泉砂岩製茶臼などがある。



写真9 流路1完掘状況（北東から）



写真10 流路1 茶臼出土状況（東から）

第2面 古代（8世紀）、弥生時代終末期から古墳時代初頭

古代の遺構は1区西端から2区の丘陵裾の形に沿って灌漑水路（SD096）および溝群がある。SD096は幅3.6m深さ1mのV字形を呈する。溝の底面が一部下刻しているなど水流が激しかったことがわかる。灌漑水路（SD096）の各層からは畿内系土師器や須恵器蓋や壺が出土し、また石包丁や弥生時代終末期から古墳時代の土器など極端に古い時期の遺物が少量混じっている。古い時期の遺物は周囲からの混入と考えられ、埋没は8世紀代と考えられる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構は自然流路2条と土坑1基がある。1区の北半分は自然流路で占められ、南には



写真11 古代大溝（東から）

北の本流に流れ込む浅い落ち込みを検出した。自然流路3 (SR003) は1区北西からやや南に流下し、自然流路2 (SR002) は1区北西からほぼ真東を流れ、重複関係はSR003 (旧) → SR002 (新) の関係にある。また、自然流路2 (SR002) の底面に土坑 (SK005) を1基検出した。土坑1は上辺に自然木に近い細長い木材を3辺に設置していた。1辺は未確認である。土坑の性格がわかる遺物は出土していないが、流路の底面に掘削されていることからも、水を利用した木製品などの貯蔵穴の機能が考えられる。



写真12 大溝 (SD096) 上層遺物出土状況 (東から)



写真13 流路2 流路底 木枠付土坑

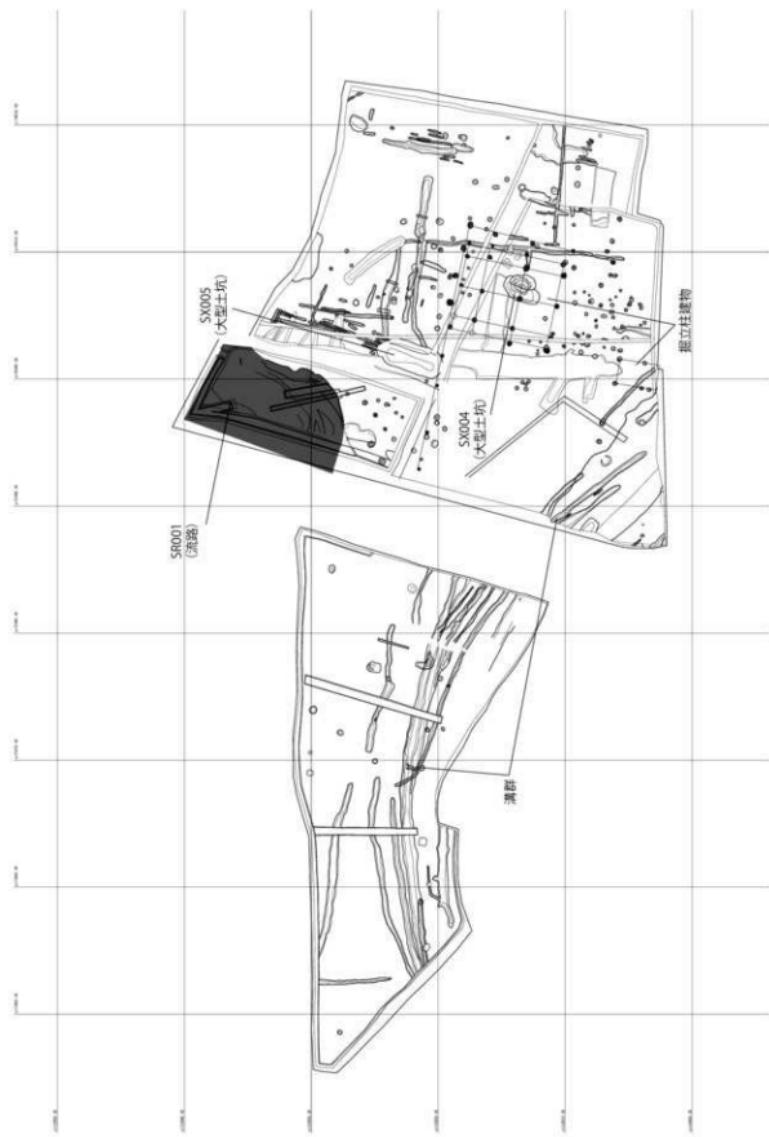
まとめ

①自然流路3条は遺跡が位置する北約50mを北流する番屋川の各時代の流れの一端をとらえてい るものと考えられる。また、番屋川の上流から引き込んだと思われる丘陵裾を利用した灌漑水路 が、古代から現代まで同じ場所を踏襲していることからも、川と密着して生活していた様子を示 している。

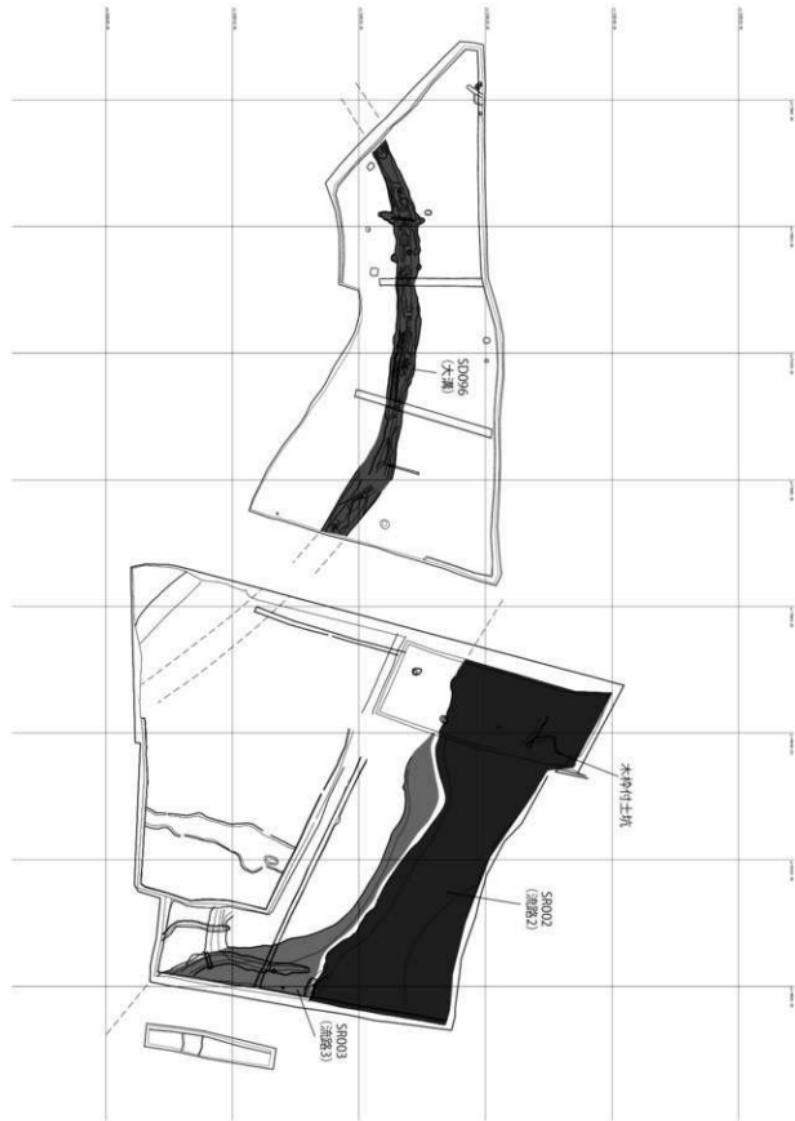
②弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が自然流路の最上層から出土しているが、当該期の生 活関連遺構は確認できていない。1区が湿潤な土地条件であったことからも、より標高の高い高 燥な土地である南もしくは西の緩やかな斜面地が当該期の集落域と推定される。

③次年度調査地はさらに西側の小高い部分の調査となる。灌漑水路網や、試掘調査で検出された 掘立柱建物などが調査の対象となり、本次調査で確認できなかった集落の広がりに期待が寄せら れる。

調査終了後の平成26年11月26日（日）、調査地近隣の丹生地域の物産展やサークル活動の成果 を発表する「^ヒ丹生コミセンふれあいまつり」に参加し、出土遺物や調査中の写真などのパネルを 使いながら職員2名による解説を随時行った。



第5図 内間遺跡 第1面



第6図 内間遺跡 第2面

おおたはらたかすいせき
太田原高州遺跡

高松平野西部を北流する香東川東岸の扇状地上に立地する。遺跡の標高は約27mで周囲は市街化が進むが、条里型の方格地割は比較的明瞭に残る。当該県道は地割に沿って東西方向に計画され、予定地内の主たる調査は平成22・23年度に実施したが、小刻みな残地1,413m²の発掘調査を今回実施したものである。

表層の整地土や耕作土を除去すると、中世以後の包含層が約10cmの厚さで堆積する。さらにそれを除去すると礫混じりの黄灰色系シルト層がみられる。場所によってはシルト土壤を含まず、礫、粗砂のみで構成する土層もある。これが弥生時代中期以降の基盤層である。今回の調査地内では明確な河川域は認められず、ほぼ全域が微高地であった。

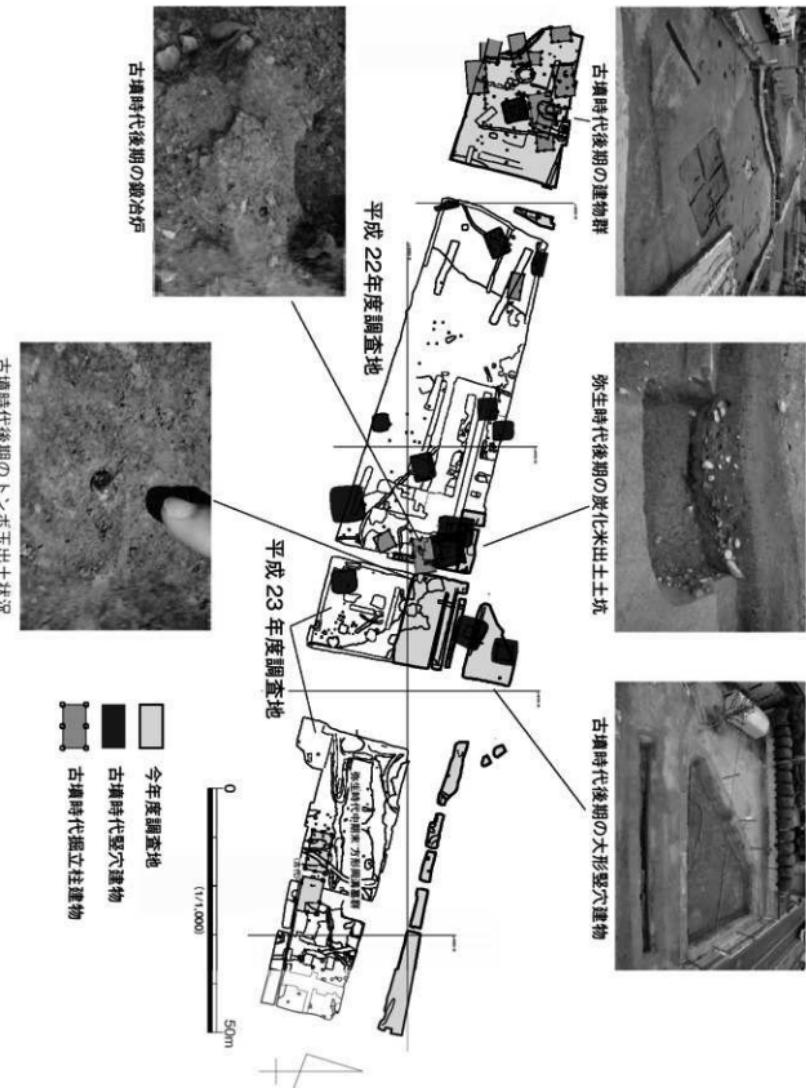
平成23年度に調査した弥生時代中期後半の方形周溝墓群の北側にあたる部分を精査したが、削平著しく周溝墓関係の遺構は遺存していなかった。平成22年度に古墳時代の竪穴建物群を検出した隣接地では、新たに一辺約6mの大型の竪穴建物1棟を検出し、前回建物の未調査部分を調査した。そのほか、2×1間(7.2×4.2m)の建物の周間に周溝を巡らせる特異な遺構を検出した。強く被熱した鍛冶炉と推定される遺構が伴い、同じ周溝に埋まれた浅い落ち込みでは馬具を含む小形の鉄片や鉄滓が出土する。金属器工房機能が推測される遺構群である。周囲ではガラス製のトンボ玉、土玉といった装身具も出土した。ここからやや西に離れた調査区では竪穴建物とともに複数の掘立柱建物がまとまって分布する。これら6～7世紀の古墳時代集落は同時期に西に隣接する大下遺跡と比べると、建物の規模や出土品が格上である。

そのほか、弥生時代後期後半の土坑では炭化した米塊が多数出土した。穀や木を伴う脱穀前の貯蔵米である。当該土坑は次年度に調査を実施する調査区に連続する。また、古墳時代の遺構に混在して弥生時代のものと考えられる銅鏡が1点出土した。高松平野にあっては、後期初頭の上天神遺跡に次ぐ2例目である。

なお、調査中盤の5月10日に現地説明会を実施した。



第7図 遺跡位置図 (1 / 25,000)



第8図 太田原高州遺跡 遺構配置図

きゅうれんべいじょういせき 旧練兵場遺跡

普通寺詫問線改修工事に伴う旧練兵場遺跡の発掘調査である。調査範囲は112mと狭いながら、中世（14世紀か）の溝1条、古墳時代前期前半の竪穴建物1棟・古墳時代後期の竪穴建物4棟、古代8世紀～9世紀の溝1条のほか柱穴を多数検出した。

調査地の基盤層は西へと進むにつれ標高が下がり、西方に位置する遺構ほど良好に現存していた。一方調査区東方は近現代の改変が著しく、SH04、SH05、SD03はそのほとんどが攪乱で壊されている状態であった。

本次調査は、旧練兵場遺跡の中でも南端にあり、微高地の最高所付近に位置する。この付近は今まで発掘調査が行われておらず、微高地上に展開する遺跡の広がりをつかめたことは大きな成果といえる。

古墳時代

SH02は調査区東部で検出した一辺約5mの方形の竪穴建物である。廃絶時期は古墳時代前期前半と考えられる。埋土中に多量の土器があり、主柱穴の抜き取りまで連続している状況確認した。廃絶時の投棄と考えられ、一括資料として良好な資料といえる。

他の竪穴建物は時期決定できる資料が乏しいが、立ち上がりが低い須恵器杯などが埋土および貼床から検出されていることから、古墳時代後期以後に廃絶したものと考えられる。

SD08は調査区西端で検出した大溝である。東側の微高地からやや下った位置に所在する。しかしながら既往調査でも大溝の延長線上にあたる部分で溝を確認していないことから、溝の方向は不明瞭である。溝底からは7世紀中葉以後の完形の須恵器杯が出土した。

古代

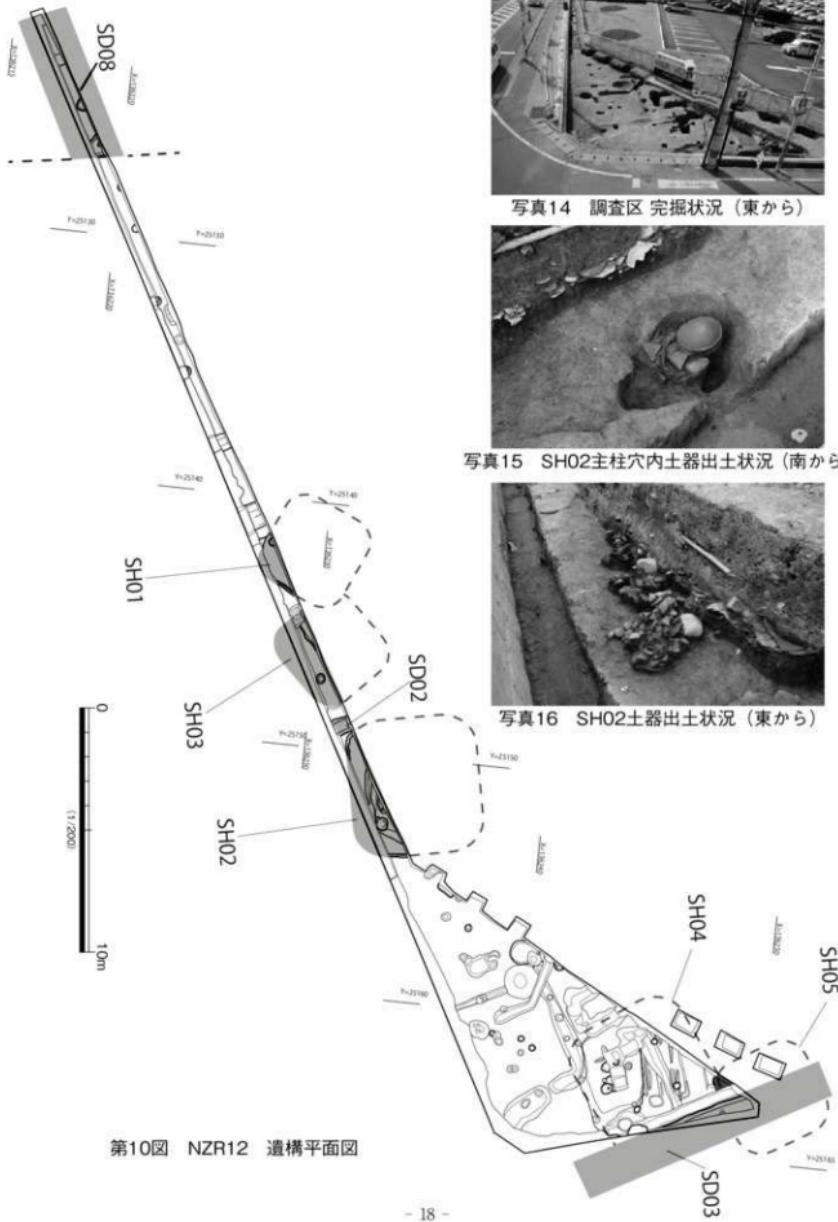
SD05は南北方向に軸をとる溝である。溝の堆積は下層および中層は流水があった状況を確認し、上層は一括で埋め戻されている状況を確認した。遺物は上層中層下層の3層で取上を行っているが、いずれの層からも8世紀から9世紀の範疇で捉えられる須恵器が出土しており、短期間の使用が考えられる。

中世

SD03の埋土は灰褐色を呈し、溝底から土師皿が出土している。本遺跡で検出されている条里型地割（『旧練兵場遺跡I』SD08・SD72、サービス棟増築時の大溝）の延長線上に位置することから、中世の条里坪界溝の可能性が高い。



第9図 遺跡位置図 (1 / 25,000)



第10図 NZR12 遺構平面図

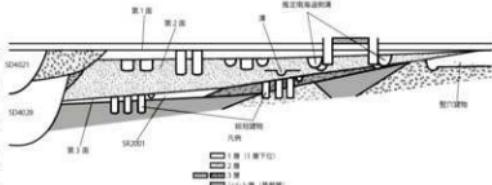
まし うえいせき 岸の上遺跡

本遺跡は丸亀市飯山町川原に所在し、旧土器川に挟まれた微高地上に位置する。丸亀市都市計画図に残る遺跡周辺の条里地割の乱れは、旧土器川の流路痕跡と考えられる。本来は飯野山の東を本流としていた流れを、生駒藩奉行西島八兵衛が17世紀に西側の現土器川の流路に変更した名残と考えられる。

調査区は昨年度に引き続き、2区3区4区の三つの調査区を設定した。調査地の基本層序と遺構面についての認識をまとめておきたい。基盤層は丸亀平野で通常みられるレキ層及びその上面に黄褐色シルト層が基本となり、2区東側の一部と市道を挟んだ3区はシルト層が確認できず、レキ層のみとなる。遺構面は3面を確認した。3面は古墳時代後期（6世紀後半）の遺構群が成立し、2区・4区ではベースは黒褐色粘質土が基本になる。3区では基盤層がベースとなる。2面は古代（8世紀から9世紀）の遺構群が成立し、ベースは白黄色のシルトから粘質土の河川堆積が2区・3区と4区の南半分、4区の北半分はレキ層が基本となる。1面は中世から近世（12世紀から18世紀）の遺構群で、ベースは2面とはほぼ同様である。また、2区では明確に面として確認できなかつたが、2面と3面の間に、水田の畦畔とみられる高まりや完形の土器が入る溝を確認しており、本来はもう一面遺構面が存在する可能性が高い。以上のように本遺跡は河川堆積によって運ばれた土砂によって重層的に遺構面が成立している状況が判明し、継続的な遺構形成が明らかとなった。以下に各遺構面の主要遺構をまとめることとする。

【遺構】

検出した主要な遺構は、第1面は
近世（18世紀後半以降）の集石遺構
24基、中世（12世紀から15世紀）の
掘立柱建物数棟・溝2条、第2面は
古代（8世紀初頭から9世紀）の柱
穴列1基・掘立柱建物3棟・溝9条・



第12図 基本層序

大溝1条、第3面は古墳時代（6世紀後半）の総柱建物7棟・竪穴建物2棟、土器棺墓1基である。

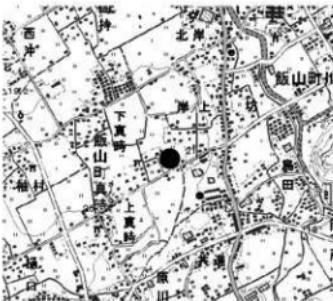


写真17 調査区全景 南から

第1面

【近世】

近世の集石遺構は、地表面に転がる畑作に不必要な石を廃棄するために掘削された土坑とみられる。平面形は南北に長い長方形を呈するものが多く、一部不正形なものもある。内部は20cmから30cmほどの円レキで満たされている。出土遺物には18世紀後半以降の陶磁器片があるが、下層の古墳時代や中世の遺物が多量に混入している。

【中世】

中世（12世紀から15世紀）の遺構は、3区では検出していない。2区西側と4区北側に遺構が集中し、特に2区では複数棟の掘立柱建物が建てられ、その東側を「コ」字形に溝がめぐる。「コ」字形にめぐる溝の南西隅に、面を揃えて置かれた石材があり、なんらかの施設があったと考えられる。中世の遺構はおおむね真北から西へ 29° 傾きをもっており、条里型地割に規制されている状況がわかる。



写真18 2区 西壁断面



写真19 4区 北壁断面

第2面

【古代】

古代（8世紀後半から9世紀後半）の遺構は調査地全域で検出されているが、遺構の密度はやや希薄である。主要な遺構は2区と3区北側に集中している。

溝5条を現道の際で確認している。平面の重複関係は、SD2004（新）→SD2027（旧）、SD3001（新）→SD3003（旧）である。SD3002は重複関係はない。溝からは古墳時代の混入遺物が多数出土しているが、溝の埋没時期と捉えられる遺物は数点しか出土していない。SD3003から7世紀末から8世紀初頭、SD3002最上層から8世紀後半代の遺物が出土している。



写真20 2区3区 2面 道遺構 東から

SD2004北側にも小ピットが多数列状をなして掘り込まれており、埋土のほとんどは黄白色を呈している。1点だけ9世紀後半以降の土器片が出土している。溝の軸線と小ピット群の軸線はほぼ同一である。これらの溝群と小ピット群は、軸線を真北から約29°西に振る周囲の条里型地割に一致し、金田氏が想定する南海道の推定線にあたることなどから、古代南海道の道路側溝と考えられる。溝群は道路側溝と考えられ、小ピット群は道の際に設置された擁壁の杭列と現段階では推定しておきたい。

2区の北側では区画施設と掘立柱建物を検出した。区画施設は南側と東側で検出しており、南側は総延長約26mの柱穴列と東側は約10mの柱穴列である。どちらの柱穴列も両サイドに溝を伴っている。南側の柱穴列には門と考えられる遺構は確認できておらず、溝も途切れている場所はない。また東側の区画施設は両サイドの溝が北まで延びるのに対し、南北方向の柱穴列は南半分にとどまっており、道側の南を意識しているものと考えられる。

掘立柱建物は区画施設で囲まれた北東隅と南側中央で検出した。掘立柱建物(SB2001a・b)は重複しており、SB2001bが新しい。それぞれ掘方内から少量の遺物が出土しており、SB2001aは8世紀後半から末、SB2001bは9世紀前半にそれぞれ建てられたものと考えられる。SB2002は柱穴列SA2001の掘方を切り込んでおり、SB2002のほうが新しいことがうかがわれる。

東側区画施設のSD2008には多量の土器が廃棄されており、8世紀後半から9世紀後半の須恵器や土師器が入り、暗文が入る畿内系土師器も少量出土している。また対になるSD2011出土遺物と接合する遺構も確認していることから、埋没時期にさほど隔たりはないものと考えられる。

4区では幅約2m深さ約1.5mの南東から北西方向へとぬける大溝(SD4028)を検出している。出土遺物から2区で検出した掘立柱建物群とはほぼ同時期の8世紀代と考えられ、斎串などの祭祀遺物も出土している。2区の建物など条里型地割に制約されて建物の軸などは統一されているが、溝の軸線は条里型地割とは異なる軸線をとっており、そのあり方が2区とは対照的である。

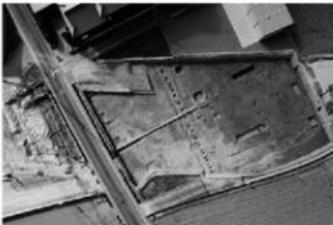


写真21 2区2面 垂直写真



写真22 2区 柱穴列 南から



写真23 2区2面 掘立柱建物 北から

第3面

【古墳】

総柱建物7棟・竪穴建物2棟・溝数条を検出した。検出した総柱建物は2間×2間が多いが、SB2005、SB4003、SB4004は調査区外に延びるため、現状では判断できない。

総柱建物はSB4003を構成する柱穴掘方から須恵器蓋杯が出土し、概ね6世紀中頃と考えられる以外は、時期決定資料はほとんど出土していない。

総柱建物のSB4003・SB4004とSB2003、SB3001及びSB3002は、周間にめぐる溝と軸線がほぼ同一であり、溝と総柱建物の関係性がうかがえる。

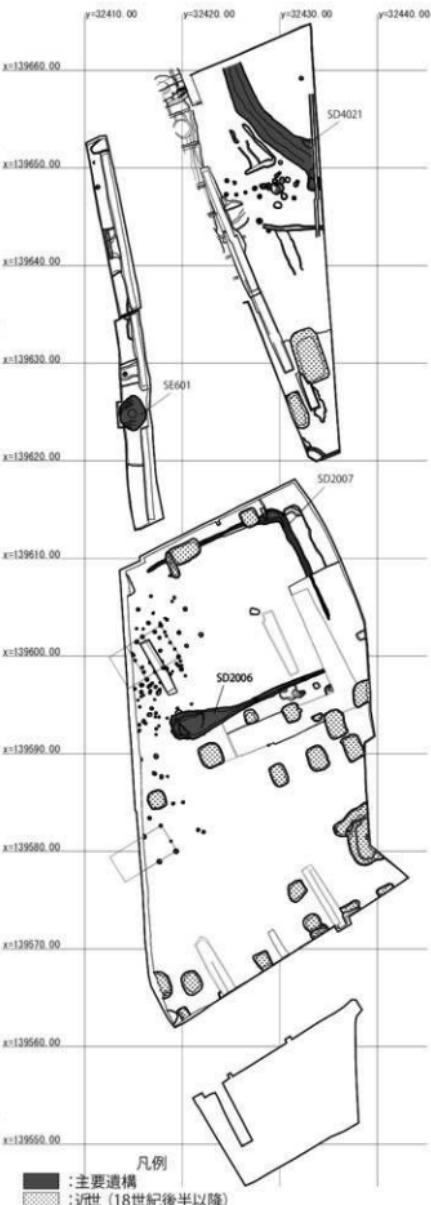


写真24 4区 3面 総柱建物 北から

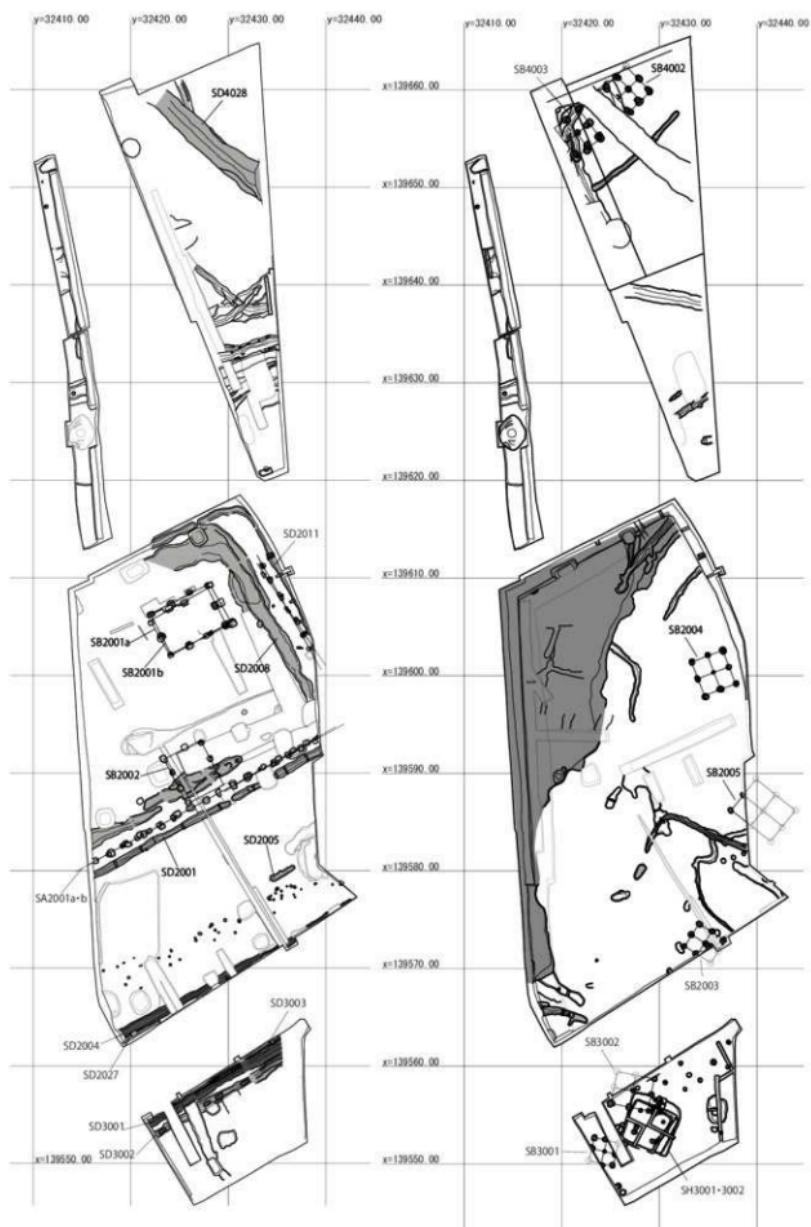
複数面にわたる遺構の調査となった。特に2面と3面は古墳時代と古代における性格および評価に十分な検討が必要になり、今後の整理で明らかにしたい。

また河川堆積による影響か遺構埋土は各面のベースになる層と類似しており、特に第2面はベースと遺構埋土の区別が困難であった。次年度はさらに北側を調査する予定で、2区および4区で検出が不十分であった2面と3面の間層の調査や古代の遺構の調査に課題が残る。

平成27年2月21日（土）に現地説明会を開催し、300名を超える参加があった。



第13図 第1面 遺構平面図



第14図 第2面 遺構平面図

第15図 第3面 遺構平面図

2. 普及・啓発事業

(1) 展示

- ① 香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日～9月5日、 12月19日～3月31日
発掘調査速報展	第1展示室	4月24日～7月15日
続・発掘へんろ～四国の近世～	第1展示室	9月16日～12月12日
讃岐国府跡を探る5～平成24年度の調査～	第2展示室	4月1日～5月8日
縄文人の石器作り	第2展示室	5月14日～7月15日
夏休み子どもミュージアム むかしの人のごちそうさん！	第2展示室	7月22日～8月29日
香川の城郭	第2展示室	9月5日～12月19日
讃岐国府跡を探る6	第2展示室	1月5日～5月11日

第9表 展示一覧

一般			団体									合計	
大人	子ども	計	団体数				構成員数					合計	
			一般	高校生	小・中 学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中 学生	幼稚園		
1,201	176	1,377	16	0	9	0	25	346	0	432	0	778	2,155

第10表 入館者数一覧

- ② 香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月13日～6月29日	952
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	三豊市かわらの里展示館	7月5日～7月27日	419
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	まんのう町琴南ふるさと資料館	9月27日～10月26日	65
讃岐国府跡探索事業展示	水のフェスティバルin府中湖	10月5日	7,000
多肥地区文化祭 「埋蔵文化財展」	高松市多肥コミュニティーセンター	10月26日～10月31日	315
町田地区的埋蔵文化財展	東かがわ市丹生コミュニティーセンター	11月16日	140
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	坂出市郷土資料館	11月1日～11月29日	123
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	観音寺市立中央図書館	12月17日～1月7日	215
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	綾川町立生涯学習センター	1月14日～2月8日	95
讃岐国府跡を探る5 ～平成24年度の調査～	東かがわ市歴史民俗資料館	2月21日～5月17日	135

松山市考古館	4月26日～6月22日	2,167
高知県埋蔵文化財センター	6月30日～9月7日	1,246
徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月13日～3月15日	927
合計		13,799

第11表 センター外展示一覧

(2) 現地説明会・地元説明会

内容		実施日	対象	見学者数
1	大田原高州遺跡現地説明会	5月10日	一般	85
2	西村遺跡現地説明会	8月23日	一般	35
3	讃岐国府跡地元説明会	2月14日	地元	74
4	讃岐国府跡現地説明会	2月15日	一般	166
5	岸の上遺跡現地説明会	2月21日	一般	350
6	讃岐国府跡第32次調査地発掘調査報告会	3月1日	一般	135
合計				845

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

(3) 講師の派遣

① 体験講座など

依頼者		実施日	場所	内容	対象	人数
1	亀阜地区民生委員児童委員協議会	6月8日	高松市立亀阜小学校	勾玉づくり	一般	40
2	東植田コミュニティ	8月19日	高松市東植田公民館	勾玉づくり	小学生	10
合計						50

第13表 体験講座への講師派遣一覧

② 学校

学校名		実施日	内容	対象	人数	
1	観音寺市立大野原小学校	6月6日	勾玉づくり	6年生	82	
2	高松市立香南小学校	6月21日	勾玉づくり	6年生親子	100	
3	高松市立多肥小学校	7月2日	出前授業	5年生	164	
4	高松市立香西小学校	11月22日	勾玉づくり	小学生親子	117	高松市埋蔵文化財センターと合同
合計					463	

第14表 学校への講師派遣一覧

③ その他

依頼者			実施日	内容
1	さぬき市文化財保護協会寒川支部		4月20日	講演
2	三豊市文化財保護協会		4月28日	講演
3	三豊市文化財保護協会詫間支部		5月8日	講演

4	綾川町文化財保護協会	5月21日	講演
5	府中地区社会福祉協議会	5月24日	講演
6	観音寺市中央公民館	6月4日	講演
7	高松市讃岐国分寺跡資料友の会	6月4日	講演
8	坂出市文化協会	6月7日	講演
9	蓬莱歴史研究会	7月15日	講演
10	蓬莱歴史研究会	7月17日	講演
11	香川県教育センター	8月20日	講演
12	宇多津町磯の会	9月2日	講演
13	栗林公園ボランティアガイドクラブ	9月27日	講演
14	高松市老人クラブ連合会	10月3日	講演
15	府中瀬戸のフェスティバル実行委員会	10月4日	遺跡案内
16	丸亀郷土史会	11月8日	講演
17	徳島市立考古資料館	11月9日	講演
18	府中壮成大学（府中老人クラブ連合）	11月13日	講演
19	丸亀市教育委員会	11月15日	展示解説
20	香川県土地家屋調査士会	12月5日	講演
21	観音寺市教育委員会	12月21日	展示解説
22	蓬莱歴史研究会	1月20日	講演
23	香川短期大学地域交流センター	1月24日	講演
24	綾川町教育委員会	1月24日	展示解説
25	総合型地域スポーツクラブ みんなでスポーツさかいでの	1月24日	国府案内
26	坂出市教育委員会 文化振興課	1月24日	国府案内
27	坂出市レクリエーション協会	1月31日	国府案内
28	高松大学・高松短期大学生涯学習教育センター	2月2日	国府案内
29	総合型地域スポーツクラブ みんなでスポーツさかいでの	2月7日	国府案内
30	第31回条里制・古代都市研究会大会	3月8日	講演

第15表 講演等への講師派遣一覧

(4) 小学校との連携授業

① 金山小学校

回	実施日	場所	内容	対象	人数
1	5月1日	埋蔵文化財センター	施設見学	6年生	37
2	5月30日	金山小学校	勾玉づくり	6年生	37
3	6月5日	金山小学校	授業 (サスカイト、坂出市の古墳)	6年生	37
4	7月3日	金山小学校	土器づくり	6年生	37

5	10月17日	金山小学校	土器焼き	6年生	37
6	11月28日	金山小学校	土器焼成	6年生	37
合計					222

第16表 坂出市立金山小学校との連携事業一覧

②府中小学校

回	実施日	場所	内容	対象	人数
1	6月9日	府中小学校	国府の里学習	6年生	37
2	8月26日	府中小学校	国府の里学習	6年生	37
3	10月20日	府中小学校	国府の里学習	6年生	37
4	10月23日	府中小学校	国府の里学習	6年生	37
5	1月17日	府中小学校	勾玉づくり	6年生	37
6	2月13日	讃岐国府跡発掘現場	現場見学	5・6年生	67
合計					252

第17表 坂出市立府中小学校との連携事業一覧

(5) 夏休み子どもミュージアム

7月16日～8月31日に夏休み子どもミュージアムを行った。

実施日	タイトル	内容	人数
7月22日～8月29日	むかしのひとのごちそうさん！	展示	
7月16日～8月31日	遺跡の自由研究サポートデスク	自由研究のアドバイス	-
7月25日、8月5日	お、古代をたいけんしてみよう。	分鏡形ベンダントづくり、ガラス玉づくり、アンギン編みでボシエット作り	28
7月29日	お、発掘してみよう。In西村遺跡	発掘体験	6
8月7日	埋文センター探検してみよう	埋蔵文化財センターのパックヤードツアー	9
12月24日	もっと知りたい！讃岐国府	讃岐国府跡発掘体験と展示体験	6
合計			49

第18表 夏休み子どもミュージアム実施事業一覧

(6) 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を5回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数
1	6月7日	「坂出市川津六反地遺跡の縄文時代の石器生産技術」	西村尋文	27
2	8月24日	「出土資料から読み解く石器生産技術－石器製作を中心に－」	小野秀幸	23
3	10月11日	「高松藩のやきもの 理兵衛焼」	森下友子	25
4	12月13日	「古墳の話～古墳時代が始まった頃を中心に～」	真鍋昌宏	33
5	2月11日	「まだ間に合う！讃岐国府 基礎から最新成果まで総ざらえ」	佐藤竜馬	55
合計				163

第19表 考古学講座一覧

(7) 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。7名が登録し、8回、延べ22名が活動に参加した。

(8) 四国新聞への連載

四国新聞に「古からのメッセージ さぬき考古学タカラ箱」として、計49回の連載を行った。讃岐国府跡探索事業に関連した内容「讃岐国府を考える」(15回)、香川県内の著名な遺跡をあいえお順に紹介する「讃岐考古学あいうえお」(17回)、「続・発掘へんろ展」に展示する遺物を紹介する「『続・発掘へんろ』展の遺物から」(17回)で構成した。

(9) 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館	出版社・新聞社	個人・他	合計
遺物	1	0	22	0	14	37
写真・パネル	1	0	14	5	0	20
レプリカ・模型	0	0	0	0	0	0
合計	2	0	36	5	14	57

第20表 資料貸出・利用一覧（数字は件数）

(10) 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数
1	高松市立香東中学校	9月8日～12日	職場体験学習	5
2	坂出市立白峰中学校	10月22日～24日	職場体験学習	2
3	坂出市立坂出中学校	10月28日～30日	職場体験学習	2
合計				9

第21表 職場体験学習一覧

(11) 刊行物

- ①『香川県埋蔵文化財センター年報 平成25年度』
- ②『いにしえの讃岐』82号～85号

(12) ホームページ

ホームページ (<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>) の更新を随時行った。

トップページビュー数 22,496

3. 讀岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成21年度から開始した讀岐国府跡探索事業は、平成26年度で6年目を迎えるとともに、後期計画の最初の年度となる。主な調査事業としては讀岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。讀岐国府跡を活用した情報発信による主な広報活動事業は、まち歩きや事業成果報告会を開催した。

調査事業

讀岐国府跡の発掘調査は平成24年度の調査で一部が見つかった大型建物の全体像を明らかにすることなどに主眼に置き、開法寺跡東側を調査した。調査の結果、この付近に広がる微高地では7世紀から平安時代の遺構を確認でき、讀岐国府設置以前から土地利用が行われたことがうかがわれた。また、奈良時代から平安時代の讀岐国府関連の遺構も検出された。

(1) ボランティア活動

・登録人数	25人
・延べ人数	115人

(2) 地域との交流

内容	実施日	人数
「第16回 水のフェスティバルin府中湖」国府ゆかりの史跡を歩く	10月4日	56人
「第16回 水のフェスティバルin府中湖」展示	10月5日	7,000人
讀岐国府跡地元説明	2月14日	74人
府中小学校5・6年生 読岐国府跡見学	2月13日	67人
府中小学校6年生との連携授業	6月9日、8月26日、 10月20日、10月23日、 1月17日	各37人

(3) 情報発信

内容	回数
ホームページへの記事掲載	20回
情報誌「いにしえの讃岐」への記事掲載	2回
新聞への連載記事掲載	17回
地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載	2回
府内掲示板への掲載	2回
NHK出演	3回
K S B出演	1回
K B N出演	3回
読売新聞掲載	1回

(4) 関連行事

内容	実施日	人数
まち歩き「国府周辺の風景」	10月19日	7人
まち歩き「道真さんが見た讃岐の風景」	11月16日	10人
展示「讃岐国府跡を探る5」	4月1日～5月6日	484人
展示「讃岐国府跡を探る6」	1月9日～3月31日	423人
出張展示「讃岐国府跡を探る4」東かがわ市歴史民俗資料館	4月1日～5月7日	138人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」高松市讃岐国分寺跡資料館	5月13日～6月29日	952人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」三豊市かわらの里展示館	7月5日～7月27日	419人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」まんのう町琴南ふるさと資料館	9月27日～10月26日	65人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」坂出市郷土資料館	11月1日～11月29日	123人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」観音寺市立中央図書館	12月17日～1月7日	215人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」綾川町生涯学習センター	1月14日～2月8日	95人
出張展示「讃岐国府跡を探る5」東かがわ市歴史民俗資料館	2月23日～3月31日	64人
考古学講座「まだ間に合う！讃岐国府 基礎から最新成果まで総ざらい」	2月14日	55人
出張講座 三豊市文化財保護協会「讃岐国府跡について」	4月28日	200人
出張講座 府中地区社会福祉協議会「讃岐国府跡発掘調査状況」	5月24日	80人
出張講座 観音寺市中央公民館「讃岐国府跡について」	6月4日	120人
出張講座 高松市讃岐国分寺跡資料館 「近代の人は讃岐国府をどう見ていたのか」	6月4日	50人
出張講座 坂出市文化協会「讃岐国府跡の調査について」	6月7日	40人
出張講座 蓬莱歴史研究会「讃岐国府跡」	7月15日	20人
出張講座 蓬莱歴史研究会「讃岐国府跡」	7月17日	10人
出張講座 宇多津町歳の会「讃岐国府跡の調査について」	9月2日	20人
出張講座 香川県土地家屋調査士会「讃岐国府探索事業について」	12月5日	30人
発掘調査現地説明会(地元・県職員対象)	2月14日	74人
発掘調査現地説明会(県民対象)	2月15日	166人
現場見学 総合型地域スポーツクラブ「みんなでスポーツさかいで 「新春ウォーカー」」	1月24日	50人
現場見学 坂出市教育委員会文化振興課「讃岐国府跡発掘現場を見る」	1月24日	16人
現場見学 坂出市レクリエーション協会 「でいい！ふれあい！親子でさかいで探検隊」	1月31日	21人
現場見学 高松大学・高松短期大学生涯学習教育センター 「国府跡発掘調査現場 現地見学会」	2月2日	16人
現場見学 総合型地域スポーツクラブ「みんなでスポーツさかいで 「早春の里山ハイキング」」	2月7日	36人
シンポジウム「讃岐国府跡第32次調査地発掘調査報告会」	3月1日	135人
調査報告 第31回条里制・古代都市研究会大会 「讃岐国府跡の発掘調査」	3月8日	90人

III 讀岐国府跡第32次調査成果の概要

調査期間 平成26年11月4日～平成27年3月14日

調査面積 408m²

調査概要

主たる検出遺構と年代

建物跡 4棟(大型建物1棟を含む) 奈良時代～平安時代

堅穴建物 6棟以上 飛鳥時代

柱穴列 6基 奈良時代～平安時代

溝 跡 8条 奈良時代～平安時代

主たる出土遺物

須恵器・土師器・縄釉陶器・灰釉陶器・古瓦・鉄器(整理箱56)

1. 概況

今年度の32次調査では、飛鳥時代(7世紀中葉)から平安時代末葉(12世紀)の長期間にわたる遺構を確認した。讀岐国府跡において、飛鳥時代(7世紀中葉)の堅穴建物や掘立柱建物を中心とした集落が明確に確認されたのは初めてで、現在、発掘調査を行っている開法寺伽藍東側に展開する微高地が、讀岐国府設置以前の比較的早い段階から好地として連綿と土地利用が行われた重要なエリアであったことが窺える。讀岐国府に関係する遺構としては、奈良時代から平安時代の建物が多く出土しているが、中でも大型建物1が注目される。

2. 飛鳥時代から奈良時代初頭

堅穴建物や掘立柱建物、溝が検出されている。これらの建物は、地形に沿う形で概ね北西方に向くように建てられているが、同一地点で重なり合うように建て替えられている。出土した須恵器からみて、7世紀中葉の比較的短期間に形成された集落と考えられる。

その後の7世紀後葉から8世紀初頭にかけて、真北を基準とした掘立柱建物(建物3)が建てられる。この時期には、堅穴建物は消滅し掘立柱建物のみとなり、建物数もかなり少ない。平成23年度の29次調査においても梁間2間、桁行7間の柱構造をもつ東西棟の大型建物を確認しており、一定の間隔を空けて大型建物を含む複数の掘立柱建物が建てられていたようだ。7間ある桁行の柱間をもつ大型建物は、官衙遺跡の大型建物の特徴の一つとされているが、現時点で、この真北を基準とした建物群が讀岐国府に関係するかどうかは微妙である。7世紀中葉の集落も合わせ、同時代に隣接して築城された城山城との関係も視野に入れながら検討していく必要がある。

3. 奈良時代前葉から平安時代中葉

今年度の発掘調査の目的は、これまで開法寺伽藍東側において想定してきた方形区画の北寄りの地点での大型建物の確認と、区画の北・東側の境界を示す壠などの遮蔽施設を検出することにあった。調査の結果、大型建物の一部を確認し、昨年度の31次調査で確認した大型建物と合わせ複数の大型建物が存在することが明らかになった。区画北側の遮蔽施設は、平成24年度30次調査で確認した柱穴列や溝を検出したものの、東側については現状で明確に把握することはできなかった。これには、当時の地表面が数十cm削平されていると考えられることや調査範囲が限られていることなどから、今後の発掘調査の課題となる。

大型建物 1

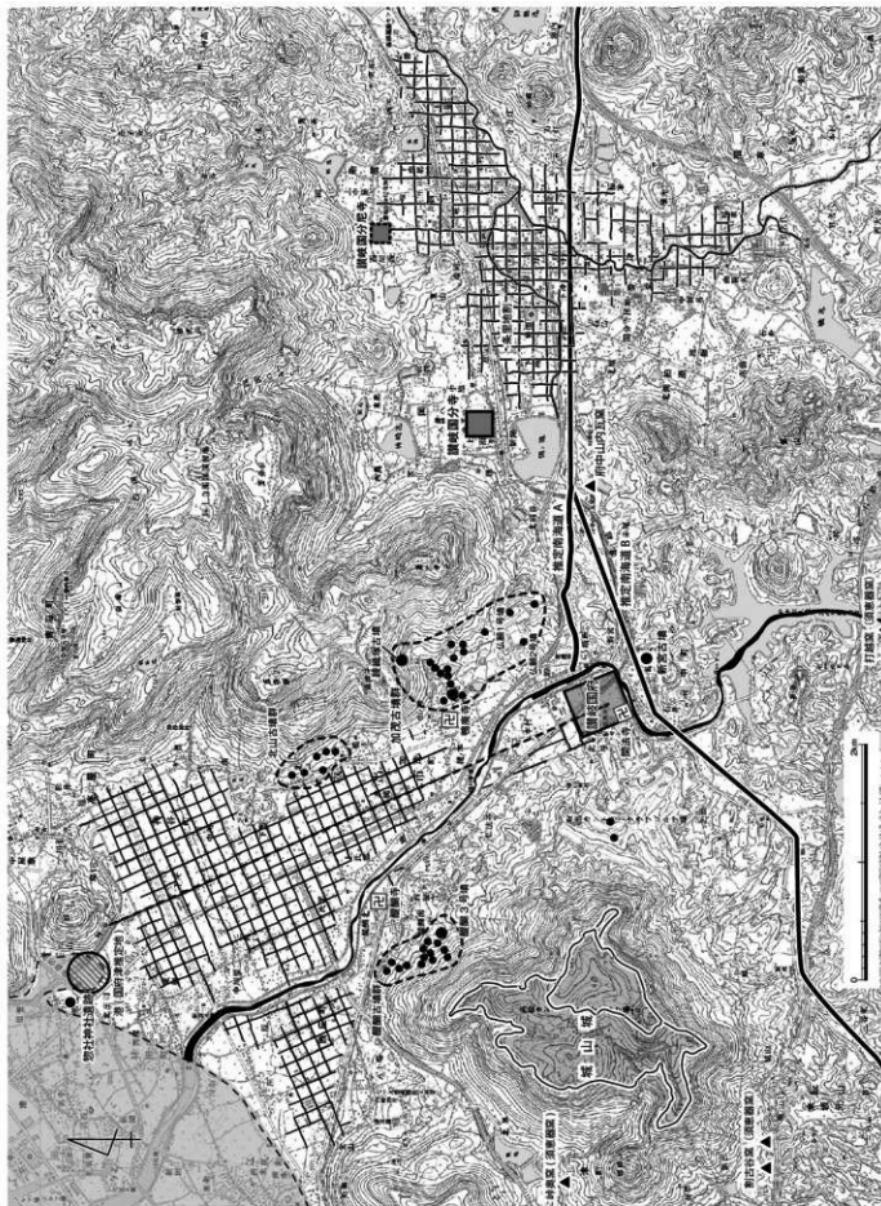
大型建物 1 は南北 3 間（9 m）、東西 2 間（6 m）を確認している。現状で主軸方向の確定はできないが、柱間が 10 尺等間であることからみて、大型建物となると考えられる。これまで県内の発掘調査で確認された奈良・平安時代の建物をみても、柱間が 3 m（10 尺）を超える建物は、讃岐国分寺僧坊や国分尼寺講堂などの大型建物 2 棟に限られ、讃岐国府でも初めての事例となる。建物の年代は、出土した遺物や周辺の条里型地割に合致する方位からみて、平安時代でも 9 世紀後葉から 10 世紀初頭頃と考えられるが、詳細な年代については、今後の調査に委ねられる点が大きい。

建物 1・柱穴列ほか

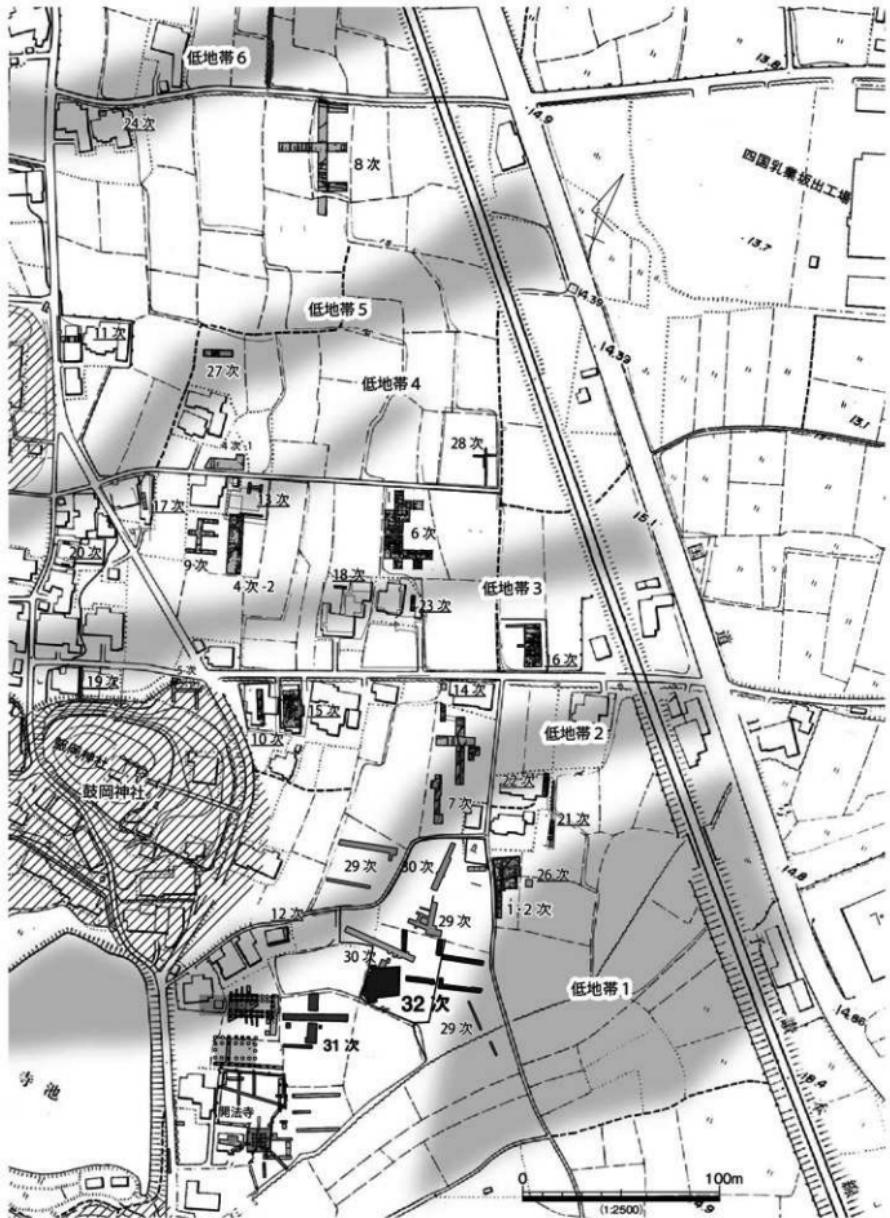
大型建物 1 が廃絶した 10 世紀の前葉から中葉かけての主な遺構として、建物 1・2、柱穴列 1・2 がある。建物 1・2 の規模を明らかにすることはできないが、柱穴の規模や柱間からみて、大型建物 1 を継承する建物と考えることはできない。柱穴列 1・2 は、ほぼ同じ位置で建て替えられたとみられるが、建物となるのか、あるいは柵や壠となるのかについては確定できない。また、この時期には、建物が存在していない場所に大型土坑が多く掘られている。大型土坑 1・2 からは、熱を受けた瓦片が多くしたほか、埋め戻し土に焼土・炭片が多く含まれている。こうした大型土坑は、平成24年度の30次調査においても確認しており、この時期に建物等が火災によって焼失した際に、廃材等を処理するための「ゴミ穴」であったと考えられる。讃岐国府の時間的な変遷を理解するときの区分点となる可能性がある。

4.まとめ

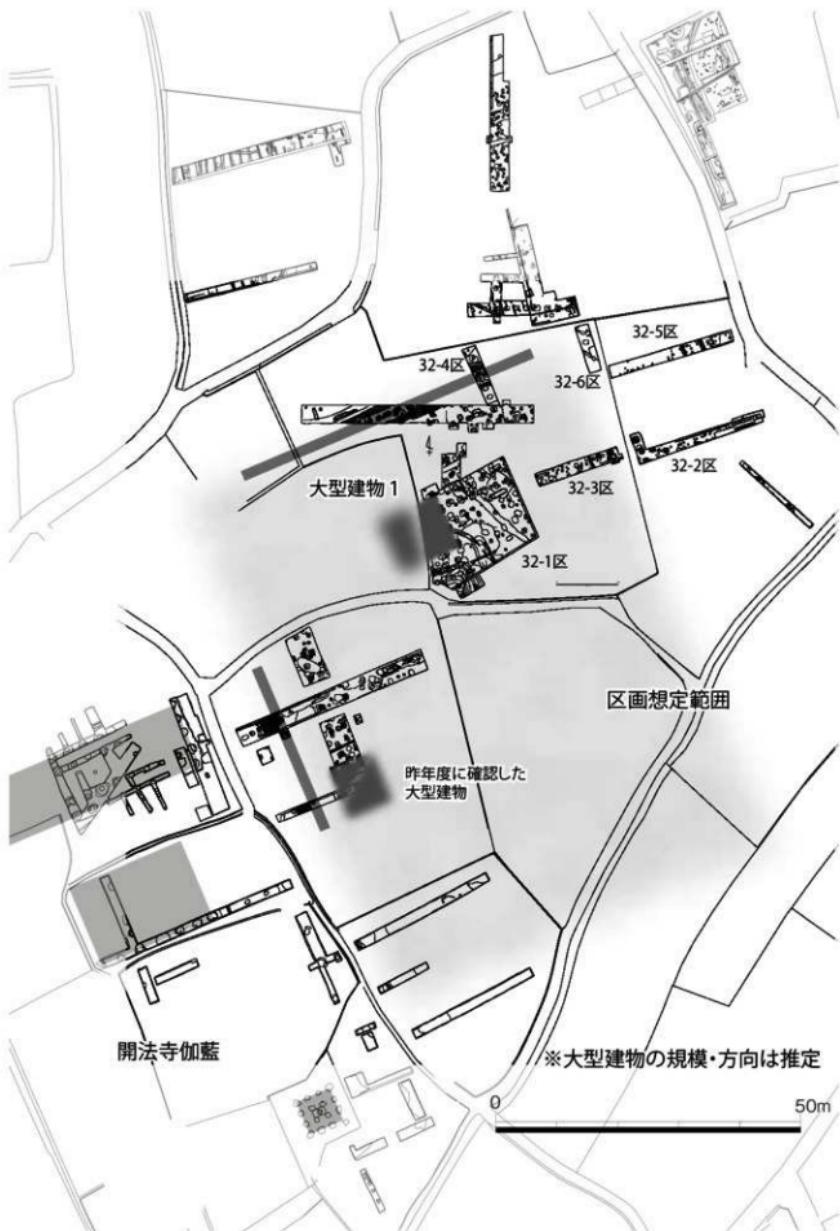
昨年度の調査成果を含め、現在発掘調査を行っている開法寺伽藍東側のエリアの中で複数の大型建物の存在が明らかになりつつある。開法寺伽藍東側のエリアが、讃岐国府の中でどのような位置付けにあったのか。その解明に向けて今後の発掘調査では、これらの大型建物の方向や規模、配置を明らかにしたうえで、歴史的評価を行い、史跡指定を含めた十分な保護措置を検討する必要がある。



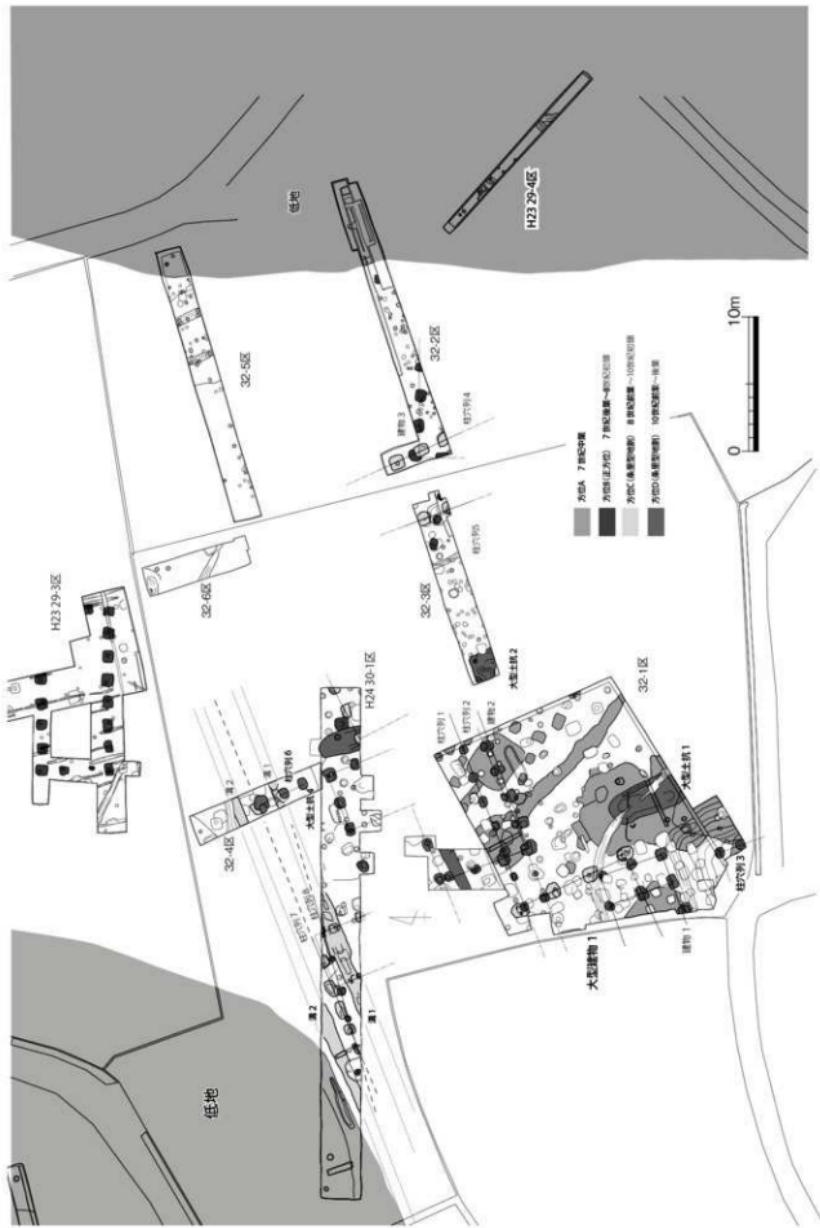
第16図 譜岐国府周辺の歴史的環境



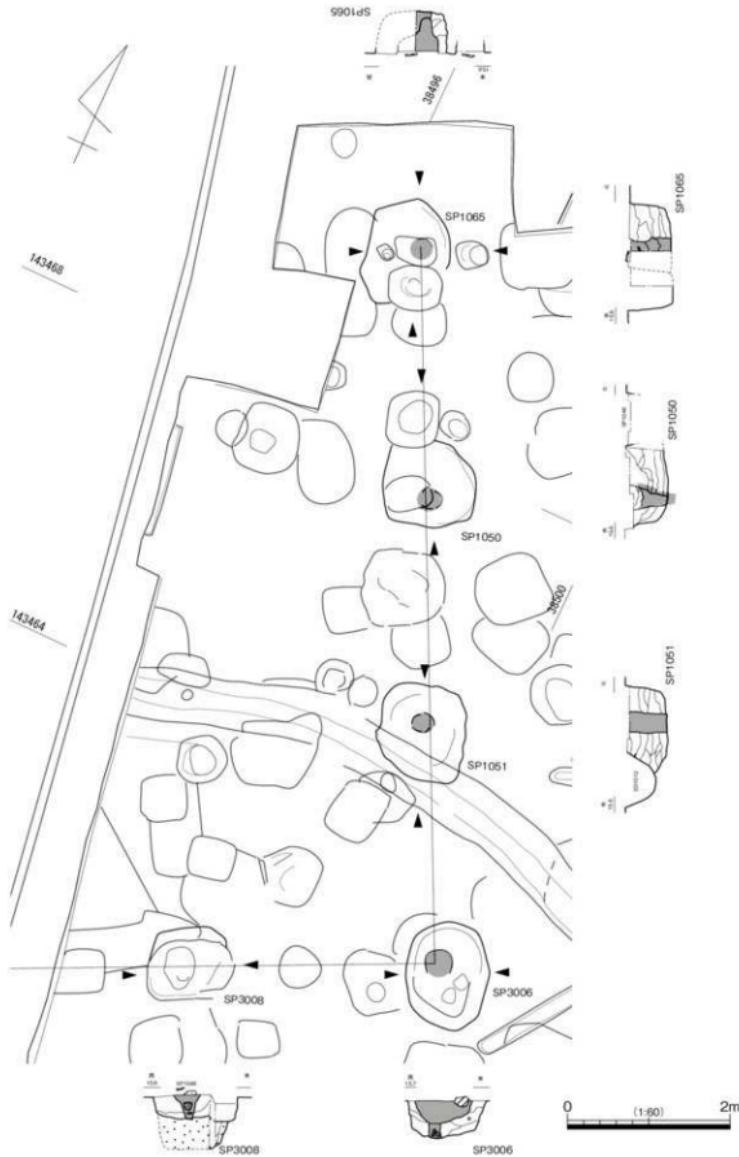
第17図 講岐國府跡における既往の調査区と地形



第18図 区画想定範囲と大型建物の出土地点



第19図 諸岐国府跡32次調査遺構配置図



第20図 32-1区 大型建物1 平・断平面



写真25 32-1 区 全景 北から



写真26 32-1 区 大型建物 1 (平安時代) 全景 東から

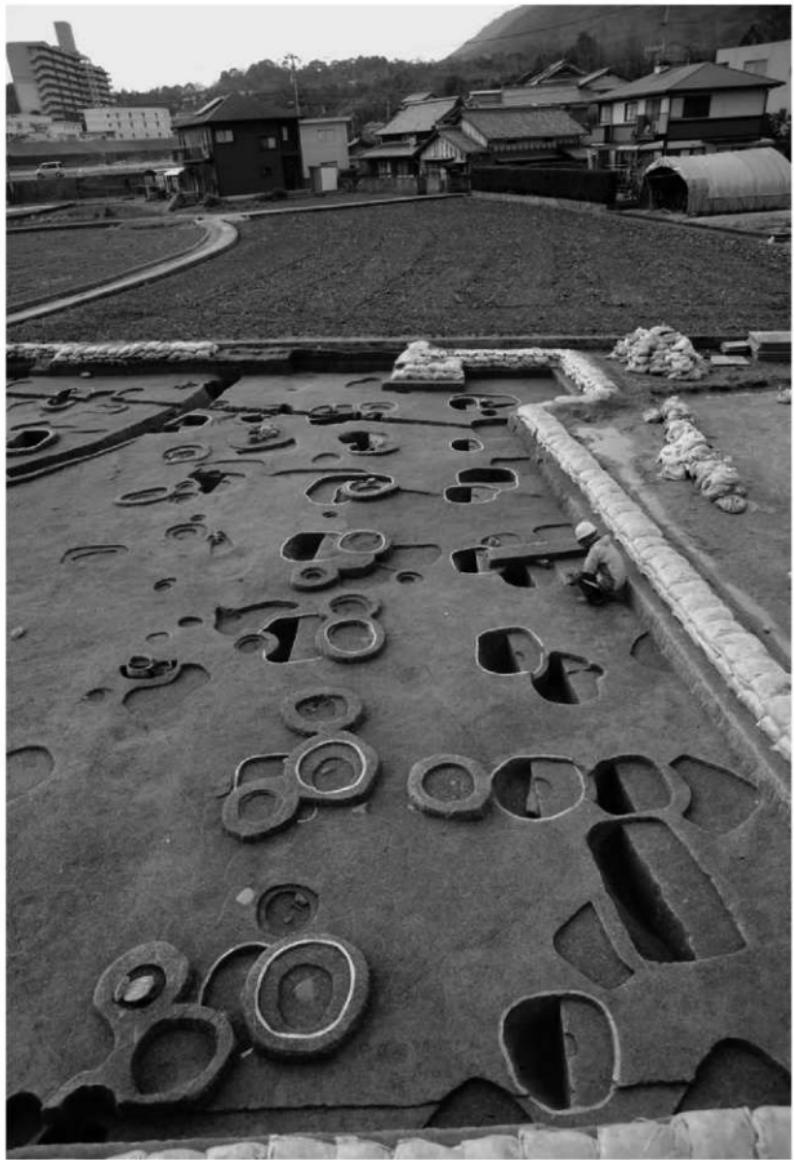


写真27 32-1 区 建物2（平安時代）、柱穴列1・2（平安時代）全景 東から



写真28 32-2 区 建物3（飛鳥時代末～奈良時代初）、柱穴列4（平安時代） 全景 南西から



写真29 32-3 区 柱穴列5（平安時代） 全景 北から

IV 調査研究

讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）

9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種

佐藤 竜馬

1. 基本的考え方

1-1. 目的と手順

近年、讃岐の古代史を構築し得るだけの考古資料が蓄積されつつある。発掘調査の進展により、讃岐国府跡の遺構内容と変遷過程が次第に明らかになってきていることを第一に挙げることができよう。また、1980年代の下川津遺跡を嚆矢として、稲木北遺跡や旧練兵場遺跡・岸の上遺跡などの特徴的な古代遺跡の発掘調査も行われ、多面的で立体的な古代地域史の叙述することが可能になってきた。

最もオーソドックスな形での歴史叙述を構成する上で、考古学固有の時間軸の設定（層位的把握、遺構の重複関係、様々な素材の編年を出発点とする）が不可欠になる。当面、その中心的な役割を担うであろう土器編年については1990年代～2000年代初頭に検討作業が行われたが、それらの業績が内包する問題点や課題は以後、十分吟味されることのないまま今日に至っている。本稿では、発掘調査成果にできる限り適切な年代的位置付けを与えることを目的として、古代～中世前半の土器について様相把握を試みる。最終的には系譜関係や型式組列＝形式を踏まえた編年案の提示を目指しているが、さしあたっては特徴的な形式の一定度のまとまりをもって設定できる（つまり発掘現場で判断できる）資料群を一つのまとまり＝「期」として捉え、これら資料群を構成する土器の特徴から、形式的帰属と組列上の細別型式について一定の見通しを示したい。こうした様相把握を経た上で、I～VII期全体を見渡した編年案を提示する。対象とする年代は7世紀中葉から14世紀前半であり、今回の検討はIV・V期（9世紀後葉～11世紀前葉）の供膳器種の様相把握である。当該期を最初に取り上げる理由は、第一に前後に比してこの時期の様相がこれまで十分明らかにされてこなかったこと、第二に讃岐国府跡の発掘調査によってこの時期の遺構が多く検出されるようになり、国府の変容過程を追求するために時間軸設定の作業が急務と見なされること、にある。

以後の検討予定としては、(2) でI～III期の供膳器種の様相把握、(3) でI～V期の煮炊・貯蔵器種の様相把握、(4) でVI～VII期の供膳・煮炊・貯蔵器種の様相把握、といった作業を行う。それら様相把握を踏まえた上で、(5) I～VII期の編年案の提示と特質の抽出、を行いたい。

上記（1）～（4）は、編年のための基礎作業である。結論としての編年案の提示に先立って、**1－4.** で述べるように、既に編年の枠組み（I～VII期と古・中・新相の細分）が前提されているのは循環論法のようにも見える。しかし本稿で提示したいのは、土器の系譜関係の推定による型式組列の設定と、その細別期毎の変遷過程の説明であり、大枠としてのI～VII期の設定ではない。I～VII期の設定は、先行研究による当該期の変遷観（片桐1992、佐藤1993・2000a・2003、松本2003、乗松2004）を踏まえた結果によるものであり、そうした枠組みを設定する程度には、当該期の土器について見通しが得られていると考える。もちろん以下の作業によって、I～VII期の区分の指標が訂正される可能性はある。

1－2. 様相把握にあたって 系統・形式・型式、そして焼物の区切り

【何を示すのか】

土器編年自体は、土器の相対的な変化について整理し、それを可視化することによってできるとする（媒体）といえる。したがって、構築される編年案が、検討者の目的や視点を前提とし、それに規制されるのは当然である。共伴関係などの「出土実態」を重視したイメージが示されるのか、そこから抽象化・帰納された変遷に対する原理・原則を構築し示すことに重きを置くのかによって、提示される編年案の姿は大きく異なるであろう。本稿では、なるべく後者を目指したい。

【編年と様式は異質の概念である】

土器の年代的序列である編年作業の方法的概念の一つとして、「様式」概念がしばしば取り上げられる。中谷治宇二郎の先駆的な業績が扱われることもあるが、特に西日本の弥生時代以降の研究では小林行雄の一連の業績が下敷きにされることが多い。小林様式論については、1980～90年代を中心に多くの学術的検討が行われており、ここで触れる余裕はない。指摘しておきたいのは、周知のことではあるが「様式」概念が創出された美術史における「様式」と、考古学研究における「様式」（「土器様式」）との著しい内容の差異である。

美術史における「様式」概念は、ある年代的位置付けがなされた対象物（作品）群のもつ特徴の中から抽出された表徵によって裏付けられる形を取る。年代的位置付けすなわちクロノロジー（編年/年代学）は、「様式」の前提をなすことがあっても、様式が編年のための必須の前提条件となることはない。² H・ヴェルフリン（1864～1945年）が取り組んだルネッサンス様式とバロック様式という様式概念の抽出は、16世紀と17世紀の各世紀の作品群の存在を前提にして行われたのであり、逆ではない。³ クロノロジーは、その淵源である古文書学/年代記からそういうように、事象の年代的確定のために個別的な特定化・細分化の方向を志向するが、様式

概念は逆に大づかみな総合化によって初めてその有用性を現すといえる。また必ず比較されるべき他者の存在が必要である。様式と翻訳されるstyleに含まれる、「文体/型/種類/流行/芸風/品位」などの言葉は、このことをよく表していよう。美術史における様式概念が、しばしば指摘されるような曖昧模糊、融通無碍なものであるのは、上記事情を背景にしているためでもある。

そもそも「様式」と「編年/年代記」は、目指すものが違う異質な概念と見た方が良いであろう。細かな違いはあるものの、「様式」を編年の方法論としていわば下位概念に位置付けることでは一致する考古学での使用方法は、やはり多くの問題を抱えることになるのではないかと考える。⁴

【古代以降の土器「様式】

7～14世紀の土器は、「律令的土器（食器）様式」「中世的土器（食器）様式」という名称（概念）が用いられることがしばしばであり、さらには両者の間に「王朝国家的食器様式」が措定されることもある。これらの用語は、当該期の土器編年がなされた上で、その時代的特徴を表すものとして使用されているという点で、「唐古第Ⅰ～V様式」とは異なる「様式」概念と見ることができる。しかしこれらの「様式」概念には、異なる内容の前提が盛り込まれているように見受けられる。

例えは律令的土器様式においては、第一に、金属器（金器・銀器）を頂点とする大陸的な食器組成の一翼を担い、形態的にも一貫した模倣関係にあるとする点で、この土器「様式」の理解には齊一性が前提とされている。第二には、前記と必ずしも整合しない属性として、「様式」創出を担った中心域とされる畿内における、必ずしも齊一性では括れない同時併存＝共伴関係が前提されている。第一の前提是小林行雄の初期の議論に、第二の前提是唐古編年に結実する後期の小林の考え方方に近いようにも捉えられ、異質な前提が複合しているように受け止められかねない。しかも畿内においてすら、この二つの前提是対象範囲にかなりのゆらぎを伴うと見ざるを得ない。「地方における律令的土器様式」であれば、なおさらである。もっとも提唱者の西弘海が示した内容からすれば、律令的土器様式は事实上、供膳具に限定された狭義の食器様式と見るべきかもしれない、その場合は第一の前提に限定されるかもしれない。宇野隆夫による「律令国家的食器様式」／「王朝国家的食器様式」は概念上、それを意識的に明確化した側面をもつ。

律令/王朝国家的食器様式は、どの程度のゆらぎを許容する概念であろうか。地域を横断して存在が認められる特定の焼物や器種はあるが、①「畿内系土師器」とされるいくつかの器種の欠落、②逆に畿内では僅少な須恵器系の「土師器」＝土師質土器の普遍的存在、③当面系譜関係に不分明さを残す（畿内との系譜関係を保留せざるを得ない）黒色土器杯・碗の存在、といった事象をいかに捉えるか。仮にこれら事象を上記食器様式の構成要素に含まれるとすれば、やはり前記した第二の前提が含まれることになってしまうのではないか。

したがって、ここにおいても「様式」概念は無用の混乱を招く可能性がある。本稿では土器群の特性を示す言葉としては、主体的には「様式」を用いない。わざわざ「様式」という言葉で言

うよりも、それに近い一般的な用語や概念で換言できると考えるからであり、例えば、まとまりとしての表徴に重きを置く場合には「様相」、また併存関係やセット関係などに重きを置く場合には「組成」という用語を用いる。また様相把握を経て組まれた時間的区分の単位については、「期」を用い、それを細分する小単位に「古相/中相/新相」などの呼称を当てたい。なお、それぞれに考古学特有の特殊な意味合いをもたせるつもりはない。

【分類と系統】

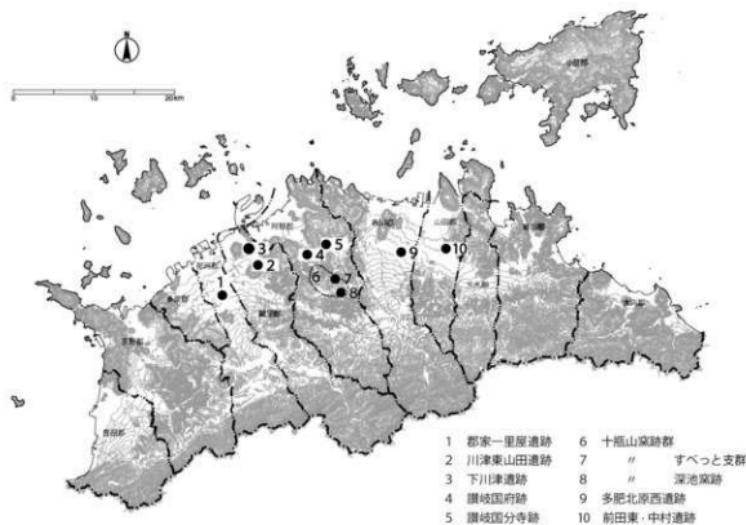
ところで、編年案構築にあたり、分類を入口とするのか、系統関係の把握から入るのか、という悩ましい問題がある。単に区分のテクニックという表層にとどまらない、対象への認識の問題が背景にあると見た方がよい。本稿での土器形式の分類呼称は、十瓶山窯産須恵器の編年案（佐藤1993）と讃岐中央部での中世前期土器編年案（佐藤2000a）で示した分類案に依拠し、今回の検討で新規に加えた形式も上記分類案に付け足す形で示す。これは結果的に上記問題を棚上げにしてきた結果であり、こうした暫定的な使用状況は、到底適切なものとはいえない。

個別の形式・型式の分類に立ち入る以前に、当該期では土器の種別（大区分）そのものについても考える必要がある。

先史考古学と古代以降の考古学（歴史考古学）においては、土器・焼物の区分方法に埋めがたいたギャップが存在することは間違いない。生産地と焼成・素材の二つの属性を含意する歴史的概念としての「焼物」を枠組みの前提とするのが中世以降であり、特定の時代に伴う文化要素として時代区分に従わせるのが古墳時代前期以前の土器である。飛鳥～平安時代の土器は、生産地の区分を前提にした土器様相の把握が行われ、かつ焼物の種別を時代区分にリンクさせることを放棄しているという点で、前者の視点の延長にあるといえる⁶。

ところで、「焼物」としての区分が、二つの属性のうち、より近代的な区分である焼成・素材で区切られる（土器・陶器・炻器・磁器）というのも、不動の枠組みとは言い切れない。

「土師器」「須恵器」、さらには「土師質土器」「中世須恵器」「中世陶器」「備前焼」「龜山焼」等々の用語が、そしてそれらを総合する「土器・陶磁器」あるいは「焼物」という言葉とそれに伴う概念や区切りは、現在の我々から見た視点に基づいた形成物である。①それらが生産・使用・廃棄された時点での把握のされ方は、現在とは明らかに異なるであろうし、②現在においてもそれらの言葉は、それを使用する社会集団内においてさえ、状況に応じた使い分けがなされていて揺らぎを伴って使用され、現代社会においては日常語ではあり得ない。この二重の意味で、上記をはじめとする土器・陶磁器に関する概念や区切りは、それらを対象にした考古学的研究の中でしか意味を發揮しないものである。したがって、7世紀中葉の土器に見られる様式的転換前後で、単に焼成の同一性だけで土師器・須恵器が引き続き同じ「焼物」として同時代に認識されていたのかは全く未検証である。また、11～13世紀において焼成が変化する「西村型土器碗」や、14



第21図 遺跡位置図

～16世紀に同一形態の中で焼成のバリエーション（というか焼成への頑なな規範が不在と見た方がよいのかもしれないが）が著しい「桶井産擂鉢」についても、先駆的に前提とされがちな焼成を重視した分類では、その叙述に有用な成果をもたらさないと考える。焼成、という材質（形態を構成する）を構成する視覚的な一要素が重視されることで、土器のもつ系譜関係が二の次にされるところに問題がある。

参考になるのが、生物系統学における分類と系統の捉え方である。そこでは「分類学と系統学とは根本的に異質な学問であり、慣習に流されてそれらを同一視することは、双方にとって何の利益にもならないだろう」とする見解が示されており、「第1段階から系統の問題を論じ、その結論をふまえて（必要ならば）つぎの段階として分類を論じる必要があるはずです。たとえ見かけとは同じ形質状態を共有していて、分類群としてまとめられると『分類学的』に認知されたとしても、その形質状態が共有派生的でなく、たんにホモクラシー『非相同、別の祖先に由来する形質の類似、筆者註]だったならば、最初の分類学的認知は系統学的には結果として誤りでしょう」とされる。形態を前提とした分類と、系譜を念頭に置いた分類とでは、結果が異なるのである。考古学においても、編年のための分類体系と、機能や使用方法などを考えるための分類体系は当然異なるはずであり、それを無理矢理整合させる必要はないであろう。

編年という時間軸の設定には、由来関係も適切な形で説明されることが望ましいと考えるので、系譜関係を踏まえた分類が最終的には必要となる。³⁰ 最終的には1-1. で示した本稿(5)の段階で系譜を踏まえた形式名に全面的に振り直す予定である。この点、留意されたい。

1-3. 検討対象資料

様相把握の検討対象として抽出した資料群（第20図に分布図）は、様々な出土状況によるものであり、所謂「一括資料」として捉えることができるものは少なく、多くの資料では出土した遺構の性格上、一定の時間幅を見込む必要がある。その存在自体が問題になる形式・型式については、個別に指摘する。とはいっても、2. で述べるような抽出資料群では、形式毎の変化のあり方が比較的よく示されていると考えられ、資料群の様相把握の背景にある変化・不变化を解釈・抽象化して示されるべき編年案の構築に十分寄与するものである。

なお各資料群には、他地域（主に畿内と周辺）からの搬入品が少数ながら伴う。搬入品の存在は、例えば近世と比較するとまだ極めて少ない状況であり、それ自体が地域内での編年構築の主要な対象になることはない。ところで近世陶磁器では、生産地あるいは他地域の動向と比較すると、そのあり方に地域性が見出せる可能性がある（例えば高松城様相7=XII期新相における肥前系磁器端反碗の欠如もしくは僅少）。その反面、陶磁器の長期保有も稀ではない。こうした近世の状況に鑑みると、資料数が皆無か量的に安定しない状況のI～VI期において、国産陶器・輸入陶磁をはじめとする搬入品の流通・保有・廃棄を辿る過程を、単純に把握できないことは想像できる。少なくとも、I～VI期の地域における編年作業では、搬入品の想定年代を先行させた枠組みではなく、在地土器の主体をなす器種や形式を主要対象とする必要があろう。¹¹

1-4. 前近代（I～XIII期）の土器様相概観

7世紀中葉から19世紀後葉に至る古代以降の前近代の土器変遷は、現段階で以下のI期からXIII期に整理できる。本稿（1）～（5）ではI～VII期が検討対象であるが、I～XIII期の概略を、記述する（第22表）。

【I期（7世紀中葉～後葉）】

須恵器・土師器とともに5世紀以来の系譜に代わる新たな一群の出現期であり、両者が併存しつつ交代していく内容をもつ。具体的には、①金属器模倣と見られる須恵器蓋杯・土師器杯の出現、②内面削り・外面ハケ目を多用した薄作りの土師器壺・鍋・羽釜・櫃と、これに組み合う移動式竈の出現、などが新たな主要器種である。これと併存する形で、③5世紀代からの系譜で捉えられる合子形の須恵器蓋杯（「古墳時代タイプ」）、④口頸部に文様帶や段などをもつ須恵器壺・ハソウ、など前代的な器種が認められる。また、⑤短脚で椀形の杯部をもつ無蓋高杯、のように畿内・陶邑窯よりも大幅に遅れてこの時期に出現する器種も存在する。新旧器種の交代の具体的な

あり方、あるいは形態変化などに、地域色が強く発現していると評価できよう。¹³

本稿Ⅰ期～Ⅱ期古相に相当する讃岐の須恵器について、筆者はかつて1～4段階の細分案を提示したことがある。¹⁴この案では、③が消滅し高台付杯がいまだ出現しないという形での①単独段階（志度末3号窯跡等）を想定したが、その後、①・③併存期の中に解消し位置付ける所見が示されており、③単独期→①・③併存期→①単独期（高台付杯も含む）、という形で整理される方向にある。しかし③がどのようにして残存し消滅に至るのか、また高台付杯がどのように出現するのか（台付椀との関係含め）等、今少し吟味を重ねる必要があると考えている。また川津地区遺跡群での畿内系讃岐産土師器の変遷觀から、相互に検証されることが望ましいが、そのような資料はいまだ僅少である。いずれにしても、さらなる資料の読み込みと解釈の提示を行いつつ検証されるべき仮説の提示が求められる。このうちⅠ期に関連するのは①・③併存期であり、古相と新相に2分される。細分の指標となるのは、③に見られる回転ヘラ削り調整の有無と口径、①のプロポーションと口径などである。

【Ⅱ期（7世紀末葉～8世紀中葉）】

①須恵器高台付杯（杯C形式）の出現・普遍化と畿内系土師器杯・高杯・皿の一定量共伴、②須恵器と共通した形態と成形技法をもつ新たな「土師器」＝土師質土器杯の出現、③内面に炭素を吸着させる黒色土器A類杯・鉢の少量存在、④Ⅰ期から継続する薄作りの土師器煮炊器種、がこの時期の特徴である。古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯C I・II形式、②須恵器皿A I～III形式、③土師器杯、④黒色土器の有無、である。

須恵器杯C形式は、古相においてⅠ期で出現したカエリ付の蓋（蓋B形式）が認められるが、既にカエリの付かないタイプ（蓋C形式）も出現しており、中相で後者のみとなる。またⅠ期で蓋B形式を伴っていた平底の杯B形式は、この期には無蓋形態となったようであり、中相までは一定量認められる。須恵器は、古相では讃岐の各地域窯製品と広域分布製品（就中、三野窯跡群）の混在が著しいが、中相以降、十瓶山窯製品が主体を占めるようになる。土師質土器杯は、古相もしくはⅠ期新相で極少量認められる（下川津遺跡第1低地帯流路2）のが初現であり、中相・新相で一定量見られるようになる。

黒色土器は、東北地方でのそれとの形態・技法的類似性を認め、蝦夷集団の西国移配との関係を指摘する見解もあるが、¹⁵点的とはいえ瀬戸内から九州にかけて比較的広範囲に分布する黒色土器を蝦夷の移配との関係で説明し切ることができるだろうか。かつて田中琢が見通したような、畿内周辺域を除いた東国と西国との共通性（普遍性）に立った評価が行える可能性はないだろうか。また別の可能性として、畿内系黒色土器の影響を想定する見解もあり、地域における系譜関係の追求・整理が必要な段階に至っているといえる。¹⁶土師器杯・皿では、畿内系讃岐産土師器の特徴的なあり方が不明瞭になり、畿内からの搬入品との識別が困難になる。

		抽出資料(消費道路)	抽出資料(生産道路)
1900	X III	高松城跡西の丸町B地区 S X b01・02	
1850	X II	最新 高松城跡西の丸町B地区 S D b04	
1800		新 高松城跡西の丸町B地区 S X b06・S K b63	
1750		中 高松城跡西の丸町B地区 S X c13・14	
1700		古 高松城跡西の丸町B地区 S A・C区II層、S K b65	
1650	X I	最新 高松城跡西の丸町B地区 S K c20・21	
1600		新 高松城跡西の丸町B地区 S K b229・170・171・178	
1550		中 高松城跡西の丸町B地区 S K b255	
1500		古 高松城跡西の丸町B地区 S K b192・152	
1450	IX	片原町道跡 S D01、東山崎・水田道跡 C地区第1面 S D05	
1400		香西南西打道跡 S D03	国分寺橋井道跡 2号窪跡
1350		新 溪ノ町道跡 S X 407・300・530、空港跡地道跡 S K c7	国分寺橋井道跡 1号窪跡
1300		中 溪ノ町道跡 S K212・S P2001	国分寺橋井道跡 3号窪跡、土器窯り2
1250	Ⅷ	古 溪ノ町道跡 S K661・S P6011	国分寺橋井道跡土器窯り1 第II層
1200		新 空港跡地道跡 S D f48下層、垂王寺道跡 S E03、川津二代取道跡 S	西村道跡西村北地区 S 5-S K01・N 6-S B03
1150		空港跡地道跡 S D f16上層、前田東・中村道跡 E区 S X04、川津二代取道跡 S D f28	西村道跡川北地区 S 33-S
1100		新 空港跡地道跡 S D f16中層・S D f19、下川津道跡 S D III71東部、K01 六条・上所道跡 S B03	K01 かめ焼谷2号窪跡、西村道跡山原地区 S 17-S
1050	Ⅶ	中 空港跡地道跡 S D f16下層、東山崎・水田道跡 E区 S D03	西村道跡山原地区 S 16-S K16 K301
1000		古 空港跡地道跡 S D f32、佐古川・垂田道跡Ⅲ区 S E02	赤瀬山2号窪跡、奥下池南窪跡、西村道跡川北地区 N35-S K25・山原地区 S 30-S D01
950		新 下川津道跡 S D III75中央部上位、川津元結木道跡 S D 10第1溝	西村1号窪跡、西村道跡西村北地区 N 2-S K02
900		中	庄屋池3号窪跡、西村道跡川北地区 N31・32-S D01
850	Ⅵ	古 下川津道跡 S D III03・05	西村2号窪跡、西村道跡西村北地区 N 3-S K01
800		新 前田東・中村道跡 E区 S K04	(未確認)
750		中 前田東・中村道跡 E区 S D19	(未確認)
700		古 唐崎国分寺跡 S K25・26	深池窪跡
650	Ⅴ	新 下川津道跡 S E III04、郡家一里屋道跡 S D13第2層、川津東山田道跡 1区 S D1009	かめ焼谷1号窪跡
600		中 郡家一里屋道跡 1区 S D12(新相)	すべくと2・5・6号窪跡
550	Ⅳ	古 多肥北原西道跡 S D0501	すべくと1号窪跡(新相)、同10号窪跡
500		新 賀田岡下道跡Ⅱ区南(古相)	すべくと1号窪跡(古相)、十瓶山西2号窪跡
450		中 唐崎国府跡第2次整地層(第5・6層)	庄屋原4号窪跡
400		古 空港跡地道跡 S D b19、唐崎国分寺跡 S K830	大師堂池1号窪跡
350	Ⅲ	新 本村・横内道跡 S K101	庄屋原3号窪跡、北条池1号窪跡
300		中 森広道跡 S D7801	池宮神社南窪跡
250		古 四国学院大学構内道跡 S D01	小谷1号窪跡
200		下川津道跡第1低地帯流路2	打越窪跡
150	Ⅱ	新 川津一ノ又道跡 S D15中・下層	
100		古	青ノ山1号窪跡

2015.7.3現在

第22表 I～X III期の抽出資料

【III期（8世紀後葉～9世紀中葉）】

①須恵器杯蓋・壺における新たな系譜（蓋C III形式・壺B II形式）の出現、②新たな系譜の黒色土器A類杯・鉢の出現と一定量存在、③新たな系譜の土師器壺D形式、羽釜C形式の出現と普遍化、などを特徴とする。供膳器種を中心にI期で成立した基本形は、この期をもって終了する。またこの期で出現した煮炊器種の新たな系譜は、VI期まで継続する。

古相・中相・新相に区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯C I・II形式、蓋C I～III形式、②須恵器皿A I形式などにとどまり、現状では専ら須恵器に揃らざるを得ない。須恵器杯の高台形状や同貼り付け状況、蓋口縁部形態の変化と天井部の回転ヘラ削り調整の有無（量比）、皿の口縁部形態と口径の変化（縮小化）、などの要素である。

【IV期（9世紀後葉～10世紀前半）】

①須恵器蓋物（蓋杯）のセット関係の解消とそれに連動する高台付杯の激減、②無蓋となった須恵器に共通した形態と成形技法をもつ土師質土器の急速な普遍化、③高台をもつ初現的な黒色土器椀の出現と普及、④III期で出現していた壺D形式の頸部に鉤を付す土師器羽釜B形式の出現・普遍化、⑤外反した口縁部をもつ須恵器広口鉢（鉢C形式）の出現、⑥体部外面に格子叩き目を残す須恵器壺B II形式の定型化と、寸胴形の体部をもつ瓶子形の須恵器壺B I・II形式の出現・普遍化、⑦京都産を主体とする縁袖陶器椀・皿の一定量伴出、などを特徴とする。I期からIII期まで基本形が共有された土器様相から大きく転換する期といえる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯B III・IV・V形式、②土師質土器杯A I・III・IV形式、③黒色土器A類椀A III・IV形式、④土師器羽釜B形式、⑤須恵器壺B II形式・壺B I・II形式、である。また単発的存在としてその存否自体が指標となり得る可能性をもつのが、⑥須恵器椀A I・B形式、⑦土師質土器椀B I・II形式、である。⑥の須恵器椀B形式は、在地産（十瓶山窯産）と搬入品との識別に留意する必要がある。

【V期（10世紀後半～11世紀前葉）】

①須恵器杯皿類の激減、②浅手の土師質土器杯=杯Cの急速な普及、③高い脚台をもつ台付杯の普及、④深椀形の黒色土器椀の出現と普及、⑤厚手粗製の土師器壺E 1・2形式の出現、⑥近江産を主体とする縁袖陶器椀の少量伴出、などを特徴とする。椀形態においてVI期までたどれる系譜が出現した点で、中世的様相への先駆をなす小画期と評価できる。その一方で、十瓶山窯産須恵器はIV期の系譜で捉えられ、まだ中世的器種が成立していない。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯B III・IV・V形式、②土師質土器杯A I・III・IV形式、③土師質土器杯C I・II形式、④土師質土器台付杯、⑤黒色土器A類椀A II形式、⑥黒色土器B類椀A IV形式、である。①・②はIV期から連続的な変化が追える

ものであるが、①は生産地以外での量的存在が著しく減少する。

【VI期（11世紀中葉～12世紀前半）】

①十瓶山窯産須恵器における平高台椀（椀B形式）の一定量存在、②土師質土器皿B（小皿）の出現・普及、③新たな系譜の土師質土器杯D形式の出現と普遍化、④十瓶山・西村遺跡での生産による黒色土器椀A II形式の定型化、⑤十瓶山窯産中世須恵器の基本をなす鉢D形式、壺C形式、壺C形式の出現、⑥白磁椀IV類を主体とした輸入陶磁の一定量伴出、⑦吉備系土師質土器椀、楠葉型瓦器椀、和泉型瓦器椀・皿などの一定量伴出、などを特徴とする。中世的様相の成立期である。⑥・⑦の事象は、遺跡によってその内容や数量に偏差が認められ、例えば讃岐国府跡では輸入陶磁の数量が多量で白磁皿の比率が高く、港湾施設周辺（高松城下層遺跡）では和泉型瓦器椀の数量が④を大きく上回り、吉備系土師質土器椀が④に伯仲するという傾向が指摘できる。なお、土師器羽釜B・C形式、土師器壺E II形式、土師器移動式竈などの煮炊器種のセットは、この期をもってほぼ消滅するものと思われる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器椀B形式、②土師質土器皿B I～III形式、③土師質土器杯D I・II形式、④黒色土器椀A II形式、⑤須恵器鉢D形式、⑥須恵器壺C形式・壺C形式、である。

【VII期（12世紀後半～13世紀中葉）】

①西村型土器椀A II形式における須恵質焼成化、②十瓶山窯産須恵器鉢E形式の普遍化、③須恵器系の技法（口頸部・底部叩き出し、回転台調整）により製作された土師質土器鍋A形式の出現・普遍化と、足釜A・B形式の出現、④龍泉窯系青磁椀を主体とする輸入陶磁の一定量伴出、⑤吉備系土師質土器椀・鍋、亀山産須恵器壺、和泉型瓦器椀、東播系須恵器鉢、常滑産陶器鉢・壺の少量もしくは一定量伴出、などを特徴とする。③の事象では、鍋の方が先んじて出現・普遍化するようであり、足釜はこの期ではまだ少数派にとどまる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器椀A II形式、②土師質土器皿B II・III形式、③土師質土器杯D II形式、④須恵器鉢E形式、⑤須恵器壺C形式、である。

【VIII期（13世紀後葉～14世紀前葉）】

①西村遺跡産の須恵器杯D II形式の普遍化と、須恵器椀A II形式の急速な減少と消滅、②土師質土器足釜A・B形式の普遍化、③龍泉窯系青磁椀を主体とする輸入陶磁の一定量伴出、④吉備系土師質土器椀、亀山産須恵器壺、東播系須恵器鉢、備前窯産陶器擂鉢・壺の少量もしくは一定量伴出、などを特徴とする。④に関連する事象として、和泉型瓦器椀の消滅を大きな変化として挙げ得る。VII期とIX期の間の移行期的な内容であり、いずれかに包含されるとすれば主要器種（土

師質土器皿・杯・須恵器椀）の継続状況からⅦ期に含めるのが妥当であろう。

古相・新相に2区分される。細分の指標になるのは、①須恵器椀A II形式・杯D II形式、②土師質土器皿B III形式、③土師質土器杯D II形式、④土師質土器鍋A形式、足釜A・B形式、である。

【Ⅸ期（14世紀中葉～15世紀前半）】

IX・X期は、古代以降の前近代において最も土器様相が不明瞭な期である。供膳器種において明瞭な変化を伴う型式組列を示してきた椀形態が消滅したことが、その一因である²¹。また、VI期以来盛行してきた土師質土器杯・皿の系譜が途絶し、新たな系譜の土師質土器皿（あるいは浅手の杯）に交代するが、その系譜関係と型式組列が十分に整理されていないことにも原因を求めることができる²²。土師質土器鍋・足釜においても組列を組み立てることは可能だが、供膳器種に比して変化が緩慢な傾向にあるのはVII期以前と変わりない。12～13世紀よりも集落遺跡が長期継続し、遺構出土遺物の年代幅が1世紀を超えることも珍しくない状況もまた、問題を複雑にしている。

とりあえず現段階では、以下のように特徴を整理しておきたい。①土師質土器杯D II形式をより浅手化させた新たな系譜の土師質土器皿（乗松分類杯1・2形式）の出現と普遍化、②土師質土器足釜B形式の主体化と足釜A形式の消滅、③鉄鍋模倣形態である土師質土器鍋B形式の出現・普遍化、④備前産陶器模倣に始まる桶井型土器擂鉢A II・III形式の出現と急速な普遍化、⑤口縁部が肥厚気味に内湾する土師質土器擂鉢の出現・普遍化、⑥備前産陶器模倣を重要な要素とする桶井産土師質土器甕の出現・普遍化、⑦龍泉窯系青磁椀C・D類（上田秀夫分類）を中心とした輸入陶磁の一定量存在、⑧東播系須恵器鉢・亀山産須恵器甕・堺近郊産瓦質甕の一定量存在、⑨備前産陶器擂鉢・壺・甕の普遍化、である。

一応、古相（乗松編年3段階）・中相（乗松編年4段階）・新相（乗松編年5・6段階）に3区分される。上記器種①～⑨が細分の指標になろう。

【Ⅹ期（15世紀後半～16世紀末葉）】

IX期同様、実態不明の感はあるが、以下の特徴をもつ。①より浅手になった土師質土器皿（乗松分類杯7形式）の出現・普遍化、②口縁部・鋸部が突帯状に縮小した土師質土器足釜C形式の出現・普遍化、③足釜C形式と同様の器体に脚部を貼付せず口縁部に一对の取手を付す、外耳－内耳折衷形の土師質土器鍋の出現・普遍化、④桶井型土器擂鉢B形式の出現、⑤短い三脚を付す火鉢形の土師質土器深鉢の出現、⑥白磁皿E類（森田勉分類）、青磁椀D・E類（上田分類）を中心とする輸入陶磁の一定量存在、⑦備前産杯・擂鉢・壺・甕の一定量存在に加え、瀬戸美濃産丸皿・天目茶椀の少量存在、である。

様相の細分は、今後の課題とせざるを得ない。上記①の系譜関係の特定と型式組列の復元が重

要な手がかりになることが予想されるが、法量・形態ともに指標となるような差異を見出すことは現状では難しい。これに②・③の形態変化、および⑥・⑦における生産地の変動などが加味されることで、2~3区分できよう。なお、最末期に高松築城が開始しているが、城内・城下で当該期に該当する可能性をもつまとった資料は、今のところ片原町遺跡SD01出土例²⁴を挙げ得る程度である。

【X I 期（17世紀初頭～17世紀後半）】

①土師質土器皿における、新たな主要4系譜（高松城佐藤分類A II・III・V・X形式）の出現・普遍化、②亀山系土器鍋からの系譜が追える御腰產土師質土器焰烙の出現、③口縁部内湾の土師質土器擂鉢、外耳・内耳の折衷形の土師質土器把手付鍋の主体的存在、④供膳器種における肥前系陶器（唐津）、磁器（伊万里）の出現と急速な普遍化、⑤供膳器種における瀬戸美濃系陶器（天目茶碗・丸皿・折縁皿）のX期からの拡大的継続と、志野・織部の出現、⑥備前産陶器擂鉢・壺・茶道具の主体的存在、⑦景德镇窯系・漳州窯系の青花椀・皿の一定量存在、などが特徴である。バリエーション・数量ともに、讃岐以外の地域からもたらされた「搬入品」を抜きにして、当該期の様相を語ることはもはやできない状況であり、この点にX期からの質的な飛躍が指摘できる。その一方で、上記③はX期からの延長で捉えられる要素であり、鉄鍋の存在を考慮してもなお、主体的な③の代替品の存在を想定し難いことから、煮炊器種における中世的要素の継続を認める必要がある。

古相（高松城様相1）・中相（高松城様相2）・新相（高松城様相3）・最新相（高松城様相4）と4区分できる。細分の指標は、上記①～⑥における各形式の存否もしくは型式組列で行うことが可能である。

【X II 期（18世紀前葉～19世紀中葉）】

①X I 期に見られた土師質土器皿主要4系譜の途絶（うち皿A II・III形式はX I 期最新相、皿AV・X形式はX II 期古相をもって消滅）と新たな主要3系譜の出現、それに関連すると見られる備前産陶器灯明皿2系譜の出現（遅れて瀬戸美濃系、京・信楽系も出現）、②大坂からの搬入の可能性をもつ、精製品としての土師質皿AX I形式（所謂「黒斑土師器」、大坂城下町での用例）の少量存在、③供膳器種における京・信楽系陶器の出現・普遍化と、やや遅れるが瀬戸美濃系陶器の普及、④在地産陶器としての古理兵衛、源内、屋島、富田等の少量存在と、新相以降の軟質陶器行平・土瓶の普遍化、⑤備前産擂鉢模倣に始まる擂鉢の急速な普遍化、⑥土師質土器焰烙における御腰產と岡本產の急速な普遍化と、御腰產土師質土器羽釜・七輪・焜炉等の出現・普遍化、⑦土師質土器壺・井戸側等の大型生活道具の出現と普遍化、などが特徴である。在地産土器・陶器の器種限定的な独占と肥前、京・信楽、瀬戸美濃の供膳器種中心の普遍化が明確化し、その

構成や形態からも近世的な様相の完成期と評価できる。

古相（高松城様相5）・中相（高松城様相6）・新相（高松城様相7）・最新相（高松城様相8）と4区分される。細分の指標は、上記①・③～⑦における各形式の存否もしくは型式組列で行うことが可能である。

【X III期（19世紀後葉）】

通常の発掘調査では「搅乱」として除去されることがほとんどであるため、混在の少ない単純な資料群を抽出することが困難である。²⁷ ①土師質土器皿の消滅、②御厨産焼物における外型成形の採用と瓦質焼成への転換（焼物A II形式）、③肥前系磁器を中心とする型紙刷りによる椀皿の出現・普及、④理兵衛、屋島等に見られる煎茶器・酒器などへの展開、などを特徴とすることが予想される。

【古代／中世／近世的様相？】

以上がI～X III期の概要であるが、これらのいずれが古代土器／中世土器／近世土器（陶磁器含む）と呼称するに相応しいと捉えるか、意外に難しいことに気付く。在地土器に限定した様相把握では、A群（I～III期：7世紀中葉～9世紀中葉）、B群（IV～VII期：9世紀後葉～13世紀中葉）、C群（VII～X I期：13世紀後葉～17世紀後半）、D群（X II～X III期：18世紀前葉～19世紀後葉）の4区分が妥当であろう。搬入品の量的普遍性を前提にした様相把握では、 α 期（I～III期：7世紀中葉～9世紀中葉）、 β 期（IV・V期：9世紀後葉～11世紀前葉）、 γ 期（VI～VII期：11世紀中葉～14世紀前葉）、 δ 期（IX～X期：14世紀中葉～16世紀末葉）、 ε 期（X I～X III期：17世紀初頭～19世紀後葉）を見ておきたい。

区分された群の境界が一致するのは9世紀中葉／後葉のみであるが、これは搬入品が一定量以上を占めるようになった年代を示している。したがって、仮に古代／中世／近世という時代区分が土器様相においても関連性をもって現れてくるとする立場に立つのであれば、古代／中世／中世／近世の区分、あるいはその細分（古代前期／後期等）を行うにあたり、搬入品の内容と組成を看過した評価はできないと考える。²⁸ こうした区分を行うこと自体が妥当な議論かどうかかも含め、本稿（5）で後述することにしたい。

2. IV期の様相

2-1. 抽出資料と問題点

【IV期古相】

多肥北原西遺跡 SD0501 出土土器 (図版1) 東西に長く続く道路側溝と推測される遺構。比較的出土量の多い9区部分を抽出した。須恵器杯・皿はまとまった内容をもち、Ⅲ期以前に普遍的であった蓋物がほとんど存在しない(報告分では皆無)。次回以後の検討対象であるが須恵器壺・甕、土師器甕も形態的にはまとまっている。搬入品としては、底部回転糸切りの須恵器平高台椀(畿内もしくは播磨産か)、京都産綠釉陶器椀がある。後者は、小口径で口縁端部が緩く外反し、糸切り痕を残した平高台を伴っており、平安京II期古～中(840～900年頃)、高橋照彦氏編年の畿内II期(9世紀中葉～後半前半)に位置付けられる。前者も播磨諸窯では同時期に存在しており、年代的な矛盾はない。

すべっと1号窯跡窯体内出土土器 1号窯跡では、窯体内(香川県教委1968)と灰原(片桐節子1994)とで須恵器の様相がかなり異なる。一言で表現すると、蓋物の存在(灰原)と無蓋(窯体内)という差異であり、明瞭な年代差として捉えられる。灰原が窯体よりもかなり下方に存在しており、出土須恵器には明らかに12世紀代まで下る鉢・甕が一定量存在している(片桐節子1994報告書55・57～69・80・81)ことから、灰原の一部は別の窯に由来する可能性も否定はできない。このような問題点が残るが、窯体内出土須恵器は多肥北原西遺跡 SD0501 出土土器に近似した特徴をもっており、ほぼ同時期の所産と考えられよう。なお、灰原出土須恵器で12世紀代(VI期新相)のもの以外は、Ⅲ期新相に位置付けることが可能な資料である。

【IV期中相】

郡家一里屋遺跡 I区 SD12 出土土器(図版2・3) 平野部の微高地に制約された溝群から屈曲・分岐し、条里型地割の方向に従い流下する素掘り溝。分岐部分でSD13と重複関係にあり、堆積層の検討からSD12が先行することが報告されている。「屈曲点から北では、東側の肩がなどらかであるに対し西側の肩はかなりえぐれており、屈曲する際に西肩をえぐったものと考えられる。散乱している石と考え併せ水量はかなりあったと考えられる」。また、「検出長が短いにも関わらず大量の土器が出土した」。

出土した須恵器杯や土師質土器皿には、明らかに古い時期の所産のものがかなり認められる(報告書88・100・104・112・124・165～173・175～182・187～199)ため、土器群の廃棄あるいは溝内集積が単一時期に行われたのではないことがうかがえる。上記報告書の記述を踏まえるならば、出土地点直近での廃棄を反映するというよりは、上流側での複数回の廃棄と、その再集積・

埋没という状況を考えた方がよいであろう。このため、出土土器全体の中でより新しい特徴をもつ一群を抽出・提示することになるが、こうした一群が量的には最も多いとみられること、またこれよりもさらに新しい土器（例えば11～12世紀の所産）が存在しないことから、下限については比較的明瞭に線引きできるものと思われる。なお、須恵器杯・皿には墨書き土器がある（報告書131・157・159）。搬入品としては、平高台（圓線高台状）を伴い全面施釉する小口径の綠釉陶器碗（231）があり、高橋編年の二期（9世紀後半）に位置付けられる。

【Ⅳ期新相】

都家一里屋遺跡 I 区 SD13 出土土器（図版4・5） 上記SD12の屈曲部を切り込み流下する素掘り溝。検出部南半部と思われる3箇所の埋土断面図（報告書第95図）によると、下層（Ⅲ層、出土遺物の記述箇所では第3層）と中層（Ⅱ層、第2層）との間には再掘削ないし浸食による再開削と思われる堆積の断絶が認められ、Ⅱ層堆積後の浅く幅広い窪地状の流路に上層が堆積している。一方、SD12との切り合い箇所の断面図（報告書第74図E・F断面）を見ると、疊を多量に含むSD13Ⅱ層相当層の下位に先行する流路の落ち込みが認められ、その堆積層（同断面4・12層）はSD12の埋土と判断されている。分岐・屈曲部以南（以東）のSD12の流路の位置が明確でないことを併せ考えると、SD12はSD13Ⅲ層の下流もしくは分岐・平行した流路である可能性が指摘できる。いずれにしても、SD13の中でSD12と明確な前後関係をもった堆積と判断できるのはⅡ層（第2層）である。

第2層出土土器には、須恵器杯や土師質土器杯のようにSD12との様相違を指摘できるものがある一方、須恵器皿のように明確な区分が困難で、法量（口径）がSD12よりも大振りな個体が存在する。これは、十瓶山窯での所見からすると、より古い要素といわざるを得ないが、これらはⅢ期に遡る一群（報告書368～400・403・404・405・409・413・414・416～425・431・432）と同様に捉えるべきなのかもしれない。これらが混在する理由は、SD12と同様な状況が考えられよう。搬入品としては、須恵器平高台碗（360・361）、綠釉陶器碗・皿（441～449）、灰釉陶器皿（450）がある。須恵器平高台碗のうち、360は底部回転ヘラ切り、361は回転糸切りであり、ともに畿内もしくは播磨の製品と思われる。綠釉陶器は、高台の形状や施釉範囲から高橋編年II～III期（9世紀後半～10世紀初頭）と考えられる。灰釉陶器は黒窯90号窯期（K-90、平安京II期古～中（840～900年頃））である。綠釉・灰釉とともにSD12と大差ない年代観であるが、SD12と同時併存の可能性を指摘したSD13Ⅲ層（第3層）でも第2層と同様の綠釉・灰釉が認められることから、これら国産陶器の一定期間の保有・使用、もしくは下層の攪乱による再堆積などの状況を想定した方がよいのかもしれない。いずれにしても、国産陶器の内容よりも在地土器の形式組列が設定できるか否かが、当面する課題である。

川津東山田遺跡 I 区 SD3109 出土土器（図版6） 鍛冶関係遺構の周囲を開む素掘り溝で、

SD3209・SD3210 a・b、SD3106とともに約15m四方の区画（内側に鍛冶炉3基・堅穴建物1棟等を配する）を構成する。幅広で深い溝であり、2状程度に細分されるが、前後関係をもつ重複か同時併存で埋没の時期差が存在するのかは不明である。埋土中からは土器とともに「輪羽口、鉄滓、焼けた石が出土しており」、「炉から排出された廃棄物を搔き出す場所とも考えられるが、土器も数多く出土しており、他の廃棄物も集めた場所だったかもしれない」とされる。遺物の詳細な出土状況や埋没過程は明らかでないが、飯野山北麓の緩斜面であり、埋土が「粗砂混粘質土」を主体としていることから、一定期間オーブンのまま山側から流れてきた土砂によって自然埋没したことが考えられる。出土土器は、須恵器杯、土師質土器杯・椀、土師器甕・羽釜などがそれぞれ形態的にまとまった内容をもっている。搬入品としては、京都産と見られる硬質の縁釉陶器椀（403・404）があり、高橋照彦氏編年の畿内Ⅲ期（9世紀後葉～10世紀初頭）にあたると思われる。

下川津遺跡 SE Ⅲ 04 出土土器（図版8・9） 平面円形の掘り方内の四隅に杭を打ち込み、その間に幅5～10cmの板材を縦に並べて井戸枠としており、その下の湧水部には曲物が2段重ねられていた。土層断面図が示されておらず、井戸の廃絶状況や裏込め土の状況は明らかでないが、「廃絶後の供獻土器等は認められず、また井戸が包含層の上面から掘り込まれているため、裏込めや埋土中に土器片が多数混入していた」とされており、一括廃棄を端的に示すような遺物出土状況でなかったことがうかがえる。出土土器は、須恵器杯、土師質土器杯・椀、土師器甕・羽釜、黒色土器椀などがそれぞれ形態的にまとまっているように見受けられるが、土師質土器小皿（報告書450-3）は中世前期の所産で、須恵器杯（451-9）は古代Ⅰ期（I・II期）のものである。後者は古い遺物の混在として理解できるが、前者は遺物取り上げ時の紛れ込みもしくは当遺構埋没後に堆積した別時期の層位に含まれていた可能性があろう。なお、「平安時代の洪水砂層堆積時期に突発的に[第1低地帯との、筆者註]合流部に形成された深い凹地」とされる下川津遺跡第2低地帯流路2出土土器（図版7）も、ほぼ同じ特徴をもつ資料である。

2-3. 須恵器

【杯B形式】

回転ヘラ切りによる平坦な底部をもつ、平底の無蓋杯である。十瓶山窯産製品を主体とするが、同形態の資料は讃岐西部の三野・刈田2郡の生産地においても確認できる。³⁵ II期から連続的に捉えられる浅手のBⅢ・IV・IV'形式、深手のV・V'形式がある。前者は口径/器高により、より深手なBⅢ形式とより浅手のBⅣ形式、その中間のBⅣ'形式に細分できる。後者は体部上半から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるBⅤ形式、直線的に外傾して立ち上がるBⅤ'形式に細分される。これら細分した一群は、IV期新相まで見えるため、同一形式内の微細なバリエーション

ン（つまり単系列における振れ幅）としてよりも、独立した形式として捉える方が変遷過程を理解しやすい。

杯B III・IV・IV' 形式の変化は、①口縁・体部が次第に外傾度を増して外開きのプロポーションになること、②底体部の境が直線的に屈曲するものから次第に底部が突出気味になること、の2点によく表れている。

①について補説する。古相では、3形式ともに底径/口径の比率がほぼ同じであるため、深手のものほど口縁・体部が直立方向に近く、浅手のものほど外傾しているように見える。外開き傾向の強い順にB IV→B IV'→B IIIとなる。しかし中相・新相では、深手なものほど底径が小振りになる（底径/口径が小さな数値になる）傾向が顕在化するため、中相・新相では3形式の外傾度はほぼ同じになる。こうした差異をベースとしつつ、全体としては外傾度が強くなるということが指摘できる。②の要因としては、平高台椀からの形態的な影響も無視できないであろうが、円盤状の分厚い底部をもたないことが平高台椀とは異なるところである。杯B III・IV・IV' は中相から新相にかけて、底部も含めた器壁がかなり薄くなり、ロクロ目がよく通る個体がしばしば見られるが、こうした薄手の器体においても強度が求められる底体部境（腰部）を厚くするための手法として、回転ヘラ切りの位置をやや下方に下げた結果、生じた形態なのではなかろうか。口径は、古相が11～13cm台、中相が12～13cm台、新相が12～14cm台。古相に小振りなもの（11cm台）、新相に大振りなもの（14cm台）がやや目立つ以外は、法量の著しい差異は認められない。ただし新相では、B III形式が相対的に大きな口径分布を示す。

これら以外に新相には、内湾する体部と外反する口縁部、突出気味の底部をもつB IV' が少数認められる。

杯B V・V' 形式の変化は、体部の外傾度がより強くなる（外開きになる）傾向に表れている。口径は、杯B III・IV・IV' よりも大振りであり、古相・中相で13～14cm台、新相で14～16cm前後である。

【杯C形式】

高台付の杯であるが、蓋を伴わない。III期までの杯C IIに連なると思われる杯C II' 形式が少數認められる程度である。杯C II形式よりもかなり深手で杯B V形式と共に通した形態の器体をもち、底部外縁に低い扁平な輪高台が貼り付けられる。中相まで存在を確認でき、体部の外傾度がより強くなる傾向の変化をたどるようである。

【椀A I形式】

内湾気味に外傾する口縁・体部をもち、回転ヘラ切りによる底部外縁に輪高台が貼り付けられる。端部を水平方向へ挽き出して内傾する面を作ることや、細身で外側に踏ん張る高台をも

つことなどに、杯C II⁺形式とは明確に異なる特徴が見出せる。おそらく綠釉陶器や灰釉陶器などの形態的影響下で出現したと思われ、生産遺跡（すべっと2号窯跡）・消費遺跡（郡家一里屋遺跡I区SD12）とともに中相のみに見られ、かなり限定された時期に存在する形式である。

【椀B形式】

強く内湾して立ち上がる口縁・体部をもち、ヘラ切りによる円盤状の平高台をもつ。在地製品（十瓶山窯産）としての明確な事例はすべっと5号窯跡灰原出土例に見出せるだけであり、消費遺跡では今のところ未見である。椀A I形式と同様、中相のみに見られる限定的な存在である。個体数が少ないため、既に述べたような搬入品（多肥北原西遺跡SD0501の239、郡家一里屋遺跡SD13の361・360）との形態的差異は必ずしも明確でない。別々の形式（例えばB I・II形式）としておくのか否か、検討をする。

【皿A I形式】

II期から継続する形式であり、III期を通じてたどってきた漸移的な口径の縮小化と底体部境（腰部）の屈折明確化、さらに口縁・体部の薄手化などの傾向の延長に位置付けられる。古相では口縁部の比較的長く直立気味な一群（多肥北原西遺跡報告書225・226・230・232・237・218・222）と、短く外傾する口縁部をもつ一群の2者があるが、中相では後者のみでより薄手になり、新相に続く。口径は古相で11cm台後半～15cm、中相で12cm台後半～14cm台前半、新相（かめ焼谷1号窯跡）で10～12cm台となる。消費遺跡での新相の様相は、2-1.【IV期新相】で述べたようにIII期に遡るものを含むかもしれません、口径にはばらつきがある。いずれにしても、消費遺跡では新相の皿A I形式は急速に減少することがうかがえる。後続するIV期では、生産・消費遺跡ともにこの形式を含めた須恵器皿そのものを見出すことができない。

2-4. 土師質土器

【杯A形式】

回転ヘラ切りによる平坦な底部をもつ平底杯であり、須恵器杯B形式と相似形の一群である。須恵器と相似形の土師質土器杯は、II・III期にも散見されるが量的には少数派にとどまっており、III期においても古相では僅少で中相・新相にかけて急増・顕在化していく。口径/器高により、A I⁺（須恵器杯B IIIと相似）・A I（須恵器杯B IV⁺と相似）・A II（須恵器杯B IVと相似）・A III（須恵器杯B IV⁺と相似）の4形式に細分できる。須恵器杯B V・V⁺形式と相似形になる形態は、認められない。古相にはA I形式が極少数、中相にはA I・II形式が一定量、新相にはA I・I⁺・III形式が相似形の須恵器杯と拮抗、あるいはやや凌ぐ存在になる。形態変化の方向

は須恵器杯B形式と同じと思われるが、古相での存在が僅少なために細分様式内の底径/口径の比率差のあり方の変化については不分明なところがある。また最もバリエーションが豊富になる新相で見ると、AⅢ形式が比較的目立つところが、これと相似形の須恵器杯BⅣ”形式が僅少であるのとやや異なる点であり、バリエーションの量比までが須恵器と相似ということでもないようである。

【杯C I形式】

V期に主体をなすC形式に連なるような形態が、新相に極少数認められる。杯A I形式に比して底体部の境が明瞭に屈曲せずに緩くカーブし、底部中央が突出気味になる。C I形式とするのか、あるいはA I形式のバリエーションとして捉えC形式をV期に限定するのか、検討をする。

【杯B形式】

直線的に外傾する口縁・体部をもち、底部外縁に輪高台を貼り付ける。B形式とB'形式の2つに細分できる。B形式は、杯A I形式の底部外縁に高台が貼り付けられたような形態であるが、口径の分布域は1cm以上大振りであり重複しない。体部が直線的であること、高台が細身で長いことなどが、椀A IV形式と異なる特徴であるが、中間的な形態の個体も存在しており、区分がやや曖昧なところもある。B'形式は、B形式と底径/口径比を同じくした深手の器体をもつ。B形式は中相・新相で、B'形式は新相で認められる。

【台付杯】

長く延びて踏ん張る脚台をもつもので、器体は杯A I形式と相似形であるが、口径は16cm台と大振りである。脚台の貼り付け位置は、底体部境よりやや内側。新相に極少量認められる。V期で多く見られるようになる形式であり、脚台の形態変化が問題となるが、いずれも脚台を欠損しており明らかにできない。

【椀A IV形式】

完形品に恵まれないが、高台や体部下半の形状は黒色土器A類椀A IV形式と相似形である。中相・新相に少量存在するが、形態変化の詳細については明らかにできない。

【椀B形式】

円盤状の平高台（ヘラ切り）をもつもので、B I・B IIの2形式に細分できる。B I形式は、直線的に外傾する口縁・体部をもつ。B II形式は、内湾して立ち上がる体部と、直線的もしくは外反気味に延びる口縁部をもつ。前者は平高台から直立気味に立ち上がった後に外傾・内湾する

体部へと延びており、見込みが明瞭に窪む形態的特徴をもつ。後者は底部から比較的連続して立ち上がる体部下半をもち、見込みはさほど顕著には窪まない。古・中相では未見で、新相に出現し急速に普遍化する。

【皿A形式】

須恵器皿A I 形式に近似した形態をもつもので、中・新相に存在する。中相では口縁端部に内傾する凹面を伴っており、同時期の須恵器皿には見られない土師器的な特徴を残している。新相では須恵器皿と相似形になる。口径は中相で12～14cm台、新相で11～12cm台であり、須恵器とほぼ同じ法量をもつ。

2-5. 黒色土器

【A類椀A形式】

A III・IVの2形式に細分できる。A III形式は、外開きに内湾する口縁・体部による浅手の器体と、底径/口径比が比較的大きい輪高台を伴う。古相では体部下半の湾曲が弱く、腰の張りが少ない形態。中相では古相と同様の形態(郡家一里屋I区SD12-223)と、やや深手になるもの(224・229)がある。新相ではさらに深手になる。A IV形式は、内湾気味に外傾する深手の器体をもつもので、A III形式よりも径が小振りで断面逆台形の扁平な輪高台を伴う。中・新相に存在し、高台径が縮小化し、口縁・体部の外傾度が増す方向で変化するものと思われる。A III・IV形式とともに、内面を中心に密度の高い丁寧なヘラ磨きが施されるが、同時期の畿内での事例のような渦巻や輪花状の暗文は認められない。

A III・IV形式とも、IV期新相をもって終わり、V期には継続しないようである。IV期の指標をなす形式といえよう。

3. V期の様相

3-1. 抽出資料と問題点

【V期古相】

讃岐国分寺跡 SK25・26 出土土器(図版11) 僧房跡北側雨落ち溝の外側(北側)に群在する土坑群のうちの2基で、方形(SK25)と不定形な梢円形(SK26)を呈する平面形をもつ。詳細についてはまだ報告されていないが、概報の写真図版(PL.4-(7))を見る限りでは、残存深度

はかなり浅いようである。土器はかなりまとまって出土したようであり、SK25では「多量の土師器、少數の黒色土器および須恵器から成り、完形品も多い」とされ、SK26では「整理箱1箱分の土器が出土した。大部分が土師器で、少數の黒色土器・須恵器を含む」とされる。なお、同資料については現在、高松市埋蔵文化財センターで整理中であり、同センターの御厚意で実見する機会を得た。搬入品としては、①黒色土器椀（概報18-9、SK26出土）、②須恵器平高台椀（18-20、SK25出土）、③篠窯産須恵器捏鉢がある。①は楠葉型黒色土器B類椀であり、森隆氏編年のI段階（10世紀中頃）に相当する。I段階の岡山南遺跡（四条畷市）井戸出土例は、平安京右京二条二坊三町SX1（平安京Ⅲ期古：930～960年頃）併行の京都産土師器皿と共にしているとされる。②は底部回転ヘラ切りであり、畿内（西摂）もしくは播磨からの搬入品と思われる。③は平安京Ⅲ期古～中（930～980年頃）に位置付けられる。

【V期中相】

前田東・中村遺跡E区 SD19 出土土器（図版12～15）

ほぼ同時期と見られる建物群に伴う区画溝とされる。土器群は3層に分けられる堆積層の下層（黒褐色粘土層）の上部から多量に出土している。また、平面的には検出部の中央北半部に集中するようであり、「南半部では遺物は少なかった」。出土状況の写真（報告書図版64下段）や土層断面図（報告書第452図B-B'断面）を見る限り、遺物は溝底や西肩部直上で出土したものと、2・3層の境で出土したものがあり、前者が集中部北側、後者が集中部南側に多く見られる傾向を指摘できる。溝の埋没過程で複数回投棄されたものの集積として捉えられるのではないか。出土土器は、取り上げ時の混在と推測される中世II期の須恵器椀（報告書394）、より先行する時期（IV期中相～新相）と見られる十瓶山窯産須恵器杯（395～397、いずれも細片）を除き、ほぼまとった内容をもつと考えられる。ただし多量に出土した土師質土器杯は、形式内での個体差がかなり認められる。これは、例えば中世II期の土師質土器杯に比して、際立った特徴といえる。搬入品としては、楠葉型黒色土器B類椀（383）、近江型縁釉陶器椀（400・401）がある。前者は森隆氏編年のⅢ段階（11世紀初頭～前半頃）に、後者は高橋照彦氏編年の近江II期（10世紀後半）に比定できる。

【V期新相】

前田東・中村遺跡E区 SK04 出土土器（図版16）

隣接する掘立柱建物（S B 12）に伴う地鎮土坑と推測されている。直径0.76m、深さ0.42mの素掘り土坑であり、底面中央に十瓶山窯産須恵器広口瓶（報告書690）を据え、埋め戻し途上で土師質土器杯を2枚一組にしたものと長頸壺（689）1点を広口瓶の周囲6方向に置き、最後に広口瓶の口縁を板石と黒色土器托上椀底部で、長頸壺口縁部を托上椀体部片で蓋をして、埋め戻されている。土師質土器杯は、SD19よ

りも形態的なまとまりがあるように見受けられるが、それでも中世Ⅱ期のそれよりも個体差が大きい。また689については、その編年的位置付けが問題となろう。

3-3. 須恵器

【杯B形式】

讃岐国分寺跡SK25・26出土資料と同様の特徴をもつ十瓶山・深池窯跡出土資料も参考に概観する。Ⅳ期から引き続くBⅢ・Ⅳ・Ⅳ''・Vの4形式が見られる。古相においては、BⅣ''はⅣ期での変遷の延長上にあるといえ、口縁・体部の外傾度がさらに増している。これに対しBⅢ形式は、Ⅳ期新相よりもやや浅手になるものの、口縁・体部の外傾度はさほど変化しない。またB V形式も浅手化し、体部が内湾するようになる。BⅣ''形式は、Ⅳ期新相よりも口縁・体部が直立気味で、底部が厚くなり平高台状を呈する。中相では、須恵器杯の存在は極めて稀になり、口径が縮小し浅手になったBⅣ'形式が確認できるに過ぎない。

VI期古相での須恵器杯の形態・技法・バリエーションは、上記4形式の延長上にあるとは考えられない。やはり須恵器杯は、V期中相での僅少化（新相では資料数が少ないため途絶したかどうかは不明）を経て、VI期に新たな形で再登場すると見た方がよく、VI期古相の杯にヘラ磨きが多用されることから、黒色土器・土師質土器を含めた生産集団の再編・混淆が行われたと推測される。

3-4. 土師質土器

【杯A形式】

A I・I'・I''・Ⅲの4形式が認められる。Ⅳ期新相に比して、全体に器壁が厚くなり、特に体部下半～底部外縁でこの傾向が著しく表れる。A I形式は、古相ではⅣ期新相よりも口縁・体部が直立気味になり、中相では若干浅手になる。A I'形式は古相にのみ認められ、A I形式と同様に口縁・体部が直立気味になる。A Ⅲ形式は古相にのみ認められるが、やはり口縁・体部が直立気味になり、底部が分厚くなること、また底体部境外面に強く回転ナデが施されることで、須恵器杯BⅣ''形式と同様、平高台状を呈するようになる。A I''形式は中相に認められ、A I形式よりも内湾する口縁・体部をもつため、底体部境が緩やかにカーブするように見える。

【杯C形式】

杯B形式よりも小口径・浅手の、皿に近い形態をもつ一群である。相対的にやや深手のC I形式と、かなり浅手のII・II'形式が認められる。既述のようにC I形式がⅣ期新相に出現してい

た可能性があるが、C形式が量的に多数を占めるようになるのはV期古相からであり、V期の指標をなす形式といえる。

C I 形式は、直線的に外傾する口縁・体部をもち、底部中央が弱く突出して丸底状を呈する。古相から新相にかけて、口径の分布域にはほとんど変化が見られないが、形態的に底部厚が増し(古相→中相)、より深手で口縁・体部が直立気味になる(中相→新相)という変化をたどる。⁴⁰ところで、前田東・中村遺跡E区SD19出土例(中相)・同SK04出土例(新相)の中で器面の遺存状態が良好なものを見ると、見込み中央に回転ナデに後出する強いナデの痕跡が認められる。ヘラ切り後に器体の見込みを強くナデるように押し、底部を突出させる工程が推測され、森田勉氏が大宰府出土土器で指摘したのと同様の状況が指摘できる。ただし、大宰府の事例は口径15cm前後の大型品に見られる点がC I 形式とは異なっており、またC I 形式での「底部押し出し」はかなり粗雑に行われ、同一個体でも部位によって仕上がりの形状が異なることなど、大宰府での事例と同一の製作技法として評価し得るかどうか、疑問である。なお、「底部押し出し」がC I 形式の設定にあたっての必須要件かどうかも、検討する必要がある。

杯C II 形式は、C I 形式よりも浅手で皿形に近いものである。底部は突出気味のものも少量あるが、大多数は回転ヘラ切りによる平底である。口縁・体部が外傾気味に比較的長く延びるもの主体(古相)から、より直立気味のもの主体(中相→新相)へと変化する。前田東・中村遺跡E区SD19出土例では、①平坦な底部から外反気味に延びる口縁部をもち、底部と体部との境は明瞭な屈曲をなし、底部外縁に明瞭なアクセントがあるもの(仮称A群)、②底部から外傾気味に立ち上がる体部・口縁部をもち、底径指数(口径/底部径)がA群よりも小さく、直口もしくは外反する口縁と底部との間に丸い腰部をなすもの(仮称B群)、③底部から内湾もしくは真っ直ぐ延びる体部・口縁部をもち、底部指数がA群と同様で口縁部の外傾度はB群よりも直立気味、丸い腰部をもつもの(仮称C群)、の3つに細分できるようにも見受けられる。しかし、それぞれの群の変化は極めて漸移的であり、上記①~③の特徴を形式細別の指標とするのは難しいと考える。むしろ從来よりも個体差が顕在化したような状況が想定できるのではないだろうか。

なお、古相で平高台的に突出する底部をもつものをC II' 形式としたが、その存在は極少数であり、上記したようなC II 形式の変異幅の中で捉えるのが妥当かもしれない。

【台付杯】

IV期新相から引き続き見られ、かなり普遍的な存在である。脚台の貼り付け位置は、底部外縁端よりも明瞭に離れて内側にあるものと、やや内側にあり接合時の補充粘土によって底部外縁と脚基部の境が連続的になるものの2者併存(古相)、やや内側と外縁端の2者併存(中相)と変化する。脚端部の形状は、明瞭な面をもつものと、やや丸味をもった面をもつものの併存(古相)、やや丸味をもった面をもつものと、丸く收まり面をもたないものとの併存(中相)と変化する。

新相の状況が不明であるが、VI・VII期にも継続していく。

【椀B形式】

中相では一定量存在を確認できるため、現在のところ未見である古相でも存在した可能性がある。B I・IIの2形式存在する。B I形式は、IV期新相よりも体部下端内面の立ち上がりが短くやや不明瞭になり、同部の器壁が厚くなっている。おそらくそれと関連するが、体部下端外面に強い回転ナデが施されて平高台との境が明確化される。この部分が強いアクセントとなるため体部が内湾するように見えるが、体部上半から口縁部にかけては直線的に外傾する。B II形式は、IV期新相よりも口縁・体部長が短く、浅手で底径指数が大きくなる。また体部の内湾も弱くなる。椀B形式は、主にB I形式と思われるものがVI・VII期にも一定量存在する。

3-5. 黒色土器

【A類椀A II形式】

半球形の深い椀形の器体をもち、底部に長く延びる断面方形ないし逆台形の輪高台が貼付される。古相では、やや浅手のものと深手のものが存在するようであるが、資料数が少なく、有意な区分とし得るかどうかは検討課題である。見込みには平行線状磨き、体部内面には5ないし6方向の分割磨きが施されるが、外面には分割・回転間わずヘラ磨きが施されない。外面のナデ調整は回転ナデであり、土師質土器と同じく回転台上での成形が推測される。中相では、深手と浅手に一定の幅があるが、中間的な個体もあるため、明確な区分は難しい。しかし、傾向としては深手のものは少ないようである。また、外面に回転ヘラ磨き調整と分割磨きが併用される。内面の磨きは、古相と同様である。外面の回転ヘラ磨きは、体部下半から底部にかけて施される回転ヘラ削りによって生じた粗面と稜を処理するための手法と考えられる。前田東・中村遺跡E区SD19出土例（中相）の浅手の一群には、砂粒の含有が少なく白色に発色するもの（精製）と、砂粒を多く含み褐色に発色するもの（粗製）の2者があり、別生産地の所産である可能性がある。新相では資料数が乏しく未見であるが、VI期古相には同一の型式組列で捉えられるものがおり（西村型土器椀）、外面の分割磨きの省略、深手の増加、などの変化が指摘できる。

【A類椀A V形式】

浅手の器体と細身で長く直立する輪高台をもつ。中相に見られる。A II形式と比較して、①高台が細身で径が大振り、②外面に回転ヘラ磨きを施さない、③器体の作巧が粗雑で器面の起伏が見られる、④口縁端部内面に内傾する明瞭な平坦面をもつ、などの相違点を指摘できる。模倣対象とした焼物が、A II形式とは異なる可能性性もある。時期幅のある資料であるが、川津東山田

遺跡 I 区SR01 (D) 東側流路出土土器の中に A V 形式を見出すことができる。

【B 類椀 A VII 形式】

A 類椀 A II 形式と同様の形態・技法をもつもので、やはり深手と浅手の幅がある。中相に見られ、新相は未見だが VI 期古相には見られるため、連続した型式組列を構築できる可能性がある。出現期については、中相とするか古相まで遡らせるか、検討課題となる。いずれにしても、A 類椀に比してその存在は少數派にとどまるようである。

【B 類椀 A VII 形式】

細身で長い高台をもち、高台外周に鱗状に突帯を巡らせる「托上椀」である。他の黒色土器椀よりも大振りであり、相対的に高台径は小さく、高台長が長い。内面には分割磨き、外面には回転ヘラ磨きが底部を除くほぼ全面に施される。回転ヘラ磨きの存在から、在地産の可能性が強いと考えられる。V 期中相・新相に見られるが、帰属細別期が明らかでない（時期幅があつたり出土資料が僅かであるなどの資料上の制約により）個体を含めると、前後に及ぶ可能性があるため、型式学的な変遷過程の見通しを示す。

①前田東・中村遺跡 H ①区SD03出土例。古代（8世紀代中心）・中世（12～13世紀）・近世の建物や溝が集中する地点で、SD03からは12世紀代の和泉型瓦器や平瓦片が伴出、またSD03と重複・後出するSD09からはIV 期中相～新相の黒色土器 A 類椀 A IV 形式が出土。遺物の共伴関係から帰属細別期を押さえることはできない。還元状態に近い、かなり良好な焼成の B 類椀 A VII 形式であり、ハの字形に長く延びる高台の端部には水平方向の広い平坦面が形成される。高台基部の屈曲は明瞭で、その外側の突帯は先端下面が広く回転ナデされて、やや上向きの水平方向に取まる。体部には回転ヘラ磨きが隙間なく密に施されているようである。全体にシャープな作巧である。

②前田東・中村遺跡 E 区SD19出土例（V 期中相）。①よりも高台は短くなるがハの字形の踏ん張りは踏襲され、基部が明瞭に体部下端から屈折するものと、やや甘く緩やかに曲がるものがある。しかしいずれも、高台端部にやや膨らんだ明瞭な面が形成される。また突帯先端下面は回転ナデによる明瞭な平坦面があり、上向きに取まる。体部の回転ヘラ磨きは密に施される。

③前田東・中村遺跡 E 区SK04出土例（V 期新相）。②よりも高台が短くなり、基部は甘く緩やかに曲がる。高台端部が丸く取まるようになる。突帯下面のナデは弱くなり、端部は斜め下方を向く。口縁・体部の回転ヘラ磨きは、やや隙間が空く。

④川津東山田 I 区SR01 (D) 東側流路出土例。III 期～VI 期の土器が混在して出土しており、帰属細別期を絞り込めない。「土師器」として報告されているが、内面の過半と体部外面に黒色処理の痕跡と見られる黒化部分が認められることから、二次的な被熱で炭素吸着が失われた黒色

土器B類椀と考えることができる。③よりも高台はさらに短く低く、基部は接合痕を残しており十分なナデ調整がなされない。突帯はかなり短く突き出す。体部外面のヘラ磨きは回転磨きでなく、分割磨き。

以上から、①→②→③という変遷が想定できる。④についてはこれらに後続する可能性があるが、外面に回転ヘラ磨きが採用されることをどのように解釈するか、という問題が残る。①～③は同一遺跡であり、④は地域的に大きく隔たっていることも気になる点である。例えば今回の検討対象地域（讃岐中央部）からは外れるが、西讃とその隣接地域でV期古相～中相と併行すると思われる様相を構成する黒色土器椀は、回転ヘラ磨きを採用せず、内面を縦方向（放射状）に磨くという固有の特徴があり、その技法を基盤とする托上椀が見られる。この托上椀の高台・突帯の細部形態や調整手法は①～③とは異質である。したがって、①（古相）→②（中相）→③（新相）とした上で、④は同一系譜として後続するVI期古相に位置付けるか、別系譜として併行的にV期中相もしくは新相に位置付けるかの、2通りの可能性があるとしておきたい。

4. 変遷図

以上の検討を前提として、暫定的に変遷図を示す（第2・3図）。IV・V期をそれぞれ3区分することは妥当であるとの見通しが得られる。しかしそれぞれの区分（古相・中相・新相）の輪郭をより明瞭にするためには、前後のIII・VI期の事例との系譜関係、細別形式の設定、組列を構成する型式の同一期における存否や出現頻度（セリエーション）、資料数の僅少なV期新相相当資料の探究、などの検討作業が必要であり、本稿（5）に向けての課題となる。

5. 想定される年代

4. に示した課題が留保条件となるが、年代の見通しについて記す。想定年代は、当面は共伴した搬入品の年代観に拠るしかない。①ある搬入品の最古共伴例、②ある抽出資料の中での最新の搬入品の存在、をもとに年代を想定する。

IV期の抽出資料には、京都産縁釉陶器が共伴することが多い。高橋照彦氏編年II期（9世紀中葉～後半前半）の最古共伴例は、多肥北原西遺跡SD0501（IV期古相）。同編年III期（9世紀後葉～10世紀初頭）の最古共伴例は、川津東山田遺跡I区SD3109（IV期新相）。したがってIV期古相は9世紀中葉を、IV期新相は9世紀後葉を上限にできる可能性がある。しかし、III期中相の讃岐国府跡第2次第5・6層出土土器は、黒色土器杯（椀）のプロポーションから9世紀前葉に位置付けるのが妥当であり、これに後続するIII期新相（買田岡下遺跡II区南包含層、十瓶山西2号

窯跡、すべつと1号窯跡古相）を9世紀中葉に位置付けざるを得ない。したがって、IV期古相は9世紀後葉頃に下げて考える必要があろう。

V期中相の前田東・中村遺跡E区SD19出土土器での最新搬入品は、森隆氏編年のⅢ段階（11世紀初頭～前半頃）に位置付けられる楠葉型黒色土器B類椀である。VI期古相の須恵器鉢D形式（D-1型式）は、大宰府条坊跡第88次SE040で山本信夫編年XⅠ期（11世紀中葉）の土器と共に伴しており、VI期新相（西村1号窯跡）の想定年代との関係からも、VI期古相を11世紀中葉頃に置くことができる。すると、V期中相は上記楠葉型黒色土器B類椀の年代をほぼ当てはめてもよからう。ただし、資料数が少ないながらも土師質土器杯CⅠ・Ⅱ形式、黒色土器B類椀AⅧ形式に明瞭な変化が認められるV期新相がVI期古相との間に介在するため、V期中相の上限は10世紀末葉（後葉前半）まで遡らせた方がよいかもしれない。

V期古相の讃岐国分寺跡SK25・26出土土器での搬入品は、森隆氏編年のI段階（10世紀中葉）に位置付けられる楠葉型黒色土器B類椀と、平安京Ⅲ期古～中（930～980年頃）に位置付けられる篠窯産須恵器捏鉢が手掛かりとなる。特に後者は、畿内や大宰府では11世紀前葉でも一定量の存在が認められる。V期中相の年代観との関係をも踏まえると、V期古相は10世紀後葉を中心と想定しておくのが妥当であろう。上記のようにV期中相の上限が10世紀末葉まで遡ると考えられるので、V期古相の上限を10世紀中葉後半に食い込ませておく。

IV期古相＝9世紀後葉、V期古相＝10世紀中葉後半～後葉と捉えることができるならば、IV期中相・新相はその間の年代が与えられると見なすことができる。IV期中相＝9世紀末葉～10世紀前葉前半、IV期新相＝10世紀前葉後半～中葉前半としておくのが穩当な見方でないだろうか。2014年度調査の讃岐国府跡32次SK1003は、火災に伴う一括廃棄土坑と推測される遺構で、出土土器はIV期新相に相当する（図版17⁴⁴）。共伴した畿内産黒色土器A類椀は、平安京Ⅱ期新（900～930年頃）に相当するが、上記のように考えると、一応の整合性をもって捉えることができる。

以上を踏まえると、暫定的に下記のように整理できよう。

IV期古相	9世紀後葉
中相	9世紀末葉～10世紀前葉前半
新相	10世紀前葉後半～中葉前半
V期古相	10世紀中葉後半～後葉前半
中相	10世紀後葉後半～11世紀前葉前半
新相	11世紀前葉後半～11世紀中葉前半

（以下、「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（2） 7世紀中葉～9世紀中葉の供膳器種」に続く）

註

- 1 VI～VII期については、既に空港跡地道路Ⅳの発掘調査報告書において示した編年案(佐藤2000a)がベースになる。
- 2 「日本建築」を様式史という枠組みに定位させるために、伊東忠太は「法隆寺建築論」を著した。そこで法隆寺金堂・塔・中門を「推古式」とする考え方の前提として、「建築の年代或は共に数拾年或は百年の前後あらん、然れども其形式均しく、其構造法均しく、其一般の建築的性質だに均しくはこれ学術上同時代の建築と云ひて可なるべく、若し一旦にして互に相異ならば其年代全く均しきもこれ学術上別時代の建築と云はざるべからず」の考證家は余之を知らず、建築学上の眼孔只この三建築の性質如何を觀察するあるのみ、其他の朝に着手し何の朝に成るやは則はち第二の問題なり」と述べ、「吾人はこの三建築を以て同時代の建築と見做し、之を同一の派流となすに猶可せらるるものなり。吾人は其建築落成の期が推古の時代に属するや或ハ和同年代に属するやを知らず、然れども余は之を以て断じし。推古派流と名くるに躊躇せさるなり」と表明した。様式と編年/年代が別の問題として扱われていることが分かる。伊東忠太1989[法隆寺建築論]「建築雑誌」第7巻第82号、日本建築学会
- 3 ハインリヒ・ヴェルフリン(海津忠雄訳)2000(原著1915)『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』慶應義塾大学出版会
- 4 小林行雄の建築家としての経歴は、神戸高等工業学校建築科在籍期を含めても数年(1929～32年、昭和4～7頃)とされるが、この時期はまさしく初期の小林様式論が形をなしていった時であり、建築の仕事との思考的な往来が重ねられた可能性がないのか、一考の価値はある。現段階では筆者ははとんど資料的検討を経ていないので、素描とともにまとまるが、以下のような点に注目している。
 - ①神戸高工建築科の教授に古宇田実(1929～1945年校長)、滝澤眞弓(1931～1949年)がいたこと。古宇田は、東京帝国大学建築科を卒業後、建築装飾研究のため洋行。神戸商工会議所(1929年竣工)や神戸元町スズラン灯(1926年竣工)などの設計者で、建築様式史のパイオニア的存在の「建築史」(バニスター・フレッチャー、1896初版)の翻訳者としても知られる。また滝澤眞弓は、1920年(大正9)に堀口捨己・山田守らと分離派を結成し、過去の建築様式に縛られない独自の建築表現を目指した。創作の場において、小林は建築様式の繼承者と超克者に接する環境に身を置いていたことになる。もっとも滝澤ら分離派も、超克すべき過去の様式については芸術性という点で一家言持つており、様式についての造詣は深かった。建築様式を踏まえた上で肯定・否定の選択を自ら行ったと見られる。②卒業後、「大阪市内の建築事務所に勤め、設計を担当した新井邸(1932年竣工)、小山田宏一(2003)『弥生文化研究への熱いまなざし』森本六爾・小林行雄と佐原真矢(大阪弥生文化博物館)はロマネスク様式風建築であり、関西でのロマネスクの盛行(古宇田も神戸商工会議所でロマネスクを試みている)に従ったとしても、細部装飾への過度ともいえるこだわりが看取できる点が特徴的である。小山田2003でも指摘されているが、「私はつづめて過去の建築様式を参考し、装飾の多い設計をするようにした」(小林行雄1983「わが家の自叙伝」「考古学一路」平凡社)という証言を地で行くような作品である。小林の世代の建築家は、丹下健三(1913～2005年)に代表されるように歐米でのモダニズム第2世代(ル・コルビュジエ等)の影響を理論的に強く受けており、歴史主義建築＝様式は捨て去るべきものとの認識が大勢を占めていたと考えられる。建築家としての小林の立ち位置を明らかにすることは、考古学研究においても重要な視座を得ることになる。
 - 5 後述するように共有的と思われる属性をもつ類似した形態・技法の一群を「形式」と捉え、その細別単位を「型式」とし、それらの系統を示す配列を「型式組列」とする。したがって「形式」は「型式組列」によって時間的構成のあり方が示されることになる。
 - 6 ただし、焼物の組み合わせに見る様相の変化を、時代区分(古代/中世/近世/近代)に連動させて理解しようとする試みは、かなり一般的に行われている。
 - 7 佐藤竜馬1996「国分寺袖井遺跡の成立—中世前期土器生産の変容—」『中近世土器の基礎研究』X I、日本中世土器研究会
佐藤竜馬2000b「西村型土器模の系譜」財团法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ
当事者の意識が、モノ資料としての土器の解釈の絶対的な要件となるのではないとは考える(註8参照)ことを前提にした上の経験談を記す。香川県内で2000年代まで焼成等を生産していた二つの生産地(高松・御殿、三豊・岡本)は、後述するX II期からの生産が止れるが、最終段階での焼成は御殿が瓦質、岡本が土師質と全く異なっていた。しかし生産関係ではお互いの焼成の違いについて、ほとんど無意識的(というか「それが当たり前」式の感覚)であり、自作製品の焼成にはそれぞれの流儀に固く拘っていたが、他者との違いに格別な意味を認めていなかったように筆者は見受けられた。焼成で区分したがる考古学研究者とは異なる「まなざし」をもっていたことは間違いないであろう。ちなみに御殿と同系統の生産地大原(1980年代頃まで生産)は土師質であるが、当事者は系譜関係に全く無自觉であった。
 - 8 三中信宏1997『生物系統学』東京大学出版会
 - 9 ある程度統合された形ではあるが系統をビジュアルに示したのは、1943年(昭和18)の唐古(・鍵)遺跡の発掘調査報告書を嚆矢とするようである。ところでこれに因襲して、しばしば用いられる電車の系統図(寺沢1989「様式と編年のありかた」「弥生土器の様式と編年 近畿編 I」木耳社)は、電車の製造・運行の当事者が把握する分類認識であるが、考古学的に見てこの分類のみが唯一というわけではないことに注意する必要がある。

- 10かかる意味で、1980年代後半の近江における古代土器の系譜関係を論じた森隆氏の一連の論考（森隆1986「滋賀県における古代末・中世土器」）[中近世土器の基礎研究]Ⅱ、日本中世土器研究会/森隆1988「近江地域出土の古代末期の土器群について」[中近世土器の基礎研究]Ⅳ）のような視点で学ぶ今日の意義があると考える。
- 11長井博志氏による東讃地方の中世土器質土器変遷の検討では、在地土器を分析対象としているが、①分類が個別完結的に行われ、系譜関係の認識が明確でない、②年代が推定可能な搬入品（讃岐内外問わざ）の年代観を前提にして複数資料の共伴関係を想定している（搬入品の年代判定にも問題を残す）、という2点で、様相把握への方法上の問題を指摘せざるを得ない。長井博志2003「東讃地域の土師器の変遷」[四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第45号 天王谷遺跡]（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 12古代（飛鳥時代）以降について、日本の考古学研究で「歴史時代」と呼称されることがある。1960年代に発行された「日本の考古学」全7巻において「歴史時代」と呼称されるのがその典型の一つで、1980年代までかなり頻繁に使用され、考古学研究の対象が古代・中世・近世と細分化されるに至ったが、次第に使用されなくなったようである。「先史時代」あるいは「先史考古学」の研究が盛んになって初めて、古文書等の文字資料に依拠した既存研究が先史時代から逆照射・相対化されて出てきた用語であると思われる。「歴史時代」の呼称がなお有効性をもつかどうかははなはだ疑問であるが、7世紀以降の考古学研究における時代区分（飛鳥・奈良・平安・鎌倉……、古代・中世・近世・近代）は既存の概念への当てはめに過ぎず、考古学独自の時代区分を必要とするか否かが議論されない限り、どのような名称を用いようと「歴史時代」という呼称を超えたことにはならないであろう。
- 13例えば③（古墳時代タイプの蓋杯）。i)口径の縮小化、ii)たちあがりの短小化、iii)底部調整（回転ヘラ削り）の省略化、といった傾向が顕在化するのがこの時期であるが、(a)口径が縮小化せずに ii・iii)が顕在化する個体、(b)底部調整が省略されずに i・ii)が顕在化する個体、などが存在する。これらをあら一定幅をもたせた概念上の振れ幅と見なすのか、有意な地域色と見なすのかについては、もう少し事例の増加を待った方が良いかもしれないが、(a)については生産地の特定作業と並行する形で地域色として指摘できる可能性をもつと考える。
- 14佐藤竜馬1989「香川県における7世紀の須恵器」[「櫛の木古墳・大石北谷古墳発掘調査報告書」長尾町教育委員会
片桐孝浩・佐藤竜馬1997「四国地方における7世紀の土器」[「古代の土器研究—律令の土器様式の西・東5—7世紀の土器」古代の土器研究会]
- 15信里芳寿2002「小谷窑跡出土須恵器の編年」[「高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窑跡・塚谷古墳】（財）香川県埋蔵文化財センターほか
- 16呼称の問題であるが、「土師器」にせよ「土師質土器」にせよ無条件にニュートラルな立場で使用することはできない。この用語については最も1970年代以来の用語をめぐる議論があり、「須恵系土師質土器」「土師質土器」「回転土師器」「ロクロ土師器」などの名称は、そうした議論と無関係ではない。要はその土器に対する系譜的な理解が含まれているわけで、単に「素焼き（土師質）だから土師器でよい」ということはならない。それであれば、そもそも古代史料に記載された実態不明な焼物呼称を探るのは止めて、「素焼き土器」あるいはもっとシンプルに一般的現代用語「土器」にして、縦文→現代の「土器」を統一的に捉えたらどうか。
- 17片桐孝浩1997「讃岐出土の東北系土器について—とくに黒色土器について」[「（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要」]Ⅲ松村一貞2013「西海道の集落遺跡における移配伴因の足跡について—豊前・筑前・筑後・肥前4国の場合を中心にして—」[「内海文化研究紀要」広島大学大学院文学研究科附属館内海文化研究施設]
- 18田中琢1967「畿内と東国」[「日本史研究」第90号、日本史研究会。黒色土器以外にも、例えば6世紀代における須恵器杯模倣の土師器が北部九州・瀬戸内のエリアと、関東周辺（鬼高式）に認められることなど、畿内周辺地域を除く東国と西国との共通要素を見出すことができ、これらを範例移配で理解することは困難であろう。
- 19山本信夫2005「加賀における律令の土器様式の転換期と編年の検討：九州から見た金沢大学角間遺跡出土の古代土器分析に寄する視点」[「金沢大学文化学研究7」]金沢大学
- 20佐藤2000aでは、楕A II形式の出現を中世I期（本稿でのV期）の指標としたが、前田東・中村遺跡E区SD19出土例の確認によって、同資料を「その変化の起点に位置付けることは可能であり、西村型土器碗は先行する非十瓶山窯黒色土器を直接の祖形として成立したと捉えておきたい」と考えるに至った（佐藤2000c）。このため本稿では、楕A II形式の出現をV期のうち（後述するようにV期中相）に捉えておく。ただし、生産地が西村遺跡に集約され、中世須恵器を構成する一形式として変容していく過程に鑑み、VI期以降の楕A II形式に対して「西村型土器碗」という概念を適用させることは、現在でも妥当であると認識している。
- 21当然ながら土器碗に代わる漆器碗の存在が問題となるが、IX-X期の出土事例はまださほど多くなく、今後の課題とせざるを得ない。
- 22乗松真也2004「14~15世紀の土師質土器杯編年」[「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6刷 漢ノ町遺跡】（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか、は確期からの系譜関係を念頭に置きつつ上記課題に取り組み、一定の成果を挙げている。ただし、杯と皿との形態的な区分の仕方や、15世紀中葉以降（乗松氏のいう7段階）の内容や年代比定にお問題を残して

いと考る。

- 23 口縁部の外側に取手を貼付する点では「外耳」的だが、吊るすための円孔が内面側に開けられており「内耳」的である。讃岐全域のはか、阿波でも存在が確認される。
- 24 小川賛2000「片原町遺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度」香川県教育委員会
- 25 佐藤竜馬2003「近世在地土器の検討」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 26 上記佐藤2003文献および松本和彦2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 27 「近現代考古学」における土器・陶磁器編年の必要性を問題にする以前に、前近代の土器・陶磁器がいかにして現代へと繋がっていくのかを見通すことができない資料の欠落状況に、ある種の感概を覚える。考古学研究者にとって、対象とする時代や分野を考察し研究する、という行為は、現代人としての自分自身にとってどのような意味をもつてであろうか。
- 28 貝前などの既存生産地での近代的技法(銅版転写、模込み等)の普及は、概ね20世紀に入ってからのようにあり、それに加えて洋式食器の普及と、土器(在地・搬入を問わず)の限定的・補完的な固定をもって現在に続く近代的な土器・陶磁器様相と捉えたい。
- 29 典型的な様相という設定を行うのであれば、A～D群とa～e群の差異を整合させることも可能であろう。例えば典型様相1=Ⅱ期新相、典型様相2=Ⅳ期中相、典型様相3=Ⅶ期中相、典型様相4=X期、典型様相5=XⅡ期古相、という形での典型例の提示である。しかし典型様相1=古代前期土器、典型様相2=古代後期土器・陶磁器、典型様相3=中世前期土器・陶磁器、典型様相4=中世後期土器・陶磁器、典型様相5=近世土器・陶磁器と見なすには、年代的枠組み以外の要素において、なぜそれが古代/中世/近世の特徴の表出と見なせるかという点を自説的に説明する必要があるし、それが何土器・陶磁器はそれ自体から式に説明できるかどうかも、一度は疑ってみた方がよいであろう。
- 30 高松市多肥上町所在。旧香河郡多配郷
- 31 綾歌郡綾川町所在。旧阿野郡甲知郷。
- 32 丸亀市郡町町所在。旧郡町郡家郷。
- 33 坂出市川津町所在。旧羽足郡川津郷。
- 34 坂出市川津町所在。旧羽足郡川津郷。
- 35 三野・高瀬窯跡群(從来、三野窯跡群・高瀬末窯跡群・瓦谷窯跡とされていた窯跡群に加え、高瀬町史編に伴う分布調査によって存在が明らかにされた複数の窯跡群の総称として提唱された(大山眞充2005「古代の窯業」「高勢町史 通史編」高瀬町)。本稿でもこれにしたがいたい)。その地理的区分(支群設定)や変遷過程、結果として分布域に包括される宗吉瓦窯跡群との関係等、なお今後の課題が多い。このうち平見第1地点(窯跡)ではⅣ期中相と思われる須恵器が採集されている。また讃岐西端の大坪窯跡(鶴音寺市豊浜町)は、讃岐・伊予の国境をなす金見山・大谷山塊の讃岐側にあり、伊予側でも須恵器窯跡が3基知られているため、同一生産地を構成する可能性もある。大坪窯跡採集須恵器(松本敏三・岩橋孝1985「香川家古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」瀬戸内海歴史民俗資料館紀要)は、Ⅳ期新相と考えられる。この時期の十瓶山窯製品は固有の特徴をもつが、平見第1地点・大坪窯跡とともに実測図から判断する限りでは十瓶山窯製品と共通した形態的特徴をもっているようである。
- 36 高松市国分寺町所在。旧阿野郡新居郷。
- 37 森隆2000「植葉型黒色土器B類頃と初期植葉型瓦器類」「中近世土器の基礎研究 XV」日本中世土器研究会、四条畷市の報告書を直接参照できていない。また、平安京Ⅲ期古の土器類との共伴関係がそのまま植葉型黒色土器B類頃Ⅰ段階の年代を示すかどうかも検討の余地はある。したがって、弱引き的な年代参照となる讃岐国分寺跡SK25・26出土土器が、そのまま平安京Ⅲ期古に年代的にスライドするかどうかは、微妙なところである。
- 38 高松市前田東町所在。旧山田郡宮廻郷。
- 39 宮崎哲治2001「農林事業等予定地内の調査」「埋蔵文化財試掘調査報告XIV 香川県内遺跡発掘調査」香川県教育委員会
- 40 報告者の森裕也氏は、前田東・中村遺跡E区SK04出土土器をSD19出土土器に先行する資料と見なし、SD19出土土器を讃岐国分寺跡SK25・26と同時期としている(森裕也1995「前田東・中村遺跡の平安時代の土器」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか)。森氏の所見は、共伴した黒色土器などの出土品の年代観や遺構の分布状況を根拠としている。筆者はC形式で想定される変遷過程から国分寺SK25・26→前田東・中村SD19→同SK04が妥当と考える。(3)で検討予定であるが、SK04に埋納されていた十瓶山窯須恵器広口瓶(壺C形式)の出現を考えるにあたって

- も、SK04の編年の位置付けは重要な作業となる。
- 41 例えはAII形式は縦釉陶器柄、AV形式は楕葉型黒色土器椀あるいはIV式新相のAⅢの系譜を引くと理解することもできるかもしれない。
- 42 宮崎哲司2005「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第55冊 前田東・中村遺跡」香川県教育委員会ほか
- 43 石田遺跡SK11出土土器は、土師質土器杯の直接的な比較は難しく、杯A形式近似の特徴（器壁の薄さ、底部の突出気味）はIV式新相に近い要素をもつが、それでは深鉢形の黒色土器A類椀の出現が讃岐中央部よりも先行することになる。黒色土器椀の存在をもって、V式古相もしくは中相まで下げるという選択肢もあるが、土師質土器杯の特徴とはやや齟齬をきたすように思われる。現実的には、西諸地域での事例の蓄積を持つしかないが、当面は石田遺跡SK11出土土器を折衷的にV式古相併行と捉えておきたい。
- 44 讃岐国府跡発掘調査平成26年度概報に掲載予定。本稿掲載の図面は信里芳紀氏作成。

主要参考文献

- 片桐孝浩1992「古代から中世にかけての土器様相」「中小河川大東川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」「関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢」関西大学
- 1995「楠井産土器の編年」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2000a「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2000b「西村型土器椀の系譜」「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要録」
- 2000c「讃岐における平安期の土器研究」「中近世土器の基礎研究X V」日本中世土器研究会
- 2003「近世在地土器の検討」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡（西の丸町地区）III」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 乘松真也2004「14～15世紀の土師質土器編年」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 浜ノ町遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2015『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡』香川県埋蔵文化財センターほか
- 香川県教育委員会1968「香川県陶邑古窯跡群発掘調査報告」
- 片桐節子1994「十瓶山窯跡群すべっと支群一綾南町総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一」綾南町教育委員会
- 和田素子1993「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊 郡家一里屋遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 山元素子2000「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第38冊 川津東山田遺跡I区」（財）香川

県埋蔵文化財調査センターほか

藤好史郎・西村尋文・大久保徹也1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

松尾忠幸1987『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会

森格也・古野徳久1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

古代の土器研究会1992『古代の土器 1 都城の土器集成』

1993『古代の土器 2 都城の土器集成II』

高橋照彦1995『縁釉陶器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

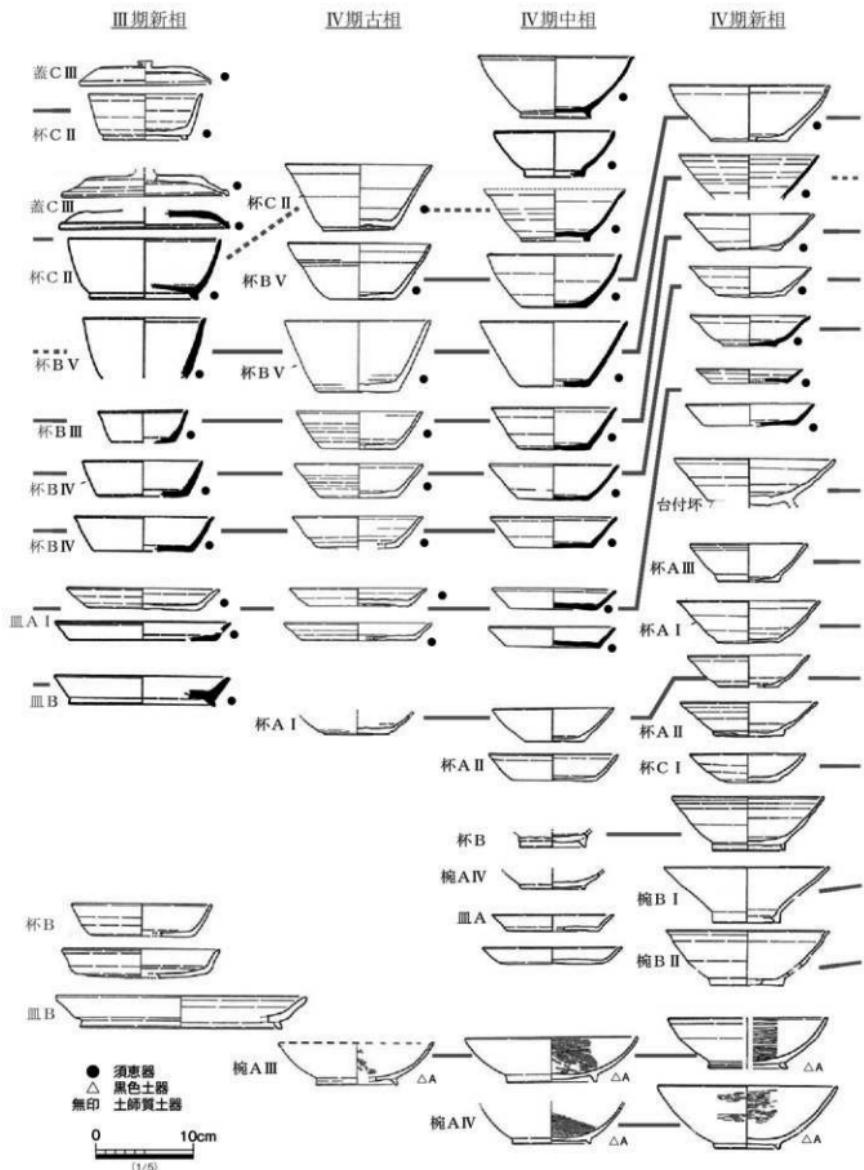
森隆2000 『楠葉型黒色土器B類椀と初期楠葉型瓦器椀』『中近世土器の基礎研究X V』日本中世土器研究会

上田秀夫1082『14～16世紀の青磁椀の分類について』『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

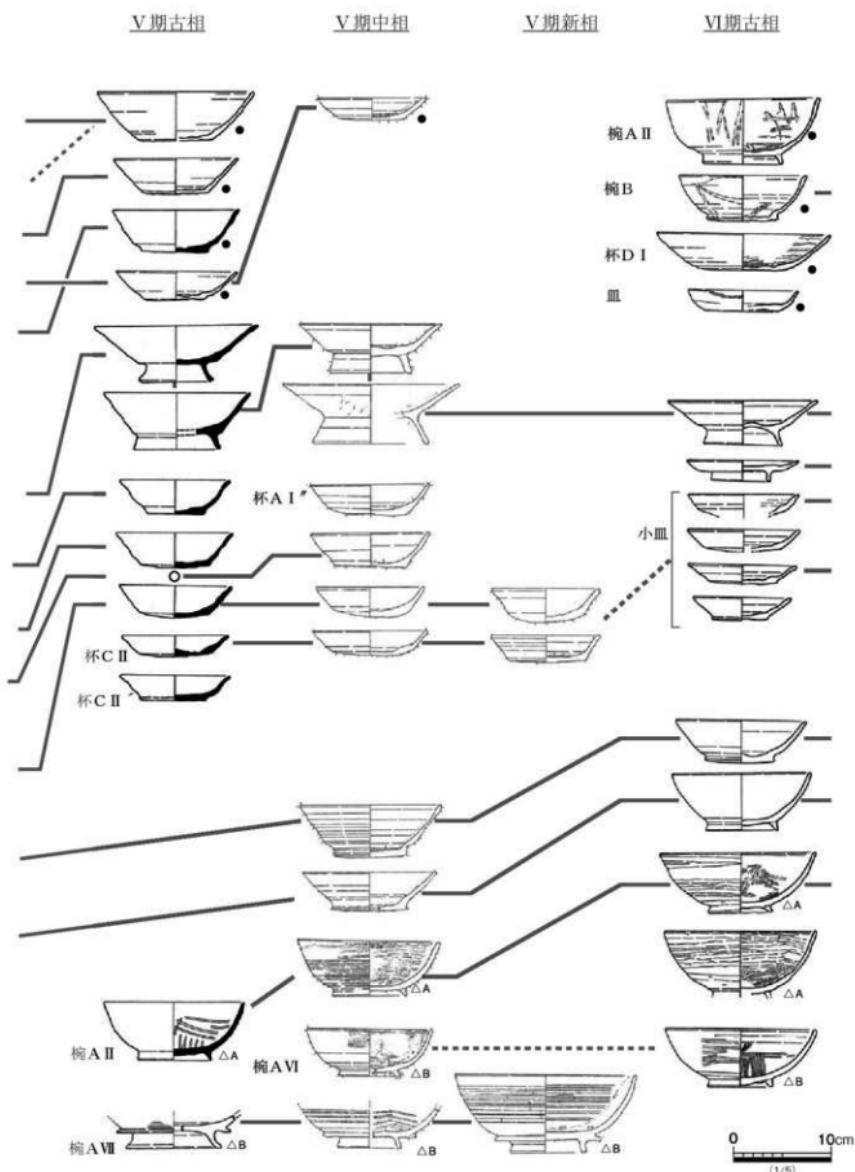
森田勉1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

本稿（1）をなすにあたり、平尾政幸（京都市埋蔵文化財調査研究所）、大久保徹也（徳島文理大学）、渡邊誠（高松市埋蔵文化財センター）、乗松真也（香川県教育委員会生涯学習・文化財課）、信里芳紀（香川県埋蔵文化財センター）各氏の御教示・御協力を得た。真鍋貴匡・竹内裕貴両氏（香川県埋蔵文化財センター）には、煩雑な図版のデジタル化に御協力いただいた。以上の各氏に感謝申し上げる。

（2015年8月13日稿了）



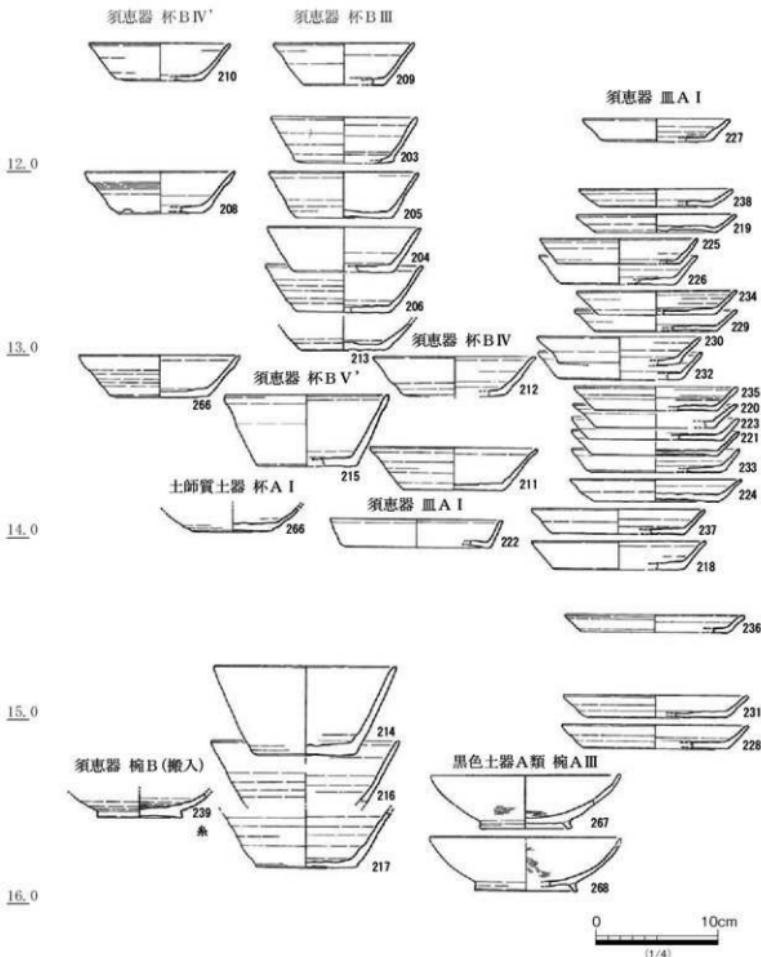
第22図 IV期変遷図（暫定版）



第23図 V期変遷図（暫定版）

口径
11.0 (cm)

IV期古相

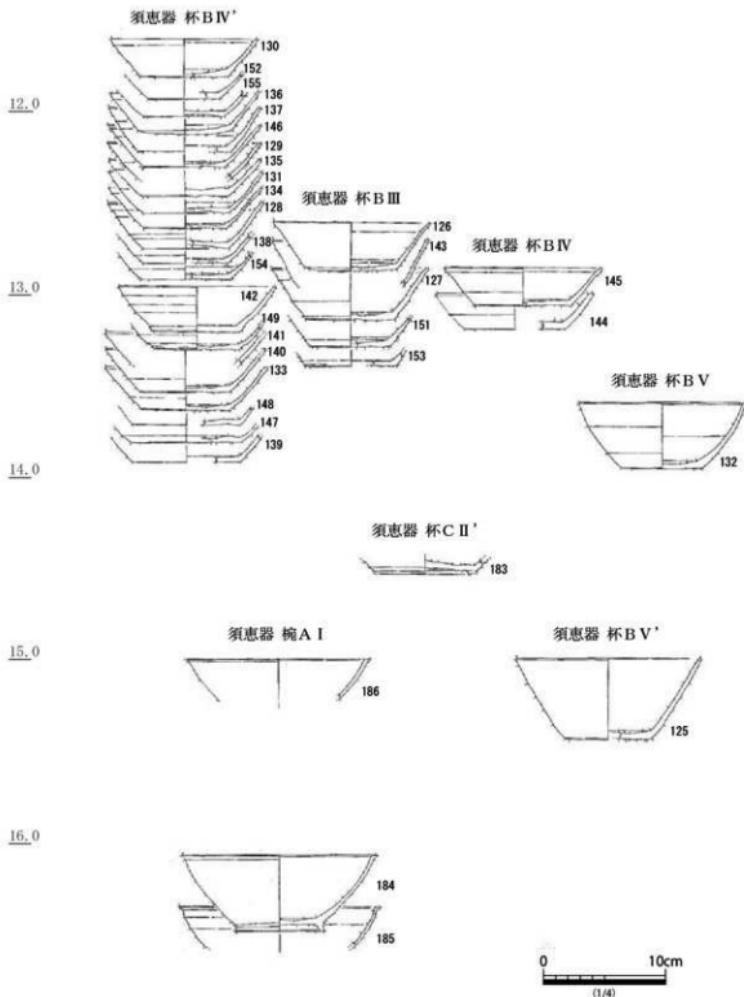


図版 1 多肥北原西遺跡 SD 0501

口径

IV期中相

11.0(cm)



図版2 郡家一里屋遺跡 SD12 (1)

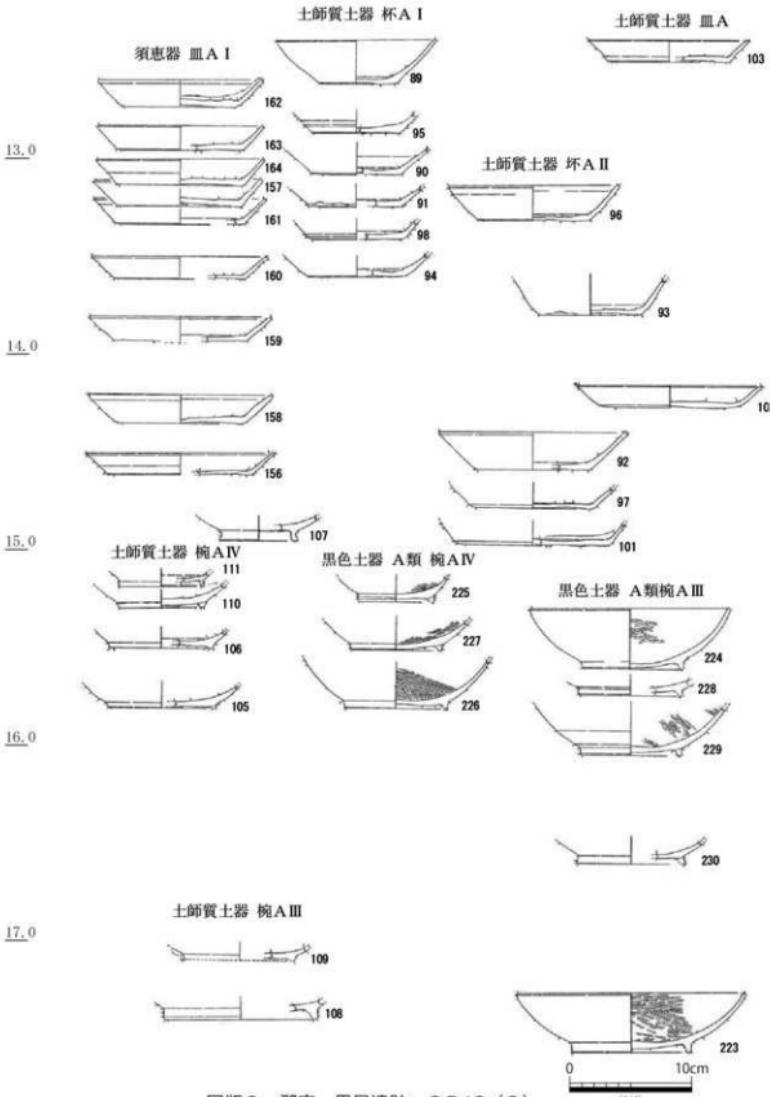
口径

須恵器 皿

12.0 (cm)



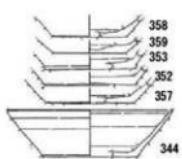
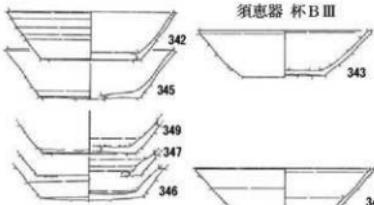
IV期中相



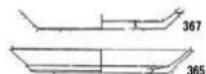
図版3 郡家一里屋遺跡 S D 12 (2)

12.0(cm)

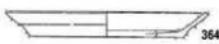
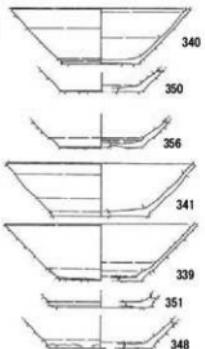
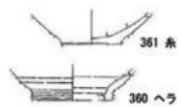
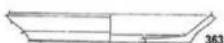
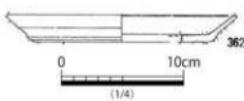
須恵器 杯B IV

13.0

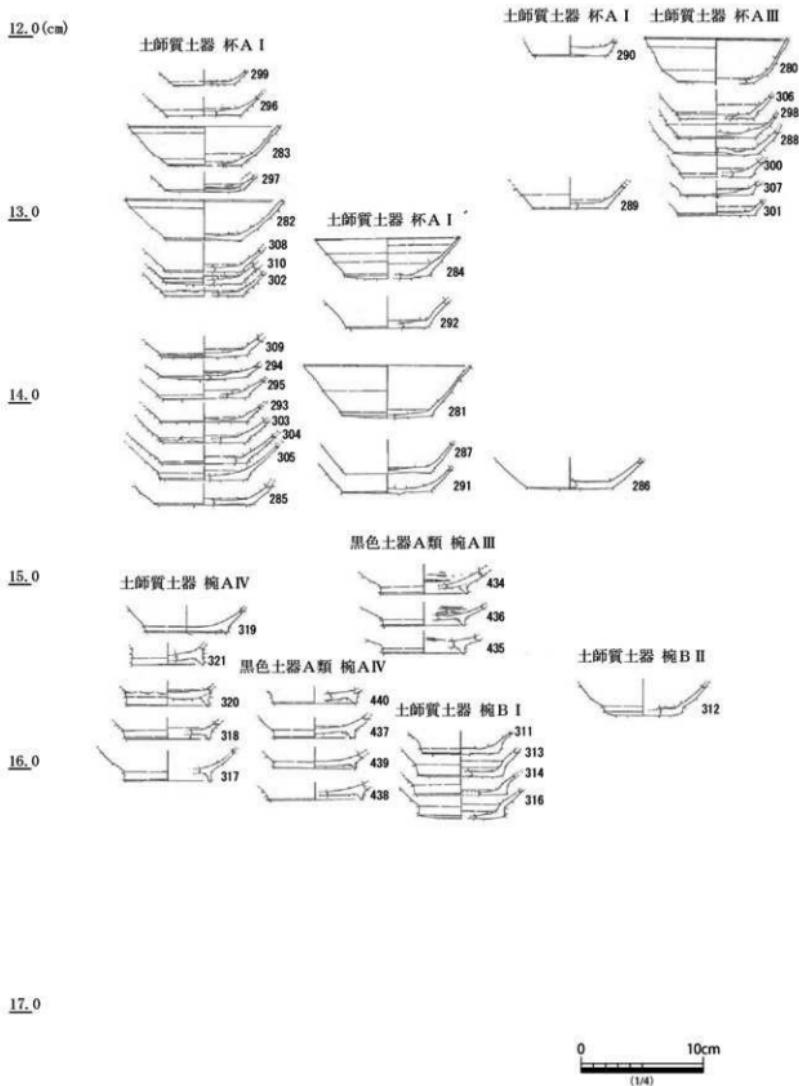
須恵器 盒A I

14.0

須恵器 梗B(搬入品)

15.016.017.0

図版4 郡家一里屋遺跡 SD13 (1)

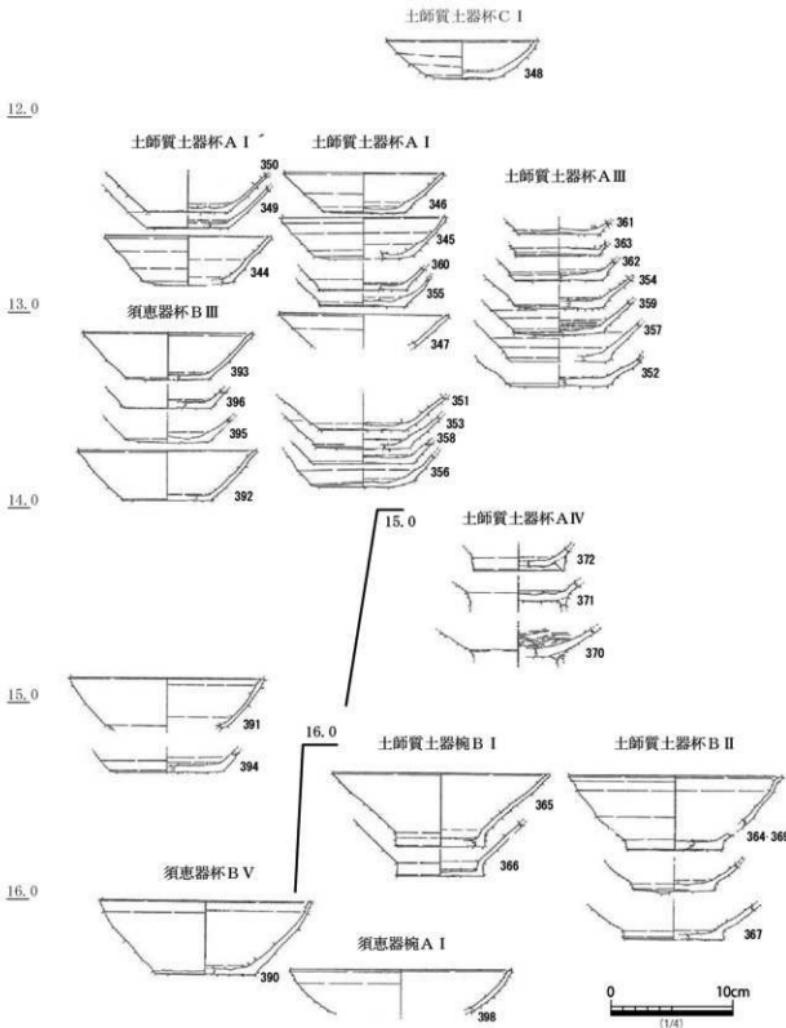


図版5 郡家一里屋遺跡 SD 13 (2)

口径

IV期新相

11.0(cm)



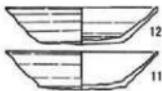
図版6 川津東山田遺跡 I区S D3109

口径

IV期新相

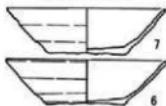
12.0 (cm)

須恵器 杯B IV⁺

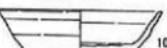


13.0

須恵器 杯B III

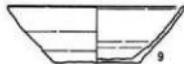


須恵器 杯B IV

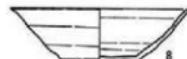


14.0

15.0



土師質土器 杯A I⁺

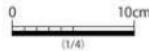


16.0

黒色土器 A類椀AIV



台付杯



図版7 下川津遺跡 第2低地帯 流路2

口径

IV期新相

11.0(cm)

12.0

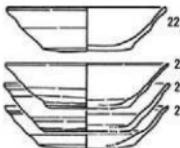
13.0

14.0

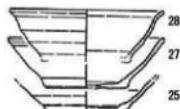
15.0

16.0

土師質土器 杯A I



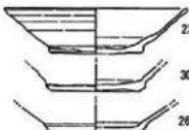
土師質土器 杯A III



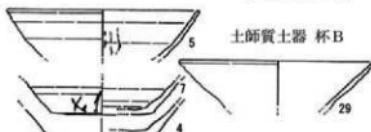
須恵器 杯B IV



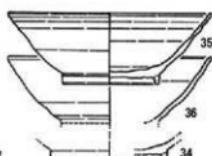
土師質土器 杯A II



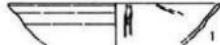
須恵器 杯B III



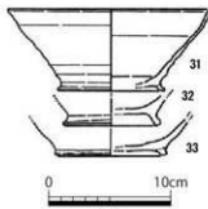
土師質土器 杯B



須恵器 杯B V



土師質土器 杯B'



(1/4)

図版8 下川津遺跡 SEIII04 (1)

口径

IV期新相

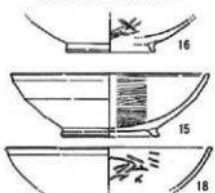
13.0(cm)

14.0

15.0

黑色土器 A類椀AIII

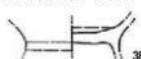
16.0



土師質土器 椭



土師質土器 台付杯



17.0

黑色土器 A類椀AIV

18.0



図版9 下川津遺跡 SEIII04 (2)

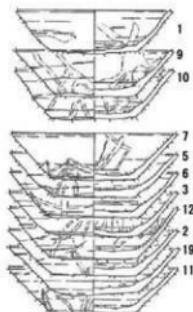
口径

V期古相

11.0(cm)

12.0

須恵器 杯B III



13.0

須恵器 杯B IV



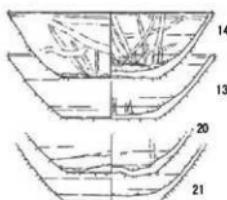
14.0



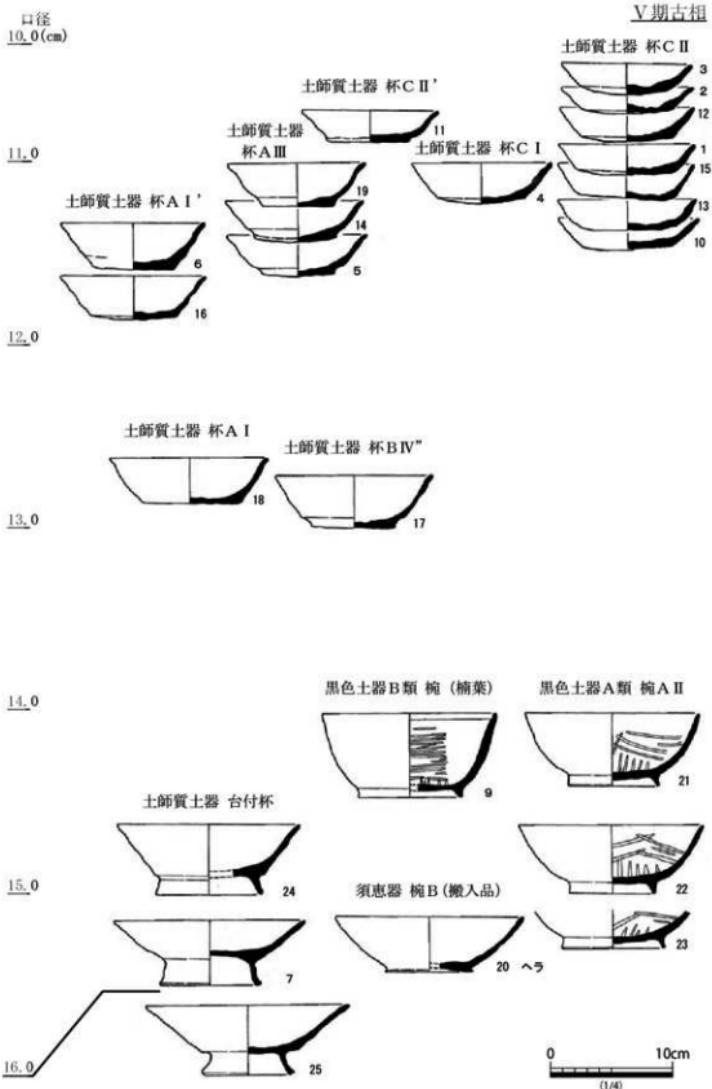
15.0

須恵器 杯B V

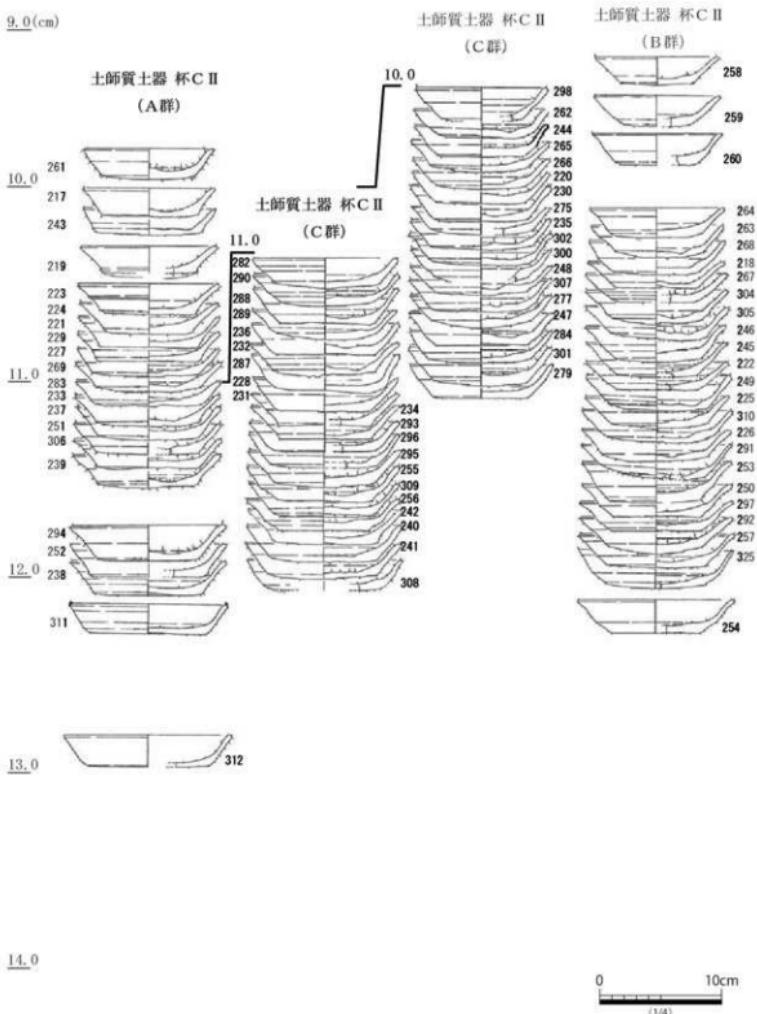
16.0



図版10 深池窯跡 灰原



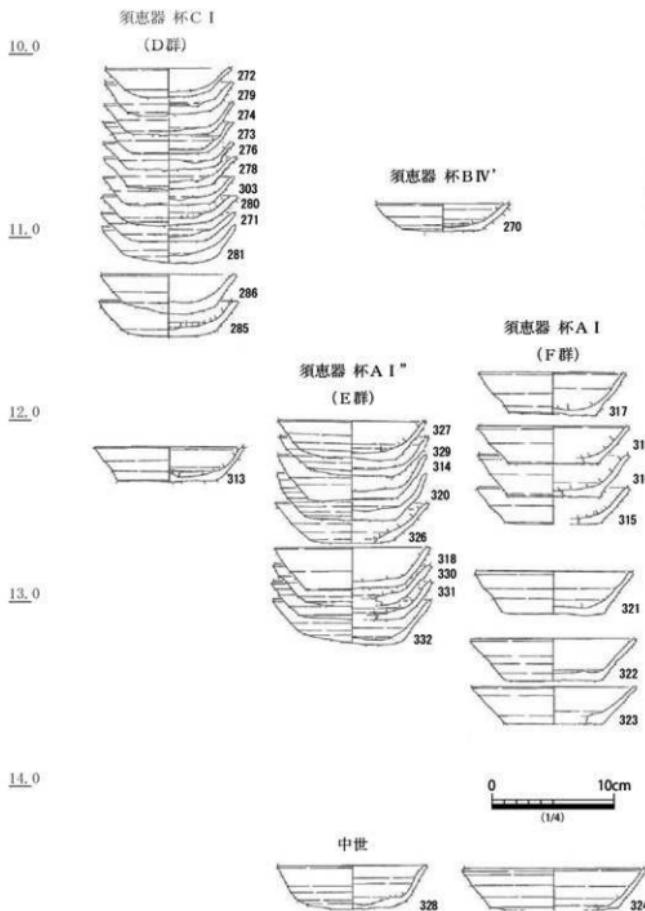
図版11 譜岐国分寺跡 SK 25・26



図版12 前田東・中村遺跡 E区SD19(1)

口径
9.0(cm)

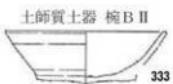
V期中相



口径

V期中相

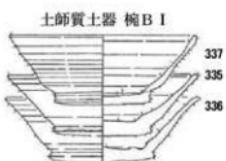
12.0(cm)



13.0



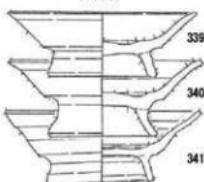
14.0



15.0



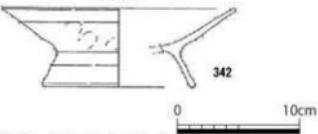
台付杯



16.0

17.0

台付杯



図版14 前田東・中村遺跡 E区 S D19 (3)

(1/4)

口径

V期中相

11.0 (cm)

黑色土器 A類椀A II (浅手)



372

12.0

黑色土器 B類椀A VI (深手)



381

13.0



357

黑色土器 A類椀A II (深手)



382



358



379

14.0

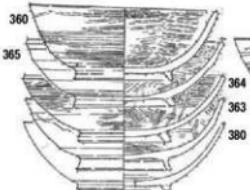


361



362

15.0



360



365



364



363

380



366 捕葉型黑色土器椀

383 黑色土器 B類椀 A VI (浅手)

16.0

黑色土器 A類椀A V



368

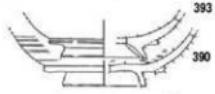
367



384

17.0

黑色土器 B類椀 A VII



0

(1/4)

10cm

図版15 前田東・中村遺跡 E区SD19 (4)

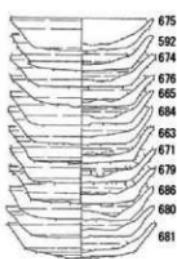
口径

V期新組

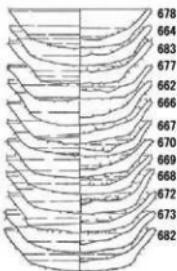
9.0(cm)

10.0

土師質土器 杯C II
(C群)



土師質土器 杯C I
(D群)



11.0

12.0

13.0

土師質土器 坯C II
(A群?)



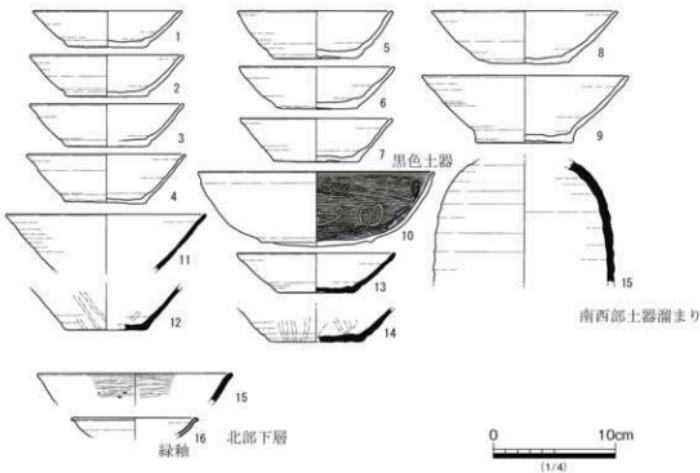
14.0

黒色土器 B類椀A VII



(1/4)

図版16 前田東・中村遺跡 E区SK04



図版17 講岐国府跡32次1 トレンチSK1003

研究ノート 高松城はいつ造られたか

佐藤 竜馬

はじめに

近年、戦国期～織豊期における地域の政治的拠点の動向をめぐる研究が、四国地方においても活発に行われるようになってきた。阿波・勝瑞城、讃岐・引田城、伊予・湯築城の調査の進展と歴史的評価への試みがその動きを先導し、「新・清須会議 守護所シンポジウム2 @清須」(A)や「阿波の守護所・城下町と四国社会」(B、2014年)、「四国の近世 アワコウコ楽公開講座」(C、2015年)などで一定の到達点と問題点が示された。

讃岐においては、引田城の調査の進展が、発掘成果の蓄積が著しい高松城の再評価の動きに繋がりつつあるのが現状である。筆者は、A・Bで讃岐の政治的拠点の状況を報告したが、この作業に伴い高松城・城下の建設・形成過程について、従来の所見とは異なる見通しを提示した。現段階では、まだ粗い見通しに留まる内容であるが、今後検証されるべき仮説あるいは見通しとして、以下に整理しておきたい。

なお、本ノートをなすにあたり、渡邊誠・高上拓（高松市創造都市推進局）、御厨義道（香川県立ミュージアム）、乗岡実（岡山市教育委員会文化財課）各氏の多大な御教示を得た。厚く感謝申し上げる。

1. 従来の「通説」への疑問

1-1. 「通説」のストーリー

- 1) 1587年（天正15）、豊臣秀吉の命により、播磨赤穂6万石の領主・生駒親正が讃岐国主として移封となった。親正は、まず引田城に入り、次いで宇多津の聖通寺山城（平山城）に移り、翌1588年（天正16）に香東郡野原の地に高松城と城下を築いた（『南海通記』）。引田城の後、聖通寺山城・亀山（後の丸亀城）・由良山（現在の高松市由良町）と城の候補地を考えたが、結局高松築城に至ったとする説（『生駒記』など）もある。

1 佐藤竜馬2014a「讃岐における13～16世紀の政治拠点」「新・清須会議 資料集」新・清須会議実行委員会
b「讃岐における中世の政治拠点－時間軸と空間軸の観点から－」「阿波の守護所・城下町と四国社会」城下町研究・慈島研究集会実行委員会

2 佐藤竜馬2014c「高松城はいつ造られたか」高松老人大学発表資料(2014.10.3)

3 その後の検討により、筆者の誤認・誤説と判明した部分を訂正している（三ノ丸の屋敷について等）が、それ以外は高松老人大学発表資料をほぼ踏襲した

- 2) 親正は1589年（天正17）、藤堂高虎の仲介で黒田孝高に高松城の繩張りについて見分してもらい、「究竟ノ城地」すなわち最もふさわしい場所だととの意見をもらった（『南海通記』）。このほかに、細川忠興が繩張りを行ったとの説（『生駒記』など）もある。
- 3) 高松城は、1590年（天正18）に完成したとする説があり、様々な書物やインターネット情報（ウィキペディアなど）にもそのような記述が見られる⁴。

1－2. 「通説」への疑問

- 4) 2) での『南海通記』の記載は、登場人物の肩書きと年代が合わないという矛盾がある。藤堂高虎を「今治ノ城主」とするが、高虎が今治藩に転封になったのは1600年（慶長5）、今治築城を開始したのは1602年（慶長7）のことである。また黒田如水（孝高）が中津に戻る途中高松に寄ったとするが、如水が豊前に封じられたのは1587年（天正15）で、中津築城の開始が1588年（天正16）である。したがって、今治城主たる藤堂高虎と、中津城主たる黒田孝高という組み合わせが、同時に見られることはないと史実である。
- 5) 3) の1590年完成説の根拠が、明確でない。近世史料で完成年もしくは築城年数について触れたものは未見であり、何をもとにした情報なのか不明である。これは、築城開始年を多くの近世史料が伝えるのとは対照的である。
- 6) したがって、高松城は①誰が繩張り（計画）に関与したか、②いつまで普請（建設工事）が続き、いつ完成したか、の2点が、実はまだ明らかでないということになる。また、高松城を描いた絵図は、1627年（寛永4）に幕府隠密が高松城を見分して記した「高松城図」（『讃岐伊予土佐阿波探索書』所収）以後のものしか知られていないため、③完成当時の高松城・城下町がどのような景観だったかについても、よく分かっていない。
- これらあいまいな3点のうち、ここでは②を中心にして、①・③も関連させて考えてみる。

2. 発掘成果から言えること

2－1. 天守台

- 7) 最近行われた天守台の解体修理に伴う発掘調査によって、天守台には改修（再築や石垣の

4 「天正一六年から同一八年にかけて築城した」〔『高松城跡』『香川県の地名』平凡社、1989、出版明記せず〕との記述がある。また類似した記述として、『生駒親正が、翌[天正]16年より数年を要して当時の香東郡荒原(野原)荒八輪島に築城』〔『高松城跡』『角川日本地名大辞典37』香川県』角川書店、1985、出版明記せず〕との記述もある。この種の記述の初見資料については、確認できていない。

5 松浦正一1964『高松藩祖 松平頼重傳』松平公益会、胡光2007『高松城下図屏風』の歴史的前提』〔調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館

大規模な積み直し)の痕跡が見られず、建設当初のオリジナルな状態であることが分かった。⁶

その建設年代であるが、天守台内部に盛られた盛土層、石垣の裏側に詰められた栗石層から出土した土器・陶磁器は、肥前系陶器を一定量含んでおり、全体として高松城編年の様相1(1600~10年代)の特徴をもっていることが指摘できる。つまり、築城が始まったとされる1588年(天正16)よりも10~20年程度経過した頃に天守台が建設されたことになる。

単純な一般化はできないが、織豊政権の城郭では、本丸や天守の建設が優先される事例がある(安土城・大坂城・肥前名護屋城・岡山城)ことからすれば、高松城全体の本格的な建設は1600年代すなわち慶長期(1596~1615年)を中心とした時期に求められる可能性が出てくる。



第24図 天守台下層遺構

8) 解体修理では、盛土の下から天守台構築以前の中世遺構と旧河道が検出されたとされる。しかし、天守台の建設年代を考えると、下層遺構には築城開始後の1588~1600年頃のものが含まれる可能性は十分にある。また旧河道とされる落ち込み(天守台D・E面:東・南面)は、①付近の遺構面標高が1.0~1.2m前後であり、周囲(西・南・東外曲輪、西ノ丸)での標高(0.6~1.0m前後)と比べても決して低くなく、自然の河川の流れの位置を想定しづらいこと、②幅が幅3~4m程度と河川にしては小規模であること、などから人工的に掘削された溝と捉える方が妥当であろう。主軸方位がN-32°-Eと、城下の地割よりも東に振る点が

気になるが、外曲輪の家臣団屋敷における17世紀前半の区画溝を大きく凌ぐ規模であることから、より上位の屋敷地(居館)に伴う可能性がある。なお、天守台C面(北面)で検出された落ち込みは、報告書では遺構の可能性が否定されているが、天守台構築直前の遺構(溝・土坑など)として再検討の要がある。いずれにしても、築城開始から天守台構築までの本丸周辺には、素掘り溝で区画された施設が存在するという、後世とは全く異なる景観が存在したことは確かであろう(第23図)。

6 中西克也2013「発掘調査」「史跡高松城跡(天守台)」高松市・高松市教育委員会

2-2. 外曲輪

- 9) 上級家臣が屋敷を構える外曲輪では、屋敷内や街路にゴミ穴（土坑）が掘られて土器・陶器・木器が廃棄されている。試みに西外曲輪中央部（西の丸町B地区、屋敷地6区画と街路）において、まとまった量を廃棄したゴミ穴がどの程度見られるか、検討した。すると、1600～10年代が7例、1620～30年代が3例、1640～50年代が16例であり、1588～1600年頃のゴミ穴は皆無であった。1588～1600年頃のゴミ穴の不在は、他の調査区でも指摘できる現象である。このことは、外曲輪での日常的なゴミ処理が、1588～1600年頃には極めて低調だったこと、つまり生活感の希薄な状況を示している。
- 10) 屋敷地の区画施設（溝や堀）にも1588～1600年まで遡るものは、今のところ皆無である。しかも1630～40年代までは、それぞれの屋敷地に個別に区画溝が巡らされていて、中世的な屋敷の景観が読み取れる。「高松城下図屏風」に描かれたような、堀（板堀・土堀）や長屋門をもつ区画施設は、1640～50年代になってようやく出現してくる。つまり、9)で述べたような天守台下層と同様な（しかし規模は外曲輪の方がより小さい）区画溝がかなり遅くまで残ることが分かり、家臣団屋敷の景観も相当大きく変化したことがうかがえる。
- 11) 西外曲輪では、生駒家の家老クラスの家臣・上坂勘解由の屋敷普請に関わると見られる木簡（荷札）が出土している。1624年（元和10=寛永1）に至ってもまだ屋敷内の建物の更新（新築）が行われていたことをうかがわせ、上記10)での屋敷景観の変化の一端を物語っている。
- 12) 数少ない天正～文禄期（1588～1595）と推測される瓦（第2図、14）参照）は、東外曲輪（後に東ノ丸となる）歴博地区に偏在する傾向にある。歴博地区では16世紀末の建物遺構は検出されていないため、城郭中心部（本丸・二ノ丸・三ノ丸側）での先行建物の存在を考えることができるかもしれない。

2-3. 町人地

- 13) 外堀の外側（南側）の片原町遺跡では、出土遺物の内容・組成から16世紀末に遡る可能性をもつ区画溝が検出された。やはり素掘り溝による屋敷地の区画であり、1640～50年代には出現する近世的な町家の景観とは異なる。むしろ、8)・10)で指摘した事象と共通する。



第25図 天正～文禄期と推測される軒平瓦

2-4. 瓦の年代観と供給体制

14) 16世紀末葉～17世紀初頭における高松城跡出土瓦を、香川中近世瓦検討会メンバーとともに検討し、3期4小期に区分できるとの見通しを得ている（第23表）。各時期の特徴は、以下の通り。

I期	1588～90年代前半（天正16～文禄期）頃。在地系の瓦主体。まだ瓦の量自体が少なく、中世的で丁寧な製作技法が見られる。
II-1期	1590年代後半（慶長1～5年）頃。在地系の系譜（瓦工集団）で集中的な生産に伴う粗雑化が進む。姫路系の直接的な影響の可能性をもつ系譜も出現する。
II-2期	1600年代前半（慶長5～10年）頃。岡山城跡と同範・同文関係にある軒平瓦の系譜（三葉文系）が普遍化し、瓦の量が急増する。胎土・焼成とともに、近世的な特徴をもつようになる。
III期	1600年代後半～10年代（慶長11～元和6）頃。それ以降も含むか。岡山城跡との同範・同文関係は継続。

15) 城・城下の建設を一定程度反映すると見られる瓦の大量供給は、II-2期～III期（慶長期）に本格化する。この大量供給は、岡山城との同範・同文瓦の流入によって実現している。瓦の製作地が岡山なのか、高松なのかは今後の検討課題であるが、高松での大量供給段階でも岡山の大規模な普請は継続していることから、現状では岡山からの搬入の可能性の方に妥当性がある。

岡山では1590年代（文禄・慶長初期）に瓦の大量生産・供給の最初のピークがある。高松での大量供給はこれに後続するため、岡山城での普請が先行することが明確である。

土器陶磁器	想定年代	瓦-時期段定	高松城等/謹事像	高松城等出土瓦	空本津 軒平瓦	軒平瓦別		岡山城瓦
						I	II	
（様相D）	1584 O期	三ノ丸周辺 丸内裏庭	松尾寺仁王堂		a			
	1588～90年代前半 I期		第6遺構正面壁報告資料 S X 15		b	2群		
	1590年代後半 II-1期	天守台			c	3群		
	1600後半 II-2期	西外曲輪・高 田垣周辺 ⁷⁾	第6遺構正面壁A-1-B-1区 S X 15		d	4群		
（様相E）	1600後半～ 10年代 日向	第4遺構周 壁地	第6遺構正面壁B-2-3区 天守台櫓土・築石層 天守台御番所					3-4式
（様相F）	1620年代～		第4遺構正面壁C-D区					

第23表 築城期高松城における瓦の変遷

3. 文献史料の読み直し

3-1. 生駒氏の居館

16) 2) で述べた『南海通記』の記述では、黒田孝高と藤堂高虎による城地見分に先立ち、生駒

7 乗岡実2001「瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会

親正が高松に戻り「西浜東浜ノ間ニ仮屋形ヲ造」ったという。この記事をそのまま信用すれば、築城開始から1年後の段階でようやく領主生駒氏の仮屋形が建設されたということになる。もとより記事全体の内容については史料批判をするが、生駒氏が翌1590年（天正18）には小田原攻めに参陣、1592年（文禄1）・1597年（慶長2）に朝鮮半島に渡海していることも併せ考えると、関ヶ原合戦（1600年：慶長5）まで高松城の建設がどの程度進捗していたか、疑わしい情勢にあったといえ、その間に「仮屋形」が政府の機能を担ったことも考えられる。

- 17) 「讃岐伊予土佐阿波探索書」の「高松城図」では、三ノ丸に「明屋敷」と記された箇所が2箇所ある。1627年の時点で使用されていない屋敷が三ノ丸に存在したことが分かる。この屋敷の性格が問題になるが、公的な政府である対面所（桜馬場にある）よりも城郭中枢域であること、また同探索書の本文に「二ノ丸廿五間計、此丸居館と見へ申候」と書かれていることを踏まえると、二ノ丸殿舎以前に存在した藩主居館である可能性が指摘できる。なお、この屋敷は1638～39年（寛永15～16）の様子を描いたとされる「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」では見られず、1640～50年代の景観を描いたと推測される「高松城下図屏風」でも見られないことから、1620年代末から1630年代前半にかけて解体・撤去されたと考えられる。
- 12) での所見を踏まえると、天正期に亘る古式の瓦の一群は、「明屋敷」および周辺での使用を考えることができるかもしれない。先述の「仮屋形」との関係が気になるところである。

3-2. 城下寺院の建立・移転年代

- 18) 高松城下の寺院30ヶ寺の建立年代を見ると、最も多いのが11例の慶長期であり、天正期はわずか4例に過ぎない⁸。1年あたりの数としては天正期が最も多くなるが、少なくとも築城開始直後に寺院の建立が集中するわけではなく、慶長期を経てようやく寺町としての景観が成立したことが確認できる。
- 19) 1676年（延宝4）に現在地へ移転する以前の真行寺（宝藏寺）は西浜に存在したことが諸史料から分かるが、その一部は浜ノ町遺跡として発掘調査されている。それによると、近世区画①西半部（東西約65m以上）が宝藏寺の境内と推測される。後に船藏となる敷地の「西之角」に相当する場所であり、「小神野夜話」の記載と一致する⁹。この場所に相当する浜ノ町遺跡では、13世紀末葉以来の地形と土地区画が踏襲されて近世を迎えており、多量の中世石塔が出土し、また中世瓦も多く見られるため、既に中世段階から寺院が存在した可能性がある。仮にこの中世寺院が宝藏寺だとすると、築城開始の年である1588年（天正16）に生駒一正が

8 高松老人大学での発表時は、不明瞭な画像資料に依拠していたため「御屋敷」としたが、その後、良質な画像資料（根津寿夫2014『四国の大名—その美と心—』徳島市立徳島城博物館）にもとづき「明屋敷」と判読した。

9 佐藤竜馬2009『初期高松城下町の在地の要素』[港町の原像 上 中世讃岐と瀬戸内世界]岩田書院

10 森下友子1996『高松城下の絵図と城下の変遷』[研究紀要IV]香川県埋蔵文化財センター

- 発給した文書の内容が注目される（真行寺文書）。そこには「香東郡野原西浜に於て壱町四方之寺内屋敷に土台之事」として「寺門中海陸共に諸口事之事免除也」とあり、生駒氏が宝蔵寺境内周辺に対し税の免除などの庇護を行ったことが分かる。この地での宝蔵寺の建立年代は不明だが、仮に中世まで遡るとすれば、築城開始の年に既存の寺院に特権的な保護政策をとったことになる。
- 20) 西浜で真行寺に隣接して境内があった無量寿院は、戦国期には野原中黒（高松城中心部周辺）に存在したことが「さぬきの道者一円日記」（1565年、永禄8）から確認でき、発掘調査により西ノ丸がその旧境内地と特定された。境内廃絶以前の第3遺構面で出土した所用瓦の可能性をもつ大型の軒丸瓦は、コビキ法（コビキB）による。第3遺構面を被覆する整地層出土遺物の年代観等と併せ、「少なくとも17世紀以降に無量寿院が[西浜へ]移転したものと考えておきたい」（〔 〕内は筆者）とされる¹¹（以上、この項の所見は、渡邊誠氏の御教示にもとづく）。
- 21) 「高松城下図屏風」等には、外堀に面した片原町に愛行院の境内が描写・表示されている。愛行院は、中世野原から継続する華下天満宮（中黒天満宮）の別当寺であり、城下における山伏の統括を行う役割が与えられていた。中世の境内の位置は不明だが、絵図が示す境内地の近辺にあったと推定してよく、城下に組み込まれた形ではあるが¹⁹（以上、この項の所見は、渡邊誠氏の御教示にもとづく）に近い事象と評価できよう。

3-3. 城下町と惣構

- 22) 城下大手筋の丸亀町は、1610年（慶長15）に生駒藩3代当主正俊によって丸亀城下町の商人を移住させて成立したとされる（『南海通記』巻廿下）。城下の中心市街地としての本町は、東外曲輪すなわち城内にあり、「高松城下図屏風」での町家の描写から最も格式の高い町人地であったことが分かる。したがって丸亀町は、城下の整備・拡大に伴い新設された、後発的な中心市街地であるといえる。
- 23) 「高松城下図屏風」は1640～50年代の景観を描いていると推測されるが、南側の寺町を超えて城下が拡大している様子が読み取れる。寺町の外側（南側）には水路が連続的に描かれ、一部は馬場として埋め立てられており、本来は外堀に匹敵する幅をもっていたことが推測される。またこの水路の内側（北側）に寺町が連続しており、さらに町人地の南大手筋ではこの水路より内側が丸亀町、外側が南新町となっており、成立年代の異なることが読み取れる。こうした水路の存在から、当初は城下全体を開む堀＝惣構が存在したことが指摘できる（第25図）。その完成は、丸亀町成立の1610年（慶長15）から「讃岐探索書」で「南ニ四筋アリ」（水路以北の範囲に相当）と記された1627年（寛永4）の間、おそらくは元和の一国一城令（1615

11 渡邊誠2015「香川の城下～高松城下町の成立とその背景～」[第6回発掘へんろ～四国の近世～]2014年度アワコウコ楽公開講座（後期）資料集

年：元和1）までに求められる。

3-4. 自立した家臣団

- 24) 「生駒家廃記附録」には、4代高俊の治世（1630年代のこととして「壱岐守殿御家中大形方」在郷、時々用事之有る節高松へ罷り出候に付、屋敷小分之由」([内筆者])と記されている。また、「小神野夜話」には、「御家中も先代[生駒氏治世]は何も地方にて知行取居申候故、屋敷は少ならでは無之」([内筆者])と記される。家臣に対して知行地を与える地方知行が行われていたため、家臣たちは知行地に留まり（在郷）、用事のある時だけ高松へ出仕していた、というのである。このことは、9)で述べた外曲輪の家臣團屋敷で築城当初の生活の痕跡が希薄であるという現象と併せて、興味深い事象である。



第26図 初期高松城・城下と総構

4. 高松城の建設過程と初期の景観

- 25) 初期高松城の建設過程は、①小規模で散発的な建設が進められ、領主生駒氏の居館も「仮屋形」にとどまった1588～1600年頃（第1段階）、②天守台の建設が始まり順次城郭中心部の建設・整備が進んだ1600年代頃（第2段階）、③新たな中心市街地としての丸亀町の建設が

- 行われ、寺町の形成がほぼ完了し、城下全体を包む惣構が建設された1610年代前半（第3段階）、④家臣団の屋敷地がほぼ完成形に近付く1620～30年代（第4段階）、に区分できる可能性を、検証されるべき仮説として提示したい（第24表）。
- 26) 第1段階では、素掘りの区画溝を主体とした領主居館と家臣団・町人地の屋敷割が、部分的に行われていたと見られる。中世から継続した寺社については、暫定的に旧境内か若干の位置変更を伴う形での存続が認められた可能性がある（見性寺・愛行院等）。
- 27) 第2段階では、外堀より内側での城郭の建設や武家地の屋敷割が全面的に行われたと推測される。天守台を含む本丸や二ノ丸・三ノ丸・桜馬場・西ノ丸などが整備され、外堀とこれに沿った土塁もこの段階で建設されたか。ただし家臣の屋敷割は、素掘り溝を主体とする形で実現されたようである。この段階での生駒氏居館は三ノ丸にあり、桜の馬場の対面所とともに領主権力の政庁としての役割を担っていたものと推測される。
- 28) 第4段階を経て、城下町の膨張が著しくなっていた段階で高松城に入ったのが松平頼重であつた（1642年：寛永19）。頼重入部直後から城下に多くの町触を出して都市法の整備にかかつた背景には、初期高松城下町の変貌を受けて都市の新たな形での把握が指向された、と見ることもできるのではないだろうか。
- 29) 以上の状況を踏まえ、改めて『南海通記』の記事（2）に立ち戻ると、記事の内容の信憑性は別にして、黒田・藤堂が助言したのは城の立地であり、個々の曲輪配置といった具体的な縄張りではないことに気付く。また、具体的な縄張りが実現するのは第2段階であり、生駒親正の最晩年（関ヶ原合戦時に出家し、3年後に死去）であることから、直接築城に関与したのは2代目の一正であると見た方がよいであろう。黒田の中津城とは縄張りの違いが、藤堂の今治城での類似が指摘されるが、高松城の中心部は本丸から渦巻状に展開し、本丸が木橋で独立性が高いこと、また今治城で典型的にあるような馬出が明確な形では認められない（ただし実質的に各曲輪がその役割を果たすことはあり得る）ことから、藤堂の縄張りとも言い難い独自性をもっている。縄張り者の特定は今後の課題であるが、むしろ生駒親正あるいは一正の可能性を考えてもよいのではないだろうか。
- 30) ところで生駒藩では、高松城とほぼ同じ時期に丸亀城と引田城の建設が行われた。丸亀城は1597年（慶長2）に建設に着手し、1602年（慶長7）に竣工したとされる。また引田城は、最近の調査により高松城・丸亀城と同じく総石垣の平山城であることが判明したが、出土した軒平瓦の特徴から、やはり慶長期に集中的な建設が行われたことが指摘できる。つまり、慶長期が生駒氏にとって領国支配を固める意志が強く表れた時期といえる。
- 31) 対岸の岡山城と瓦を比較すると、既に述べたように岡山城の本格的な建設の方が高松城に先行する。城主・宇喜多秀家は信長政権下での中国攻め以来、秀吉と深い関わりがあり、1585年（天正13）には秀吉の養子として元服している。その後は豊臣政権の中で重用され、文禄

の役では総大将を務め、五大老に名を連ねるようになる。岡山城建設の最初のピークは、まさに豊臣政権における秀家の台頭と軌を一にしている。阿波の蜂須賀氏に居城の場所について秀吉からの指示があったことを参考すれば、豊臣政権初期段階では西国の最前線にあたるこの地域での政治的中心地の建設にあたり、「まず岡山城、次に高松城を造る」という政権の意向があった可能性がある。

以上のように、高松築城の過程を再検討することで、豊臣政権から徳川政権における生駒氏の位置付けや、領国支配のあり方を明らかにする端緒が得られるものと思われる。今後は、述べてきたような「仮説」の検証作業を詳細に進め、総合化していく必要があろう。

(2014年10月3日、2015年7月7日加筆修正)

	西暦	元号	事象	備考
第1段階	1587	天正15	生駒親正、秀吉から讃岐一国を与えられ、引田城次いで聖通寺山城（平山城）に入る	通記/生駒記/譜羽
	1588	16	生駒親正、高松城を始める	通記/生駒記/譜羽
	1589	17	生駒親正、西浜・東浜の間に仮屋形を造り、藤堂高虎・黒田孝高に城地のアドバイスをする 年貢米納の山田郡百姓を西浜にて処刑する	通記 生駒記/大日記/譜羽
			佐藤忠厚に讃岐の武士をして郡村支配を行う	譜羽
	1590	18	高松城、竣工するとの説あり	(出典不明)
			生駒親正、5,000余人の軍勢を率いて小田原参陣	譜羽
	1592	文禄1	生駒親正・一正、秀吉の命により5,500名を率い朝鮮半島に出兵	譜羽
第2段階	1594	文禄3	生駒一正、再度朝鮮半島出兵	譜羽
			この年から翌年にかけて親正は大坂湯在	譜羽/宝簡集
	1597	慶長2	一正、2,700名を率いて再び朝鮮半島出兵	譜羽
			親正・一正、西讃岐支配のために丸亀城の築城を開始	生駒記
第3段階	1600	慶長5	生駒一正・正俊。上杉攻めのために家康のもと開東に従軍 親正、豊臣秀頼の命で田辺城攻めに家臣を參陣させ、その後削髪して高野山に出来 一正、家康のもとで岐阜城攻め、関ヶ原合戦に従軍	譜羽 譜羽 譜羽 通記
			佐藤掃部に讃岐の仕置きを命ずる	通記
	1601	慶長6	正、生駒家の家督を継ぎ、家康より讃岐一国を安堵される	譜羽
	1602	慶長7	正、丸亀城から高松城に移り、丸亀城には城代を置く	譜羽
第4段階	1603	慶長8	親正、高松で死ぬ(78歳、異説に80歳)	生駒記/譜羽
	1610	慶長15	一正死没(56歳)、正俊家督を継ぐ	譜羽
			丸亀城下の商人を高松城下に移住させ、丸亀町とする	譜羽/通記
第5段階	1614	慶長19	正俊、大坂冬の陣に参陣。家臣の活躍により家康から賞される	譜羽
	1615	元和1	正俊、大坂夏の陣に参陣	譜羽
			一国一城令により丸亀城、そしておそらく引田城も廢城	
第6段階	1616	元和2	正俊、大坂城修築のために石垣石材を幕府に献上	徳川実紀
	1620	元和6	正俊、大坂城修築に参加	徳川実紀
第7段階	1621	元和7	正俊、死没(36歳)、高俊家督を継ぎ、外祖父藤堂高虎、高俊の後見となる	譜羽
	1622	元和8	藤堂高虎、家臣の西島八兵衛らを讃岐に派遣して藩政を執らせる	譜羽
	1624		西外輪軸の上抜勘解由屋敷に多量の木材が運び込まれ、屋敷の普請が行われる	(出土木簡)
	1627	寛永4	幕府隠密が高松城・城下を探索する	譜岐伊予土佐阿波探査書
	1636	寛永13	工戸城絆郭の造営に際し高俊は石垣を担当 高松城石垣の修築を幕府より許可される	徳川実紀 宝簡集
	1640	寛永17	臣庭の対立激化し、国元派175名をはじめ絶勢3,000~4,000人が高松を退去(生駒騒 生駒高俊、幕府から改易の処分を受け、出羽國矢島1万石に移される	徳川実紀
	1642	寛永19	松平頼重、常陸下館から讃岐高松へ入る 山崎家治、丸亀の古城の修築を幕府より許可される	徳川実紀 英公実錄

第24表 高松築城の履歴と生駒氏の動向

通記/南海通記、譜羽/譜羽報道録、宝簡集/生駒家宝簡集

付記 初期高松城絵図の系統推定

32) 上記17)で記した「明屋敷」に関連する可能性のある記述が、いくつかの絵図で見られる。「讃岐国香川郡高松城図」(香川県立ミュージアム所蔵、『高松城史料調査報告書』での番号は絵図41、以下同じ)と、これに近似した描写形式をもつ一群の絵図がそれである。絵図41では三ノ丸に「屋形」、「主岡合結記」(絵図42)では「此丸城主居住」、「各藩城図讃岐国高松之城」(絵図44)では「城主居住」、「讃岐国高松城図」(絵図46)では「此丸屋形有」と記される。この「屋形」が「高松城図」(絵図1 = 影写本の原本)の「明屋敷」と同一対象を示すのかどうかが問題となる。

絵図41以下の諸本は、「松平頼重による新曲輪[北ノ丸・東ノ丸]造営前の状況を描いているが、三ノ丸に御殿が描かれるなど新曲輪造営後の要素もあり、新旧の情報が混在したものである」([]内筆者)とされている¹²。そこで、新曲輪造営前の高松城絵図諸本について、描写内容の系統関係を推定することで、上記問題を考える一助とする。

33) 新曲輪造営前を描いた絵図は、以下の6群に分けられる。

- I群 「讃岐高松丸亀両城図 高松城図」(絵図6)等。城下周辺地域も描くが描写は極めて主觀・模式的表現。中央の城郭部分の表現も極めて簡略で、実態とは異なる方格プランにもとづく正方形に描写。
- II群 「高松城図」(絵図1原本)・「寛永四年高松城図」(絵図2)。寛永4年(1627)8月23~27日の5日間、幕府隠密が高松城・城下を探索して作成した絵図。城内・城下とも全体に単一の方格プランを基調とした正方形に描かれる。
- III群 「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」(絵図3)・「讃岐国高松城図」(絵図5)等。I・II群よりもやや狭い範囲ではあるが、城下周辺まで含めて描写。城郭臨海部の石垣・捨石・波止・船藏などに独特の表現。東浜沖で東西方向に横たわる「浜洲」の表現も特徴的。城内・城下ともに単一の方格プランを基調とした正方形に描かれる。絵図3・5の來歴(生駒氏改易後に讃岐国を預かった大洲藩加藤家に伝来)からすれば、原本である絵図3は生駒氏改易(寛永17年、1640)前後に作成されたと見られる。
- IV群 「諸国当城之図」(絵図12)・「讃岐高松丸亀両城図 高松城下図」(資料8)等。III群とほぼ同じ範囲を描くが、中堀と外堀の東西線が斜交しており、かなり実態に近い表現になっている。これに伴い、大手南側の町人地の地割は城内や武家地のそれとは異質な方格プランとして描かれる。また、絵図12には東浜沖の「浜洲」が描かれ、III群に近い表現となっている。なお、「高松城下図屏風」で想定される原本や、外堀から内側のみを描いた「讃州高松城之図」(絵図4)もIV群に含まれる。

12 大鷗和則2009『高松城史料調査報告書』高松市教育委員会

- V群 「日本古城絵図 讃州高松城図」(絵図13)・「讃岐高松之城図」(絵図14)・「讃岐高松城図」(絵図15)。Ⅲ・Ⅳ群と同様の範囲を固化しており、城内・城下とともに単一の方格プランを基調とするところはⅠ～Ⅲ群と共通するが、舟入や波止、東浜の塩浜の表現等はⅣ群に近似している。石垣や堀線・城門を太線で、櫓を四角く塗り潰す(もしくは太線で四角形に表示する)点は、軍学図としての特徴をもっており、絵図15は池田齊輝(1815年:文化12に改名し、1819年:文政2に死去)の「軍学習用に、家臣たちが描いた図を集めて袋入りにまとめたものと思われる」とされ、軍学図としての来歴が明らかである。¹³
- VI群 「讃岐国香川郡高松城図」(絵図41)・「主団合結記」(絵図42)・「各藩城図讃岐国高松之城」(絵図44)・「讃岐国高松城図」(絵図46)等。外堀付近から内側をクローズ・アップして描く。単一の方格プランで描かれるところはV群と同様で、西浜舟入の内側(東側)が弓なりに緩やかな湾曲を描くように表現されているところはV群に近似するが、後述するように東ノ丸造営後の情報が盛り込まれているようである。
- 34) Ⅳ～VI群の景観年代と、群毎の絵図情報の前後関係を整理する。Ⅳ群は、「高松城下図屏風」想定原本を除き、西新門設置以前の状況の描写であり、Ⅲ群に近い時期の景観と判断される。具体的な年代について、絵図の内容・記載から推定する。手がかりとなるのは、桜馬場旧太鼓門西側の5区画とその北側の西ノ丸南端の居住者(施設名)である。1640年前後と推測される絵図3(Ⅲ群)と、西ノ丸西新門架設後の「高松城下図屏風」(1640～50年代)との間を整合的に繋げると、第25表のような順序が推測できる。

推定順序	群	絵図番号	名称	桜馬場旧太鼓門西側5区画(東から)					西ノ丸南端
				1	2	3	4	5	
1	Ⅲ	絵図3	生駒家時代讃岐高松城屋敷割図	近習者やしき	近習者やしき	近習者やしき	居屋敷	女房家	女房家
2		絵図8	讃岐高松丸亀西城図 高松城下図	裏庭	裏	一	同	一	一
3	IV	絵図4	讃岐高松城之図	加河与三蔵	馬鹿	林格左衛門	青木行成	助方	■窓
4		絵図12	諸侯当城之図	勘定場	馬ヤ	士	士	士	鹿
5		—	高松城下図屏風	(資料叢書)	(武家屋敷)	(武家屋敷)	(武家長屋?)	(鹿)	

第25表 桜馬場・西ノ丸南端の変遷

絵図8・12は、非常に近似した描写内容をもつ。①東西舟入の波止の形状、②西浜舟入西岸の船渠の形状、③東浜の塩浜周辺の形状、等が共通しており、先行すると見られるⅠ～Ⅲ群とは異質な描法である。その一方で、④絵図12に描かれる東浜沖の浜洲が絵図8では描かれない、⑤絵図12で描かれる西ノ丸・三ノ丸沖に延びる2本の構造物が絵図8には描かれない、⑥城下の町名や曲輪・堀幅などの情報が絵図12にはあり絵図8にはない、といった相違がある。上記のように絵図8が先行的な情報にもとづくと見られることから、絵図8・12には共通の根本があり、それぞれで描法や情報が取捨選択され、または加筆されて調べられた

13 倉地克直2010『平成22年度池田家文庫絵図展 絵図にみる中国四国地方の城下町』岡山大学附属図書館

と考えることができるのではないか。

絵図4は、①と⑤（この絵図で2列の橋であることが分かる）が絵図12と共に通しており、絵図8よりも近縁であることが想定される。以上の所見から、とりあえず第4表（IV群の項目）のような系統関係が推測できる。なお、これらの祖本は、さらに週りⅢ群と祖本を同じくする可能性がある。

- 35) V群は、西新門設置以後の描写であり、IV群よりも後出的な内容をもつ。絵図13・14に表示された高松松平家家臣の名前から、1646年（正保3）～1654年（承応3）の状況を示すとするのが相応しい。一方で、城下の描写では①丸亀町筋と東側の通町筋との間の街路が4本描かれ（実際は3本）、②おそらく街路表示の混乱に関連して、亀井戸から延びる水路や馬屋（厩）・大本寺・正法寺・大乗寺・愛行院の位置表示が実際と異なる、といった明らかな過誤が認められる。また描写年代が重複すると見られるIV群の「高松城下図屏風」と比較すると、③桜馬場南東隅と三ノ丸北西部（中堀北西隅）、西ノ丸北西隅に櫓の表記がされる（城下図屏風では描かれない）一方で、三ノ丸南東部の籠櫓が表記されず、本丸南西の地久櫓が表記されない場合もある、といった齟齬が指摘できる。

上記①・②の過誤全てと③の齟齬の大半は、V群の全ての絵図に共通しており、同一系統の絵図から筆写された可能性が考えられる。絵図13～15を相互に比較すると、最もオリジナル（祖本）に近い情報が描写・表記されていると思われるは絵図14であり、絵図13・15は東外曲輪の墨線を黒塗りしている点で別の色で表現した絵図14よりも表現の簡略化が認められ後出的かつ同類的である。しかし絵図13には内堀に「八十五六間斗」との絵図14には見られない表記があるため、絵図14とは別の絵図を下敷きにしている可能性がある。また、本丸地久櫓が絵図13では表示されず絵図15には表示、また外曲輪の「蔵」や家臣名が絵図13では表示され絵図15では表示されない、という相互に異なった情報が欠落していることから、絵図13・15は直接的な前後関係ではなく、別の祖本から別々に筆写された可能性があろう（第26表V群の項参照）。

なおV群で最も祖本に近いと見られる絵図14は、④城郭中心部の軸線と城下の軸線の僅かにずれ、⑤沿岸部（特に舟入の波止、東浜の塩田）の描写、がIV群によく似ている。したがってV群は、IV群のいずれかを祖本とする可能性がある。

- 36) VI群は、東浜舟入西側の町人地（北浜町・下横町）が新たに埋め立て造成されている様子が描かれていること、また鳥櫓・太鼓櫓のように東ノ丸造営後に建てられた櫓が描かれていること、さらに絵図41で西外曲輪に「米蔵」、桜馬場に「蔵」と表記されていることなどは、絵図が示す「東ノ丸造成以前」という構図に合致しない要素であり、作成年代が下ることを示している。おそらく18世紀以降の情報にもとづくものであろう。その一方で、西ノ丸

14 「城下図屏風」では櫓と長屋として描かれており、城郭中心部の石垣+土塀・多門よりも軽微な防衛施設であることが分かる。

の「蔵」、東外曲輪の「菜屋（魚菜屋）」という記載は、東ノ丸造営以前には存在した情報であるが、前者は東ノ丸造営後のいつ廃されたかは不明で、後者は東ノ丸以後もその外側（東側）で存続する地名である。したがって、VI群の絵図に東ノ丸以前に限定できる情報を見出すのは困難である。

VI群の特徴として、外堀より内側がクローズ・アップされているが、その割に城内のプラン（平面）の描写は極めて簡略なことが挙げられる。軍学図的な要素が認められるが、大手門や東浜土橋門の描写は極めて不正確であり、同様に軍学図的なV群と対照的である。また、桜馬場東端に「サクジ小ヤ」（絵図41）・「作事小屋」（絵図42・44）と表記されるが、東ノ丸造営前にはこの場所は対面所であり作事小屋が存在する余地はない。東ノ丸南半部を占める「作事丸」と混同している可能性があろう。

以上のように、VI群に盛り込まれた情報は極めて不正確かつ混乱が見られ、実地見分を経ないでV群などの先行絵図と18世紀の絵図をもとに作成されたことが考えられる。このことを踏まえると、32)で記した三ノ丸における「屋形」、「此丸城主居住」、「城主居住」、「此丸屋形有」という情報を、II群の「讃岐探索書」での「明屋敷」に直接繋げて捉えることには慎重にならざるを得ない。やはり大島2009で指摘されているとおり、披雲閣のことを示すと見た方がよいであろう。

- 37) まとめると、高松城の実態を描いた絵図として信頼が置けるのは、II・III・IV群であり、V群は城下の描写に不正確な点が指摘でき、VI群は描写そのものに問題が多い机上の軍学図といえる。III・IV群は描写の共通性から祖本を同じくする可能性を指摘したが、そうでなくともIII群は生駒氏改易に伴い作成されたと見られ、IV群は「高松城下図屏風」の下敷きと考えられることから、それぞれの祖本は藩関係者が作成した公的な絵図であると見てよいであろう。ちなみにIII・IV群の違いである單一方格指向（III群）と実態に即した異方位方格混在（IV群）の描法は、18世紀以降の絵図にも共存することから年代的な差異としては捉えられないであろう。またII群は、幕府隠密による作成であるため、概ね情報の正確さを期して作成されたと考えられる。細部の相互比較が今後の検討課題であるが、17世紀前半の高松城・城下の変遷は、II→III・IV群をもとに検討すべきである。

計	西ノ丸西新門建設以前	西新門建設以後	東ノ丸造営以後
I群	絵図6?		
II群	絵図1		
III・IV群 現本	(復縁城縄張?)		
V群		絵図3—絵図5	
VI群			絵図14—絵図15 絵図13
VII群			絵図4
VIII群		絵図12	絵図43—絵図44 絵図46
		(西松城子院跡裏経路)	
		絵図8	絵図4

第26表 初期高松城絵図 系統推定図

絵図番号は、大崎和則2009『高松城史料調査報告書』高松市教育委員会による

香川県埋蔵文化財センター年報

平成26年度

平成28年1月8日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024

香川県坂出市府中町南谷5001番地4

電話（0877）48-2191

FAX（0877）48-3249

印 刷 株式会社 中央印刷所